吾輩は猫ではない 2

兵隊ぐらしとピカドン

江戸家猫八



のびのび人生論 19

のびのび人生論　19

兵隊ぐらしとピカドン

江戸家猫八

「オレは天文学を専攻していたんだ」

伊藤はアゴの無精ヒゲをなでながら、そういった。

その顔は、漫画の「フクちゃん」の中にでてくるアラクマさんによくにていて、目はやさしく円満そのものだ。

「この宇宙のおおきさを考えたことがあるか？　それからくらべたら、この地球なんてチッポケなもんなんだぜ。してみれば、人間はアリよりもっともっとちいさな存在でしかないんだ。それを思えば、戦争なんてバカバカしくて話にならないヨッ。全世界の人間が、このおおきな宇宙の無限の偉大さに目をむければ、おろかなあらそいなんか、おきないと思うけどなア……」

いつもオットリとかまえている彼が、めずらしく熱のこもった話し方をしたので、わたしはいつのまにかひきこまれてしまった。


エドや
No.3



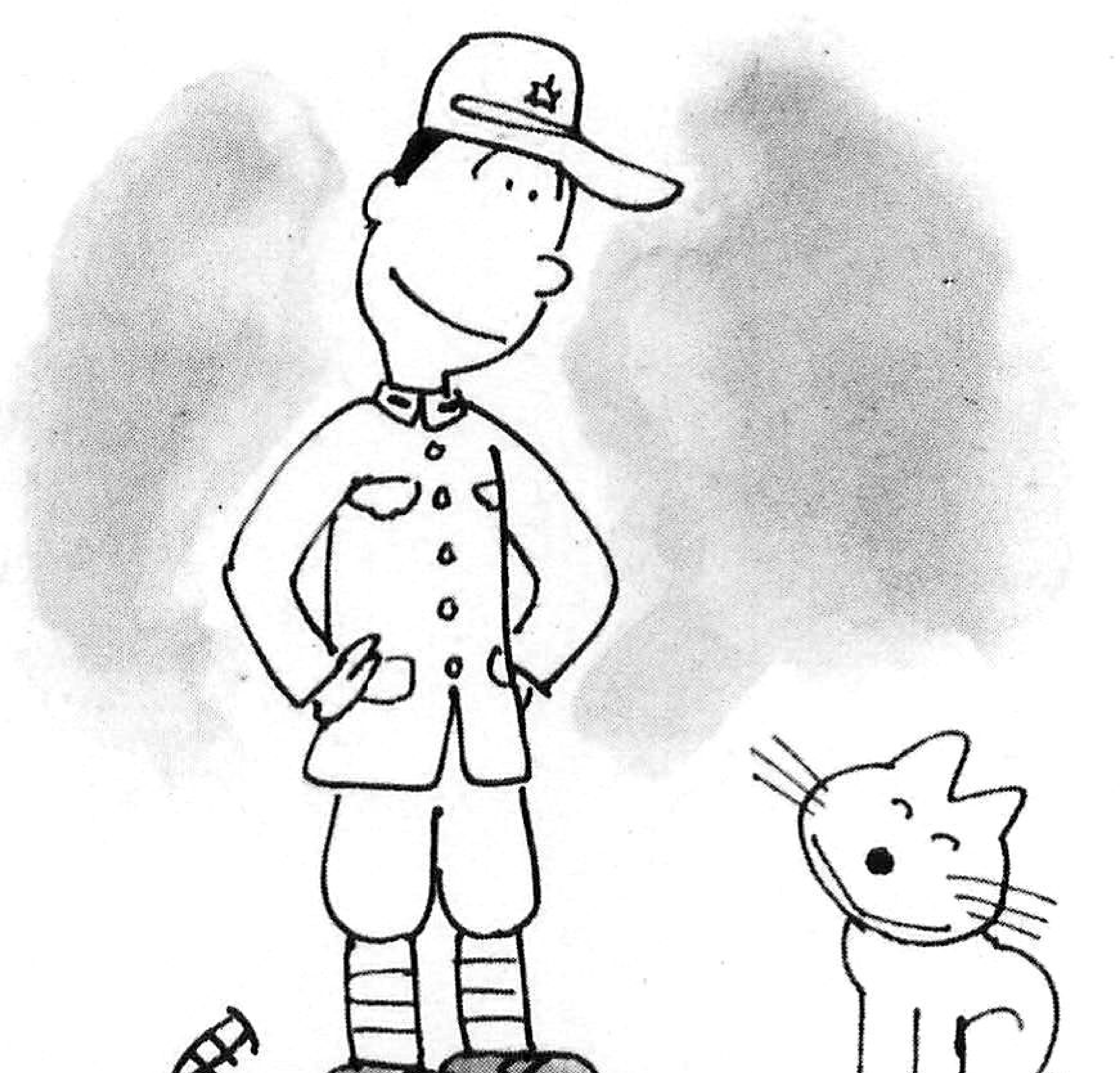
吾輩は猫ではない 2

兵隊（へいたい）ぐらしとピカドン

江戸家猫八

のびのび人生論 19

もくじ

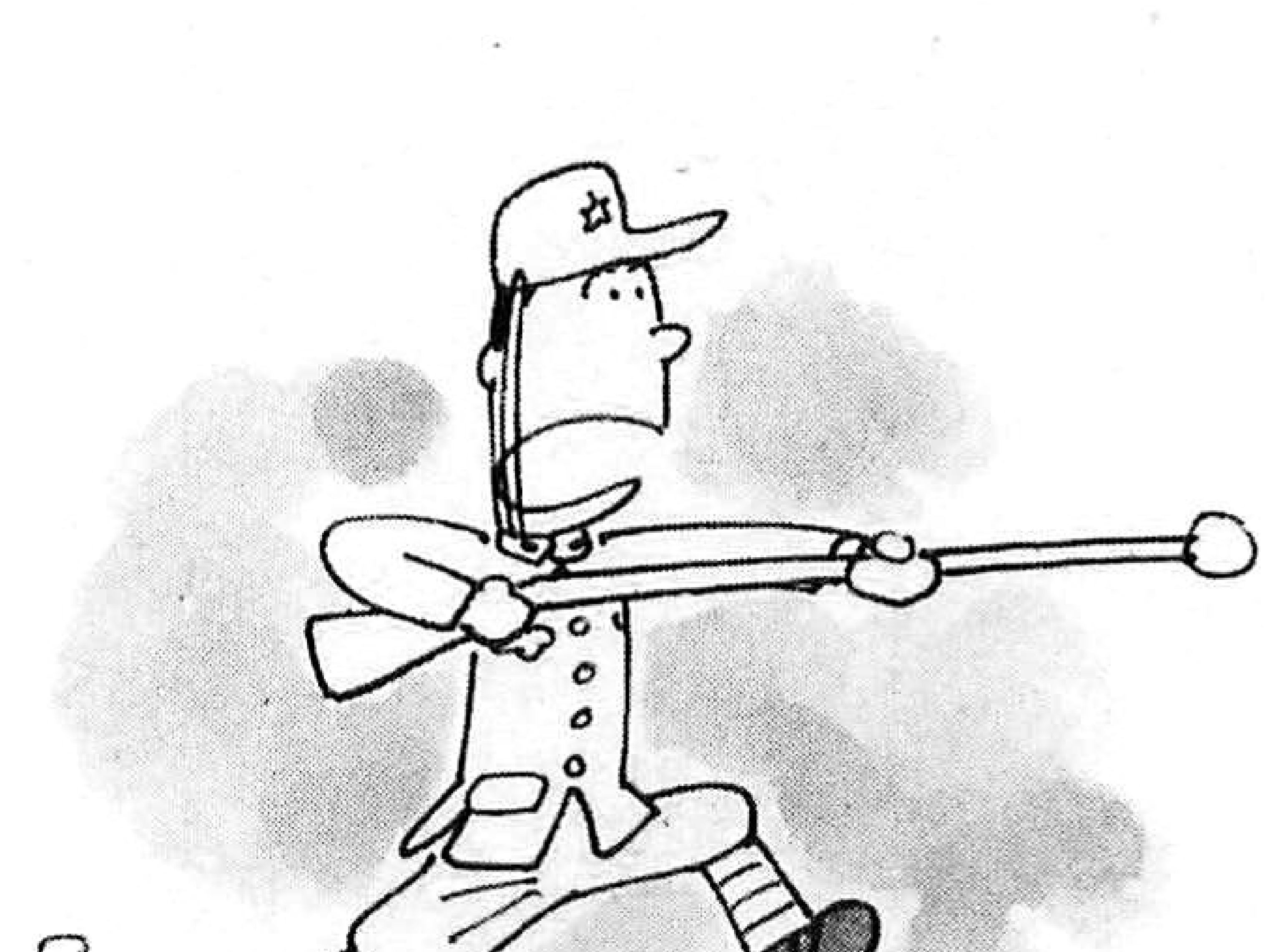


吾輩は猫ではない2

兵隊ぐらしとピカドン

6 やせっぽちの兵隊さん
16 新兵クソサライ
26 頭の上のおまんじゅう
34 女のカエルはなかない
45 あばれ馬の腹の下
58 いざ出陣
70 水葬
83 ラバウル上陸
92 南十字星
103 パラオからマニラへ
111 女は乗せない輸送船

北千島の対空戦闘 120
兵隊カンジョウ 132
まちがいラッパ 141
決死隊 150
火タタキとぬれムシロ 161
入院志願 174
ヤットコ兵長 181
笑わん中将 189
ピカドン 202
召集解除 212
あとがき



表紙画・挿画——馬場のぼる
デザイン——堀木一男

吾輩(わがはい)は猫ではない2

兵隊(へいたい)ぐらしとピカドン



やせっぽちの兵隊さん

タンスのひきだしから千人針がでてきた。

おふくろがわたしのためにいつのまにか、町なかにでてせっせと一針ずつあつめてくれたものだろう。ありがたい話である。

当時、十一貫六百目、なんと三十三・五キロ、女性にもおとるなさけない身体である。ブリキの湯タンポといわれ、あばら骨が一本一本、数えられるほどだった。

兵隊検査では、第二乙種合格のわたしにはまったく縁のないものと思っていたら、ドッコイそうはいかない。

第一補充兵に編入された。昭和十七年九月五日までに新潟県の東部六十八部隊に入隊せよとの召集令状がきた。

まさかと思っていたわたしは、あわててロッパ座長のところへ報告にいった。

「座長、いよいよわたしメにもお召しがまいりました」



「エッ、なにがきた？　だれといっしょにきたんだ」
「ハア…アノ…。しいていえば郵便屋さんといっしょにまいりました」
座長にはお召しという意味がよくのみこめなかったらしい。
召集令状をみておどろいたようである。
「おい‼　これは赤紙じゃないか」
「ハイッ、そのとおりです……」
「へえー。おまえみたいなヤ、セ、ッ、ポ、チ、が戦争にいくようじゃ、いよいよ日本も負けるな」
と、つくづくわたしの身体をながめていた。
もともと役者が召集令状をもらうと、舞台の上からお客さまにあいさつをさせてくれる。
「今回、お国に召されて戦地におもむきます。粉骨砕身、七生報告、御国のためにいってまいります」
客席からは、万来の拍手……。
武運長久を祈ると書いてある日の丸の旗を肩からはすにかけて、戦闘帽をかぶり、手には奉公袋を下げて、お客さまに敬礼をする。
国防婦人会、愛国婦人会の奥さま方が手に手に日の丸の小旗をふって、もよりの駅まで軍歌

で送ってくれる。

〽天に代りて不義を討つ
忠勇無双の我が兵は
歓呼の声に送られて
今ぞ出でたつ父母の国
勝たずば生きて還らじと
誓う心の勇ましさ

万才、万才の声におくられて、駅をはなれる。そんな風景は連日のようにみうけられた。

ロッパ座長は、わたしに舞台からのあいさつも婦人会の見おくりもやるのはよせと、いった。

「どうしてやらせてくれないんですか?」

「おまえみたいな、やせた兵隊がむこうへいってみろ、即日帰郷で、その日のうちにかえされちゃう。そんなおおさわぎをしてでかけてみろ。もしかえされたら、どの面さげてかえってこられる。ましてや、おまえは気がちいさいからとちゅうで自殺でもしかねない。だからやめろ

というんだ」
「したがってセンベツもやらない」
「……」
わたしにとっては、これがいちばんいたかった。
「座長!!　どうしたらいいでしょうね」
「そうだなァ……、必要なものはぜんぶふろしきにつつんで、背なかにしょって、ひと目につかないようにソーッと、でかけろよ」と、きた。
それじゃまるで、わたしはあき巣ねらいである。
上越線だったか信越線であったか、はっきりおぼえていない。とにかくわたしは、新潟県は中蒲原郡の村松というところの東部六十八部隊に入隊した。
なにせ理科室においてあるガイコツの標本みたいな骨皮筋右ェ門のわたしの身体を見て、隊長はおどろいた。
「キサマ!!　ずいぶんやせとるな。風でとばされそうだな。顔色もよくないし、はい病じゃないのか?」
ここでわたしは、とっさにはい病らしい芝居をした。どうせ見おくりもセンベツもなしでき

たんだ。かえれるものならかえらしてもらおうと、「コンコン」とからセキをして見せた。

隊長はあわてて、「ウン、やっぱりはい病のようだな。さっそくレントゲン検査をうけろッ!!」

と、わたしに命令した。

検査場へいったら、わたしよりもっとやせた人が二十人もあつまっていた。それを見てわたしは、やっぱり日本は負けるなとつくづく感じた。

二十人のうち十人ぐらい検査がすんだところで、レントゲンの器械が故障してしまった。

「ダメだ。レントゲンの器械がこわれた。今日はこれまで!! あとのこった者は、明日だッ。明日いちばん先に検査をうけるやつはだれかッ!!」

「ハイッ!! じぶんの番でアリマス」

「ヨシッ!! おまえが明日のいちばんだ。あとのやつはまえの者の顔をおぼえておけっ。これで順番がきまった。今日はこれで解散!!」

と、敬礼をして、それぞれの内務班にひきあげた。

そしてあくる日、

「集合!! 今日いちばん最初に検査をうけるやつはまえへ出ろッ!!」

「ハイッ、じぶんでアリマス!!」と、思いきりおおきな声でへんじをして、右手をたかくうえ

にあげた。
「ヨーシ、キサマ、ほそっこいのにどこからそんな声がでるんだ。元気があってよろしい……。だが、ことわっておくが、まだレントゲンの器械が完全になおっていない。ひょっとすると、キサマ、カンデンして死ぬかもしれない。だが、心配するな。死んだら靖国神社にいれてやるから安心しろッ!!」
そんなことをいわれてもこまる。もし、カンデンして死んで靖国神社へいったら、
「なんだ、キサマ戦死したのならともかく、電気でカンデンしたッ。バカ者!! そんなやつはいれてやらん、でていけッ!!」
ことわられたらいくところがなくなる。それこそ、九段下をウロウロさまよわなければならない。だが、命令にそむくわけにはいかない。目をつむって覚悟をきめた。
だまってやってくれればいいのだが、軍隊というところはやたらに号令をかける。
「ではレントゲン検査を再開する……一番!! いくぞーッ」と、どなった。
スイッチをいれたとたんに、ビビビーッと左の脇の下のあたりから紫色の火花がとびちった。
「ワーッ、たすけてくれーッ」

と、思わずさけんでしまった。

「ダメだ、やっぱりこわれている。したがっておまえをはじめあとのやつも検査なしで、全員合格!!」

なんのことはない。そんならはじめから検査なんかやることはない。とうとう即日帰郷の夢はきえてしまった。

タッタタ、タタタッ。タッタタタタ――

起床ラッパがなりわたる。これをことばになおすと、

「起きろッ、起きろッ、みな起きろッ、起きないと隊長さんに、おこられる――」

と、いうことになる。

まだ夜もあけきらない、くらいうちにおこされるのだからたまらない。前日の演習でクタクタの身体、ラッパの音ぐらいでは目がさめない。すると不寝番という、ねずの番が耳もとで、

「起床――ッ」と、どなる。

おちおちとねてはいられない。パッととびおきて、軍服を身につけて営庭に整列する。

「気をつけーッ、連隊長殿に敬礼ッ。頭――、中ッ」

「なおれーッ」
まだホヤホヤの二等兵のわたしは、緊張のしっぱなしだ。直立不動の姿勢でたっている、そのまえとうしろを伍長、軍曹がうの目たかの目でまわってあるく。どこか落度があったら、ぶんなぐるためなのである。
そのこわい班長殿が、わたしのまえでピタリととまった。やーな予感がした。あんのじょう班長殿は、
「おい兵隊、右のツマさきがでている。やすめではない。ひっこめろッ!!」
と、ケトバされた。
「ハイッ!!」
と、右のツマさきをうしろへさげたらこんどは、うしろを見まわっている班長が、
「こらっ、右のカカトがでている。まえへだせ!!」
と、またケトバした。まえとうしろでケトバシッコをはじめたのである。人間だからいいようなものだが、木でできているピノキオならとっくに足がこわれてしまうだろう。
「班長殿!! じぶんのはいている軍靴は、左より右の方がおおきいのであります」
左のクツが十文三分、右のクツが十一文七分だ。かなり寸法がちがうのだからどうしようも

ないのだが、
「文句をいうなっ!!」と、こんどはよこっ面をなぐられた。
まい日まい日、なんだかわけもわからずなぐられている。なぐられなければ夜も日もあけないのが、軍隊というところ。ある日、勇気をだしてきいてみた。
「班長殿!! じぶんたちはなんでなぐられるのでありますかッ」
と、班長殿はしばらく考えていたが、
「そんなことは、オレにもよくわからん!!」と、またゴツンときた。

★本書の構成上、第一巻『吾輩は猫ではない』の中の「やせっぽちの兵隊さん」の項と重複させました。御了承下さい。

新兵クソサライ

軍隊とは、無理ヘンにゲンコツという。
朝から晩までなぐられない日はない。夜の点呼がおわって消燈まで班長は、ブツブツとお説教をながながやる。そのあと、もう一度、
「足をひらいて、歯をくいしばれ」なぐられるときのきまり文句である。
右のはしから順々にぶんなぐられて、やっと寝ることができるのだ。
タッタッ、タタタタタター、タタタッター
消燈ラッパが遠くからきこえてくる。

兵隊さんは、かわいそうだね――
　また、寝て泣くのかよ――

この文句がラッパの音によくあう。

昼間、酒保（兵営内にある兵隊相手の日用品、飲食物などの売店）で古兵の目をぬすんで買っておいた、アンパンを寝床のなかで泣きながらたべる。半分ぐらい食べて寝てしまうので、朝おきると、あとの半分が、背中の下で、ぺちゃんこになっている。

また、今日も一日なぐられるのかと思うと、気がおもくなる。

馬を中心にして新兵たちがぐるっと、そのまわりにあつまって輪をつくる。

わたしは、一番外側のうしろの方にかくれるように首をちぢめてたっていた。

馬にけとばされるのが、こわかったからである。

「こらッ‼　そこで、かくれている兵隊、一番まえにでてこいッ‼」

「ハイッ」

もちろん、わたしのことである。しかたがないので、かくごをきめて、のこのこと人をかきわけて前へでたら、おおきな馬のお尻が、いきなり目の前にあったので、はっとおどろいてあとずさりをした。

「にげるな、この馬は山泉号という、連隊一のおとなしいネコみたいな馬だ。こわがることはない」

くろい毛をしたおおきな馬である。なにがネコなものかと、内心思いながら、おそるおそる

ちかづいた。
「これから馬の手いれのしかたをおしえてやる。まず、雑布をバケツできれいにゆすいでしぼり、最初に馬の顔や目をふいてやる。いいかッ!!」
班長は手順よく、馬の顔をふいてやった。なるほどおとなしく、じっとしている。その馬は、かわいい大きな目をして、おでこのところに、白い星があった。
カネグシでたてがみをそろえ、身体ぜんたいにブラシをかけてやると、気持ちよさそうに目をほそめた。太陽の光りをうけて、毛づやがピカピカと光ってみえる。
「つぎは前足と後ろ足を順番にあらってやる」
班長は、馬の後ろ足のそばへきて、お尻によりかかるようにして、
「オーラッ」と声をかけると、馬はじぶんで左の後ろ足をひょいとあげた。班長は、その足をじぶんのヒザのうえに器用にのせると、足のさきを洗いはじめた。
四本の足をぜんぶ洗いおわるとツメに油をつけてやった。
「これは蹄油だ。馬のツメがわれないように保護するためにつけるものだ。ワカッタナッ」
「サテッ、一番最後にオケツの穴をふいてやる」
そんなことをしたら、けっとばされやしないかと心配していたら、

「いいかッ!!　シッポをつかんで、グゥーッと上にこうもちあげる」
　班長は、こともなげにやってのけた。
「こうすれば、馬はけることができなくなる。安心しろッ。オイ、そこの兵隊、お前やってみろ」
と、わたしをゆびさした。
「ハイッ」
　よわよわしい声でこたえた。
　だから、前へでるのはいやだったのだ。班長は、一番こわがっているわたしにわざとやらせたのにちがいない。
　おそるおそるちかづいたら、いきなり馬が足をあげた。
「ウワーッ」
と、とびあがってにげ腰になったら、班長におしもどされた。その拍子にドンと、馬のケツに顔をぶつけた。
　むがむちゅうでシッポをつかんで、ウーンと力まかせに、上にもちあげた。馬はじっとしてうごかなかった。
「ああ、やった。やったぞッ。馬のシッポをあげたぞーッ。班長殿!!　ハンチョウドノー!!」

すっとんきょうな声をはりあげたので、まわりの新兵が、どっと笑った。

馬屋当番は、早おきをしなければならない。習うよりナレろ。ナレてもナレるな!! なん日もおなじことをくりかえしていれば、手順もよくなるから、馬もバカにしなくなる。

はじめのころは馬がよこ目でチラリと顔をみて、

「なんだッ、新兵クソサライか!!」

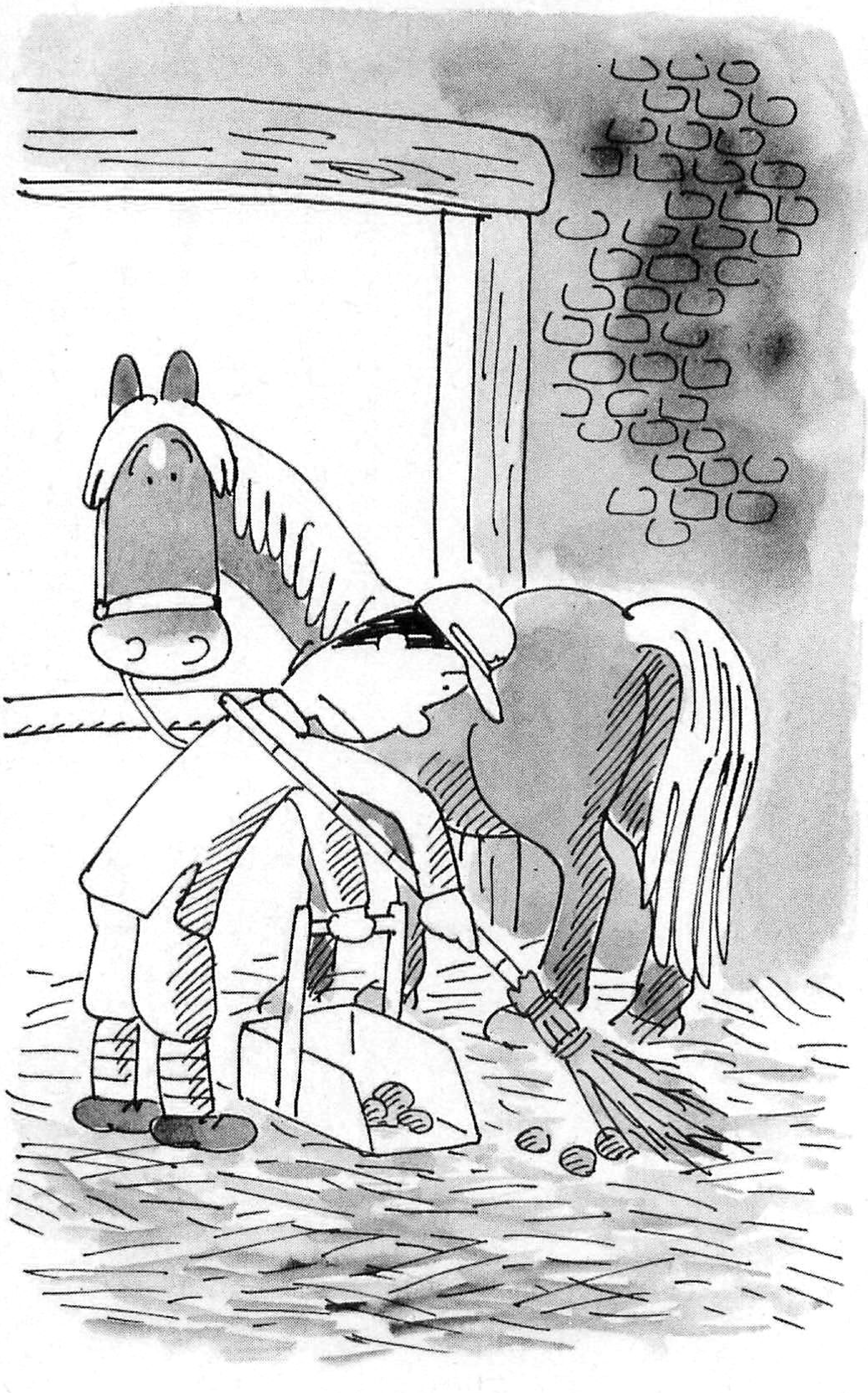
といいたげな顔をするので腹がたつ。

新兵クソサライとはよくいったもの。馬のウンコの掃除はもとより、馬房の中の寝わらをそとにだして干すのだが、これがまたたいへんな仕事である。

馬ふんとおしっこでぬれているワラをかきあつめて、日あたりのいい場所にだす。とうぜん服はよごれて、そのにおいがしみこんでぬけなくなる。連隊中のハエがいくさきざきまでついてくるくらいだ。

そのくらいになると、「オーラ」という声も板についてきて、馬ともすっかりなかよしになってしまった。

そうなれば、かわいいもので、むこうから顔をよせてくるから、仕事はやりよくなる。順序どおりに顔をふき、口のまわりもふいてやる。馬の口のまわりが、あんなにやわらかいとは思っ



てもみなかった。ふにゃふにゃしていて、なまあったかく毛がはえている。
「ウム……。にているなァ……」
意識してもう一度あらためてさわってみたら、ポーッと顔があからんだ。だれもみているわけではない。馬も知らん顔をしているのに、なんだか、じぶんだけがいけないことをしたみたいに、心がそぞろになって、胸の高なりをおぼえた。思えばかなしくもあり、あわれでもある。
ある日、後でやるべきおしりの穴をふいてやるのを、いたずらっ気をだして最初にふいた。その雑布をゆすがずに、顔をふいてやったら、馬が顔をそむけて、「ウフフフ」となったのは、馬でもやっぱりわかっているのだろう。
「ゴメン、ゴメン」と、あやまっているじぶんが、おかしくて、たまらなかった。馬こそいいめいわくである。
手いれもすっかりすませて、馬を馬房にいれて飼馬をやる。馬房のすみには、コンクリートの飼葉用の設備ができている。
そのわくの片すみに蹄油のはいっている、ちいさなカンをのせわすれて、うっかり飼葉をいれてしまった。
馬は腹がすいているので、さっそく首をつっこんだはずみに、そのカンをたおしてしまっ

た。もうのこりすくなくなっていた蹄油が、飼葉とまざってしまったのだ。
食べはじめてしまったら、もうどうすることもできない。あたふたしているうちに、ペロリときれいにたいらげてしまった。
「えらいことをしてしまったぞ!!」
その晩は、心配でねられなかった。
軍隊では、兵隊より馬の方がたいせつなのである。兵隊は赤紙一まいですぐにとんでくるが、馬はそうはいかない。民間からたかい金で買ってくるのだから、病気にでもしたらたいへんなことになる。
夜中にそーッとおきて、「山泉号」の腹に耳をあてがってみたが、べつにゴロゴロという音もきこえない。さいわいごく少量であったので、便が、すこしやわらかくなったていどでことなきをえた。
馬はピーになるより、フンづまりになるほうが、よっぽどこまるのである。だから朝夕、馬に水をのませる、これを水飼いという。
馬が水をすいこんでコクリとのみこむとき、スーッと水が馬の首すじをとおるのがそとからでもよくわかる。コクリ、スーッが一つで、だいたい水一合にあたるとおそわった。

ところが、馬は水をのみたがらないときがある。そういうときは、口のなかに塩のかたまりを、ほうりこんでやる。馬は、のどがかわくから水をのんでくれる。
コクリ、コクリを、すくなくても、二十回以上みとどけなくてはならない。
ワラをたべている関係で、水ののみかたがすくないと、せん痛（内臓疾患にともなって発作的におこるはげしい腹痛）をおこすのだ。そうなったらおおさわぎである。夜中であろうが、なんであろうが交たいで馬の腹をこする。容態がわるくなったら、そんなことでは、まにあわない。おしりの穴に手をつっこんで、フンをつかみだす。ウデは肩のあたりまでいれるらしい。わたしは話できいただけで、じっさいにたち合ったことはない。
馬屋不寝番のときは、とくにこの馬のフンをよく観察しておかなければいけない。
馬がシッポをスーッと上にあげたら、フンをするしらせである。なれた古兵は、とっさにチリトリをもって馬のおしりにあてがう。コロッとおちるまえにうけとめるのだ。一歩おくれてもうまくない。ぴったりとタイミングがあうと、チリトリの中にはいり、ほかにちらばらないからあらためて掃除をする必要もない。一石二鳥である。これはよほどなれたものでないとできない。
わたしも一度やってみたいと思っていたら、そのチャンスにめぐまれた。

「まってました」とばかりに、スーッとシッポをあげた馬のおしりにとんでゆき、チリトリをあてがった。

「うまくいった。さあ、お馬ちゃんどうぞ」

ばかだね、わたしもよろこんでまっていたら、「ピピーッ」と、ゲリ気味(ぎみ)の馬(ば)フンがいきおいあまって、わたしの顔にかかった。

馬はたったまま寝(ね)るというが、なかにはどうどうと横(よこ)になって、しかも、イビキをかいてねている馬もいる。人間とおなじである。

夜はふけていった。寝しずまり、シーンとしているしずけさをやぶってゆったりとよこになって寝(ね)ていた馬が、「ブウーッ」と、おおきなオナラをした。

じぶんのオナラにじぶんがおどろき、あわててとびあがってさわぎはじめた。

このさわぎで、ほかの馬たちも、びっくりしてあばれだした。

「なにをさわいでいやがる。てめえのオナラにおどろいてるとは、なにごとだ。とても世話(せわ)はやききれねえや」

さすがのわたしも、あきれはてて笑うこともできなかった。

頭の上のおまんじゅう

重機関銃手でも歩兵である。

小銃（三八式歩兵銃）の手いれから、とりあつかいの訓練もする。

これはとくに慎重を要する。撃発装置のまま、銃架にかけたり、床尾板（銃の一番下の底にあたる部分）にドロなんかが、すこしでもついていたら、たちまちビンタがとんでくる。

担え銃、捧げ銃、構え銃、着剣射撃など、ひととおりの教練をうける。重機関銃手は、体力がないとつとまらない。まずは早がけからはじまって、土のうかつぎ、鉄棒、平均台、など、連日にわたって訓練をうける。

重機関銃は、小銃とちがって、重いのでひとりで自由にあつかえない。

教練は、それだけにおぼえることもおおい。

前方三百メートルの標的に、照準をあわせた。

「撃てッ!!」

「ババババッヅヅヴーン」と、ものすごい音がする。わたしは目をつぶったまま、撃鉄を両手の親指でおしていた。

班長にコッン、コッンと、重機関銃の前コン（脚のまえについている木の棒）で、頭をたたかれた。

「目をあけて撃て。目をッ!!」

生まれてはじめての経験である。機関銃の音がこんなにおおきいなんて、夢にも思っていなかった。

山間にある、実弾射撃場である。

標準さえあわせておけば、目をつぶって撃っても命中するのだから、たいしたものである。

九二式重機関銃は、総重量が六十キロ、銃身が三十キロ、キャク（脚）が三十キロ。これを四人で搬走する（持ってあるく）。

銃手が一番から四番までで四人。四番銃手が射手で、一番成績のいい者がこれにあたる。

弾薬手が四人、弾薬箱には一連に三十発。これが二十連はいっていたと思う。

あとは馬手が二人、馬が二頭。

一頭の馬には、銃身とキャクをつみ、もう一頭の馬には、弾薬箱を四箱、二箱ずつ左右にの

せる。ひと箱でもおもいものを、四箱もいっぺんにはこぶことができるので、馬のありがたみをつくづく感じる。

分隊長が一名で計十一名の編成で一こ分隊。分隊が、二つで小隊になり、もう一つ上が中隊ということになる。

わたしは、第一機関銃中隊に属していた。

まい日、練兵場で、教練がつづく。

「四人搬走、前へ」

六十キロの機関銃を四人ではこぶときはまだしも、二人搬走になると、ズシリとくる。おもたいものひとつ、もったことのない役者稼業のわたしにとっては、死ぬくるしみであった。手の皮にはマメができて、それがむけてあかくなる。いたいのと重いのの両方だから、たまったものではない。だからといって、ほうりだすわけにはいかない。

歯をくいしばってがまんをする。

「分隊長殿!! もうだめであります。ウデがぬけます」

「よわねをはくなッ!! 頑張れッ!! そんななさけないウデなんかぬけてもかまわん、ぬけても手をはなすな!!」

むちゃなことをいう。漫画じゃあるまいしそうはいかない。
〃軍隊には不可能はない〃、ナポレオンみたいなことをいっている。
おおきな原っぱを走りまわり、小だかい丘をのりこえたり、山の中腹へのぼったりおりたりした。そのたびに、おもたい機関銃をもちあるくのだ。息はハズミ、サンケツで目さきがくらくなってぶったおれるやつがなん人もいた。
演習が終わって、ほっとしたところで、機関銃の部品が、それもちいさなネジがひとつ紛失したことがわかった。
「おそれおおくも、『気をつけ‼』天皇陛下よりおあずかりしている、たいせつな兵器をなんと思っとるのかッ‼　みつかるまでてってい的にさがせッ‼」
中隊中の兵隊が手をつないで横一列にならぶ。そうして目の前を草の根をわけながら、いままであるきまわった場所を、つぶさにさがしながら前進する。日がおちて、くらくなるまでだめならつぎの日も、さがしだすまでやるのである。たとえみつかったとしても、制裁をうける。
「初年兵集合‼　お前たちは、中隊中にめいわくをかけたから、ただいまから対向ビンタをおこなう。おたがいにむかいあって、ならべッ‼　ヨシというまでなぐりあえッ。えんりょして手かげんをしたら、いつまでもやらせる。力いっぱいやれッ、ワカッタカッ‼」

「ハイッ、ワカリマシタッ」

わたしの前に立ったのは、一番なかよくしている長沢文雄。むこうでもそう思っているにちがいない。「手かげんするな」といわれてもむりだ。どうしても手に力がはいらない。

「だめだッ!! だめだ!! そんなことじゃア。もっと力を入れろッ、モットッ!! モットッ!!」

古兵の声が鬼のようにきこえた。

「ゴメンナッ、ゆるしてくれッ」

心のなかであやまりながらなぐる。

「バシッ、バシッ!!」と、音がだんだんおおきくなった。みるみるうちに、みんなの顔があかくなる。

初年兵は、みんな、涙をこらえてなぐりあったのである。

そんな苦しみも一夜あければいつまでもクヨクヨしてはいられない。またまたつぎの訓練が待っている。

初年兵同士はいつの間にか仲よしのグループができる。

長沢文雄、山崎五郎とはとくに仲がよかった。

おなじ東京の出身であるということがそうさせたのである。何かといえば、おたがいに助け

合った。朝から晩まで演習でかけずりまわれば腹もへる。
飯上げラッパがなるのが待ち遠しい。
「かッこめ、カッこめ、カッこめ、カッこめ、そうーら、めしだよ。
かッこめ、カッこめ、カッこめ、カッこめ、そうーら、めしだよ——」
炊事場から飯上げ当番がはこんできて、アルミニュームの食器にもりつけをする。
家にいたときは白米だったので、軍隊の麦めしはなれるまではたべにくかった。
朝めしは、ナスの味噌汁とナスのお新香。昼は、焼ナス、夜はナスの煮つけ、まい日ナスばかりでうんざりした。新潟県は米どころなので、飯はうまかったが、村松というところには、ナスいがいにおかずになるものはないのかと思うほどナスがでた。
〝秋ナスは嫁に食わすな〟というけれど、いくら時季的にナスの出さかりとはいうものの、ナスにおいかけられる夢をみてうなされるほど、たべさせられたのには、閉口した。
入隊したてのころは、うらなりのキュウリみたいなわたしも、連日の演習で、ふらふらになるほどきたえられ、腹ぺこになるまでうごきまわれば、麦めしでもナスのおかずでもなんでもうまい。十一貫六百目のやせっぽちも、日ましに体重がふえて、あっというまに十三貫になった。

うらなりのキュウリは、ほっぺたがふくらんで下ぶくれ。ナスのおかげで、オタンコナス二等兵が、できあがったのである。

入隊してはじめてうつした写真をみると、プッとふきだしたくなるほどの、かわいらしい新兵さんそのものであった。

日曜日に外出がゆるされて、村松の町へでてみたが、べつだん遊ぶところもない。

うどんか、そばをたべて、そのうえおだんごも食べて、もっぱら食いけばかり。勤務で外出できず、内務班にのこっている同年兵に、おみやげをたのまれたので、おまんじゅうを買った。

それだけならまだしも、じぶんのぶんも買いこんだので、かなりかさばってしまった。

帰営時間になったので、そのおまんじゅうをどうやって営内へもちこむかだ。袋にいれて手にぶらさげて営門をはいるわけにはいかない。

考えに考えた末、軍袴（ズボン）のヒザのふくらみのところにしのばせた。それでもまだはいりきらないので、頭のうえにのせて帽子をかぶった。

兵隊は、敬礼をすれば帽子をとる必要はない、これに限ると、すました顔で歩哨に敬礼して、通りすぎようとしたら衛兵司令の伍長がたちあがった。

「チョットまて!!」

スネにきずをもっている。ぎくりとしてたちどまった。じぶんでは気がつかなかったのであるが、軍帽のうえがボコンともりあがっていた。

むろん伍長は、なにが入っているか承知のうえである。

「おまえの頭は、ずいぶんながいなア…？　それとも、コブでもできているのか」

と、ニヤニヤしながら帽子のうえからグッと、おさえつけた。おまんじゅうがつぶれて、あんこが頭のうえにはみだした。

「よしッ!!　通れッ」

帽子がおちないようにおさえながら、はや足であるこうとしたが、ヒザのまわりのおまんじゅうが気になってうまくあるけない。

まごまごしている姿をみた衛兵たちが、ドッと笑った。おまんじゅうをつぶされたのは、わたしで何人目かであったのだ。

ドキッとしたり、ヒヤリとしたりで、内務班にかえってホッとした。

まっていた戦友は、大よろこびで、ぱくついていたが、わたしは、頭についているあんこを指につけてなめながら、二度とおまんじゅうを買うのはよそうと思った。

女のカエルはなかない

一期の検閲とは、いままでの教練の成果をとわれる、たいせつな行事なのである。

雨あがりの練兵場でおこなわれた。

腕章をつけた将校が、各所にたっていて新兵のうごきをチェックしている。

「第一分隊。第一銃手用意ヨシッ!!」

わたしはその目の前で、水たまりのくぼ地にとびこんで、右ウデをあげておお声をだした。

少尉の手がうごいてメモしているすがたを、よこ目でちらりとみた。

意識していたわけではないが、ちょうど、タイミングがあったのだが、われながらうまくいったと思った。役者をしていたのだから、多少芝居っ気がでたのかもしれない。手ごたえありと感じた。

予想はあたった。検閲がおわったあとの講評で、

「第一中隊、第一分隊、一番銃手の行動は機敏かつ、準則できわめてヨシッ」

わたしの身体がピリッと、ひきしまって、胸をそらせ背すじをのばした。
班長が、わたしのほうをみて、ニコッと笑みをもらしたのがたまらなくうれしかった。軍隊ではこうしたことが、あとあとの成績におおきくひびくのである。

「軍人勅諭」

我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率ゐ中国のまつろはぬものともを討ち平け給ひ高御座に即かせられて天下しろしめし給ひしより二千五百有余年を経ぬ……。

これだけでも、全文のたったまだ三行目なのである。

その中からバッスイしたものが、

一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし
一、軍人は礼儀を正しくすべし
一、軍人は武勇を尊ぶべし
一、軍人は信義を重んずべし
一、軍人は質素を旨とすべし

この五か条であり、これはまい晩点呼のとき一人一人にやらされる。できなければ、ビンタの嵐。できるまでおぼえさせられる。そのあとにも、まだまだつづき、ぜんぶ奉読するのには、三十分以上かかるのだ。それをぜんぶ暗記しなければならない。その点、わたしは役者だったので、セリフおぼえがいい。初年兵の中で一番はやく暗記した。やらされれば、すらすらやってのける。役者であったことがとんだところで、役にたったものである。

ほかにもまだまだ、おぼえることはたくさんある。身体はかぼそくて、体力的なものには自信がなかったが、学課のほうは成績がよかったので、実技のほうをかなりカバーしていた。班長にいわれれば、すぐに答える。そこまで信用されると、あとがらくだった。こいつは知っているからいいと、「ハイッ」と、手をあげても、わたしには「お前はヨシッ!!」といって、答えさせない。

ほかのやつがしごかれる。なんでも「ハイ、ハイ」と手をあげていればそれですむ。あるとき、またしても「ハイッ!!」と元気よく手をあげたら、「岡田こたえろッ!!」といわれてとまどった。あまり信用されていたので、それ以来あまり勉強していなかったので知らないのに手をあげたのである。

「わすれました」
「ヨシッ、男らしくていい」
班長は、わたしをとがめなかった。
「わかりません」
と、こたえるとぶんなぐられる。
おぼえたものを、わすれるのはしかたがないが、わからないというのは、おぼえようとしないからだというのである。
軍隊は運隊だ。運のいいわるいではおおきな差がでる。
だから、要領をよくしろとよくいわれるが、おなじ要領でも、手ぎわよくやる要領でなければいけない。らくをしてうまくたちまわると、すぐみやぶられる。その点は、まじめにやらなければならない。
かげ、日なたのあるやつは、てってい的にしごかれる。
厠(便所)やタンツボ掃除。人のいやがる仕事をすすんでやるのはいいが、これみよがしにみせびらかしにやろうものなら、かえってマイナスになる。
〃カベに耳あり障子に目あり〃

だれかがどこかでみているから、まじめにやることが、やはり一番ただしいのだと、わたしはふかく感じたのである。

一期の検閲と前後して、軍旗祭がおこなわれた。

「年に一度の軍旗祭にぶつかるなんて、お前たちはしあわせ者だぞ!!」

と、古兵にいわれた。

各中隊ごとに万国旗をつるしたり、兵舎のまえに、趣向こらしたかざりつけをして、おたがいにきそいあう。

当日、午前中の式がおわると。午後はいろいろの催しがおこなわれる。この日一日は、無礼講である。いつもおっかないおえらいさんもニコニコとなごやかな顔をしている。

だからといって、われわれ初年兵はそうそうはめをはずすわけにはいかない。

前の晩に班長の個室によばれた。

「二等兵、岡田まいりました」

「オウ、入いれッ」

「なにかごようでありますか」

「まあこっちへこい」

班長は、机のうえにあった『ほまれ』の箱から、一本タバコをのぞかせてすすめてくれた。
「まあ、そうかたくなるな。そこへすわって、一服やれッ!!」
と、わたしの顔をみた。
タバコをつまんで、班長の前にあったイスに腰をおろしたが、まだ、入隊して二か月たらず。とても班長の目のまえでタバコをすう気にはなれない。
「岡田、お前は地方にいたとき役者だったそうだなッ」
「ハイ、古川ロッパ一座の青年部におりました」
そのころのロッパといったら全国的に人気があって、知らない者はいない。
「うらやましいなァ。どうだ、明日の軍旗祭で芝居をやれッ」
芝居をやれといわれても、一人じゃできない。それに、今日の明日では、まにあうわけもない。
「じぶん一人では、芝居はできません。演芸会でやるていどの〝ものまね〟ならなんとかできますが」
「そうか、それでいい……。なにしろ連隊の行事だ。各中隊から代表がでてくる。お前も、うちの中隊を代表して、出場するように中隊長殿から話があった。ガンバレヨッ!!」

「ハイ、負けずにがんばります」

「ヨシッ、それではたのむぞ、はやく内務班にかえって、ゆっくりやすめ」

「二等兵岡田、帰ります」

「オイ、チョット待て。これもやるから、持っていけ」

さっきの、『ほまれ』の箱をそのまま、わたしにわたしてくれた。手にしていた一本のタバコも、またその中にいれて物いれにしまって、十五度の礼をして個室をでた。

寝床にもぐりこんで考えた。何をやろうかとしきりに頭をヒネってみたが、水道の蛇口ではないのだから、ヒネれば、でるってものではない。

あれやこれやと考えているうちに、いつのまにかねむってしまった。

大演芸会場とおおきな看板がかかっていた。紅白の幕がまわりにはってあり、会場はすでに大入り満員である。

楽屋でまっているあいだ、責任感と緊張とで、顔面はそう白、身体が小きざみにふるえて、むやみに小便をしにいった。

もともと、わたしはみかけによらず、気はちいさいほうなのである。

いよいよ、じぶんの出番がきた。
かくごを決めて舞台にあがったら客席から、
「まってました。日本一、岡田ガンバレッ」
これはうちの中隊の連中である。
「うまくやれッ!! へたクソッ!!」
これは他の中隊のヤジ、大拍手にむかえられて、マイクの前にたった。
ピッピッピー、コロコロコロ
虫の音が場内にひびくと、客席はすみずみまでシーンと静かになった。
「しめた、これでなんとかいける」
そこで、どきょうがすわった。わたしの身体には芸人の血がながれていた。

〽春まだ浅き　戦線の
古城にかおる　梅の花
せめて一輪　母上に
便りに秘めて　おくろじゃないか――

この歌をきくと、兵隊はみんな泣いた。大の男が大つぶの涙をポロポロながして、
「おっ母さん、達者でくらしていろよ。オレはかならず生きてかえるからな」
だれも彼れも、なつかしいふるさとのおふくろをおもいだして泣いている。お父っつあんを思いだすやつは、一人もいないというのがおかしい。母の愛はつよしである。
そこで、わたしはふるさとをしのんで、
「それでは、田んぼのあぜ道でないている殿さまガエルをやります。ケロケロゲゲゲ。ゲロゲロ、ケケケ。つぎは、女のカエルであります」
兵隊さんは、おもしろい。カエルでも、なんでも、女ときけばよろこんでいる。
「いいぞッ、いいぞッ、はやくやれ——ッ」
なかには、よだれをたらしてよろこんでる者もいる。
そこで、わたしはせいぜい、色っぽくしなをつくって、女のカエルのまねをする。
「ピピピピッ、キュウッキュウッキュウッ——」
一生けんめいやっていたら、まっ黒な顔をしたがんじょうそうな、一等兵が前にでてきて、
「オイ、貴様ッ!! オレは農家の出身であるが、メスのカエルはなかないんだッ。バカモ

ノッ!!」
知らないよ、わたしは東京の人間だから。そのときはじめてメスのカエルはなかないということを知ったのである。芸人として現在、寄席の高座での今の芸は、このときから、ムクムクと頭をもたげ、はぐくまれていたのである。

ひさしぶりに舞台で感じる観客のふんい気、有楽座の舞台を思いだした。遠い昔の旅まわりをしていたころの、おやじの顔もだぶってきた。ヒヤあせものではあったが、なんとか責任をはたして、中隊長からオホメのお言葉をいただいて、面目をほどこした。

軍旗祭がおわったあくる日。きゅうに舞台が恋しくなったわたしは、東京のロッパ先生のところへ便りを書いた。いままでは演習におわれて、そのヒマもなかったが、やっと便りを書くゆとりもできたのかもしれない。その後まもなく、東京から待望のロッパ座長のはじめてのお便りをいただいたのである。

「先日はおたより有がた(と)う、元気で活動の由安心しました。
当方も皆々元気、二十六日出発で初の移動演劇隊で山形県下、鶴岡、山形、宮内等を廻って一昨日帰って来た。

すぐ近くまで行ったわけです。新津のりかえの時、ここから近いナと思った。
一行四十名一同国民服に戦闘帽で軍隊式に行動した。帰京してみたら、牧繁夫が応召、
今日東宝グリルで壮行会をやる。
皆々元気で嬉しい。
今月は十日から映画にかかる、南方へ送り出す大音楽映画だ。それまで数日休養する。
では益々元気で働いて下さい。隊の皆さんによろしく。

十一月二日　　　　　　　　　　　　古川　生

岡田六郎様」

ブロマイドのうらにきっちりと書いてあるこの手紙は、たちまち中隊中、いや連隊中に知れわたってしまった。
「いいなァ岡田、オレももらいたいなァ」
「オイ、岡田、そのブロマイド、オレによこせ。ケチケチするなッ」
と、古兵に強引にとりあげられたり、わたしの手もとにとどかないまま、ネコババされた手紙もあったらしい。

あばれ馬の腹の下

高田、新発田、若松、村松の各連隊の第二師団秋季大演習が、会津磐梯山麓にて、おこなわれた。

十一月十三日に村松歩兵第五十七連隊は出発した。なにしろ、各連隊の連合大演習であるから、行軍そのものも大規模なもので、ものものしく感じられた。

各連隊が、それぞれ会津にむかって集結するわけであるから、会津地方の民家も民宿そのほかの準備で、大わらわであったと思う。

農家の庭さきには、柿の木の実が色づき、道の両側には、稲叢がずらりとならんでいる。

〽万朶の桜か襟の色
花は吉野に嵐吹く
大和男子と生まれては

散兵線の花と散れ

ザクザクザクと軍靴のひびき、一人、一人でうたったんではきけたもんではないが、おおぜいでうたえば、まんざらすてたものではない。

しかも、軍服を着た兵隊が、行軍しているすがたは、たのもしいかぎりである。

完全軍装での六キロ行軍である。ふつうの人が、四キロあるくのにやく一時間はかかる。六キロ行軍というのは、一時間に六キロあるくことなのである。

行軍中に小便がでたくなると、

「班長殿、小便が……」

あとはいわなくても、班長は承知している。隊列をはなれて、その場で立ちションをしていたら、おいてきぼりにされてしまう。そこで、百メートルぐらいさきへ走っていき、ちょうどじぶんのならんでいた列がくるまでに、用をたしてしまう。

「終わりました」といって、そのまま列にはいってあるきだす。

ながいことあるいていると、あっちでも、こっちでもチョコチョコと、前の方へかけだしていく。みんな小便をするやつなのである。

そのうちに、だれも前へかけださなくなる。つかれて、百メートル先まで走る力がなくなってきたからである。

さりとて、その場でやればおいつくことができないから、やむをえず、そのまま、……あるきながら、なりゆきのまま、やってしまうのだ。あまり気持ちのいいものではないが、落ごしてなぐられるよりましである。

目的地につくまでには、完全とはいかないまでもかわいてしまう。なかにはそんな兵隊もいた。もうそこまでくると、へとへとにつかれている。しぜんとアゴがまえにでてくる。

「アゴをだすなアゴを‼　元気をだせ元気をッ」

班長がだみ声でどなる。

おもい足をひきずりながら、あとは惰力であるいているようなものだ。

前のほうから、軍歌の声がきこえてきた。おやおやどうしたことなのかと前方をみると、わかい娘さんのすがたが目にはいった。とたんにわたしのアゴも、もとにもどって、背中もしゃんとのばしてあるく。歩調もザクザクと、軍靴の音も勇ましい。

〽尺余の銃は武器ならず

寸余の剣何かせん
知らずやここに二千年
鍛え鍛えし大和魂

女の子は手をふって、元気づけてくれた。みんなはよこ目で娘さんたちの方をみながらあるいていく。通りすぎてみえなくなると、またもとのアゴだし。その反動はおおきく、まえよりもぐったりとしてしまう。

「アゴをだすなアゴをッ!!」

班長の声も心なしか元気がない。

村松から磐梯山までは百キロ。

かなりの道のりである。

「トマレーッ、小休止」

やれうれしや、小休止。だが、われわれはやすむわけにはいかない。

馬から機関銃や弾薬箱をおろして、馬をやすめなければならない。それから、馬の背中のアセをふいてやり、たばねたワラを二つにおって、馬のスネを上下にこすってやる、これは、か

なり時間がかかる。
やっと、その作業が終わって、さていっぷくやるかとタバコに火をつけたところで、
「出発ーッ」
無情にも、号令がかかる山崎五郎とわたしは顔をみ合せた。
「おやおや、もうデッパツかよ、新兵さんはつらいね」
このときばかりは、馬になりたかった。
おろした機関銃と弾薬をつけおわると、また、あるきだす。
すいかけた、タバコのさきをもみけして、物いれにしまった。なにせタバコの配給はすくないのだから、一本たりともそまつにはできない。
どんなにいそいであるいても、百キロは遠い。そんなことを、なんどもくりかえしているうちに、夜間になってしまった。
まだあるいている。
「もういいかげんに寝かしてくれないかなァ」
そんなことをしていたんでは、演習にはならない。
なおも、人馬は進む。そのうちにつかれがでてねむくなってきた。それでもまだ進む。はん

ぶんいねむりをしながらあるいている。
あるきながら寝ているのか、寝ながらあるいているのか、じぶんでもよくわからない。
じぶんではまっすぐあるいているつもりなのだが、フラフラと列からはなれて道のよこをながれている小川にボチャンと、おちそうになるが、またフラリ、フラリと、もとの列の中へもどってくる。自動車のいねむり運転とおなじようなものである。
無意識にあるいているのだから、人間という動物はつくづく器用なものだと思う。

〽秋は楽しや
みんなそろって秋季の演習
今日も一夜の仮の宿
田舎娘にほれられて
ちょいと出されたサツマイモ
スイスイ（または）ヒヤヒヤ

喜多方の近くの塩川の農家にとめてもらった。晩めしには酒がでた。わたしは一つ星なので、

古兵たちよりすこしはなれてすわった。三人か四人ずつの分宿である。ひさしぶりに家にかえったような気持ちになった。

「兵隊サマよ、こっちきて、一杯おあがりなはんしょ」

と、その家のあるじが酒をすすめてくれた。

「岡田、えんりょしないで、飲め」

「いえ、古兵殿どうぞ」

「さあ、おのみくなはんしょ」

　こんどは、おかみさんが、トックリをさしだした。

「いえいえ、上等兵殿からやってください」

　初年兵は気をつかう。

「おい、お前、なにか芸をやれッ」

　いわれるままにいろいろと芸をやる。

　おやじさんもおかみさんも大よろこびだ。台所で手つだっていたそこの家の娘さんも、わたしの顔をみて笑っていた。ほかの家には、こんな芸人はとまっていない。わたしは大もてにもてた。だからどうしてもわたしに酒をすすめる。えんりょしながらも、杯をかさねた。ときど

き古兵(こへい)の目が光る。気をつかいながら飲(の)む酒はうまくない。殺(ころ)しながら飲(の)んでいるので、すこしも酔(よ)わない。

夜食(やしょく)がすんで、ひと息(いき)ついたところへ、さっきの娘さんが、

「へえーてえーサマ、くたびっちゃべなし。ふろさへえーらんしょ」

と、くたびれただろうから、フロにはいったらどうですかとすすめにきた。

上等兵(じょうとうへい)から、つぎつぎと、えらいもんじゅんに、フロにはいった。シンガリが、新兵(しんぺい)さんのわたし。

おフロにつかって目をとじると、なかしいロッパ先生の歌をおもいだした。

〽お殿様(とのさま)でも、ぼくらでも
お風呂(ふろ)に入る時ゃみなハダカ
裃(かみしも)ぬいで、刀(かたな)もすてりゃ
唄(うた)の一つもうかれ出る
アア――、佐渡(さど)へ佐渡(さど)へと草木(くさき)もなびくよ
アリャアリャアリャサ

ごきげんで歌っているところへ、

「へえーてえーサマ。ゆーかげん、なじょだべなし、あっかんべえーかなし」

さっきの娘さんが顔をだした。

「とてもいい湯かげんです。アリガトウ」

彼女は、パッと顔を赤らめて、うれしそうにニッコリ笑った。その顔をみて、わたしもポーッと身体中があつくなった。

ついでに、背中をながしてもらえばよかったとニヤニヤしていたら、

「岡田!! 貴様、いつまで湯にはいってるんだ。はやくあがって、馬屋当番にいけッ!!」

「いけねえ、オレにはまだやることがあったんだ」

あわてて、フロからあがって、勤務の服装をととのえて、そとへとびだした。

十一月の秋の空はすみわたり、雲一つなく、青い夜空にお月さまがくっきりとうかびあがる。まるで、絵に書いたようなうつくしさであった。

仮設の馬屋は、そこの家からちょっとはなれている。夜道をてくてくあるいていたら、つめたい夜風がホオをなでた。本来なら、酒の酔いがさめるはずなのだが、おさえてのんでいた酒

が、一度にドッとまわってきた。
馬屋につくころには、お月さまが二つにみえていた。ならんでいる馬のおしりの数も、バカにおおい。完全に酔っぱらっている証拠である。
「ヨオーッ、お馬チャン、コンバンハッ。オーラ、オーラ」
わたしは、馬のながい顔をだいて、ハナヅラをやさしくなでてやった。知らぬが仏、気がつかないほどおそろしいものはない。
わたしは連隊一のあばれ馬、「武海号」にだきついていたのだ。前ガミとシッポに赤い布がつけてある。これは、カム、ケル、アバレルの目じるしなのだ。この馬には、みんな手をやいてちかづく者もいないありさまであったのだ。

〽ぬれた仔馬のタテガミを
なでりゃ両手に朝のツユ
おなかこわすなかぜひくな
オーラ……

まったく気づかずになれなれしくふるまう。そのうちに首ったたまにぶるさがるしまつ。「武海

号」がおどろいた。
「こんなに平気でちかづいてきて、なれなれしいやつはいままでにみたことがない。それじゃ一つ仲よくしてやろう」
馬に口がきけたら、さだめしそういったろう。かみつくどころか、こんどはむこうから顔をすりつけてきた。かわいいものである。
「オーラ、ヨシヨシ」
はんぶん寝ごとだ。ムニャムニャいいながら、いつしか馬によりかかって寝てしまった。ガサガサと顔にワラがかかり、ちくちくいたいので、うす目をあけて上をみたら、なんと、わたしは馬の腹の下で寝ていた。
ゴソゴソとはいだして、ひょいと馬の顔をみたらなんと、なく子もだまる「武海号」であった。はじめて気がつきびっくりぎょうてん、全身にゾーッと寒けがして、しばらくその場に立ちすくみ、身うごきができなくなった。
連隊中からおそれられている、あのあばれ馬も酔っぱらってるとはいえ、はじめからすこしもこわがらず、やさしく親しくちかづいていけば、馬はまったくあばれなかった。それどころか、寝ているわたしの身体のうえにじぶんの寝ワラを口でよせあつめてかけてくれるやさしい

心をもっていたのだ。

わたしはあらためて馬におしえられた。人間と動物の心のふれあいがどれほどたいせつであるかということを、いたいほど感じさせられたのである。

「整列!!」

朝の点呼である。

「中隊長殿に敬礼——頭——中——ッ」

「ナオレーッ」

例によって、われわれの前後を班長が見まわりはじめた。と、わたしの前でピタリととまった。

「またしてもオレかッ?」

「おいッ!!　お前の編上靴どうしたのか」

今回は両方おなじおおきさのクツをはいているのに、おかしいなと思いながら、じぶんのクツをみて二度ビックリ。なんとわたしのクツだけがまっ黒で、しかもピカピカと光っているではないか。軍隊ではクツズミは使用しない。保革油というとうめいの油を革の保護保存のためにつけるだけである。

ねぼけまなこではいてきたために、まったく気がつかなかったのである。班長から大目玉をくっているわたしの姿を遠まきにしてみていた町や村の人たちの中に、昨夜お世話になった家の娘さんがいた。今のありさまをみて、あかい顔をして手をあわせて頭をさげ、しきりにあやまっている姿が目にはいった。

「そうだったのかッ」

彼女が、親切にクツの手いれをしてくれていたのだ。それも、わたしのクツだけ黒いクツズミをたっぷりつけて、ピカピカにみがきあげておいてくれたのである。

やがて、中隊は行動を開始。両側でわかれをおしむ人たちをあとに出発した。

手をふって見送っている彼女にわたしは、

「お世話になってアリガトウ、クツのことなんか気にしなくってもいいんだよ」

ことばにはだせないが、心の中でそういって目礼したら、彼女はかた手を上にあげてペコリと頭を下げ、「ごめんなはってくなんしょ」

と、ちいさな声が、わたしの耳につたわってきた。その目にはキラリと涙が光っていた。

兵は磐梯山のふもとにむかって、モクモクとあるきはじめた。

いざ出陣

たった三か月のみじかい期間ではあったが、お世話になった村松の連隊から、千葉県の佐倉の連隊へ転属することになった。
わたしはまっ先に愛馬「山泉号」のところへいった。
「おい山泉、達者で暮らせよッ!!」
鼻づらをなでてやったら、顔をすりよせてきた。
もう生きて、ふたたびあうことはあるまい。
馬は利こうだ。ちゃんとわかれることを知っているのだ。その目は心なしか泣いていた。
お芝居で〝塩原多助、愛馬の別れ〟というだし物があるが、あの多助の気持ちがよくわかった。
いつまでも名ごりはつきない……。
なん頭もいた馬の中で、いまでもはっきりおぼえているのは、あのあばれ馬の「武海」と、

おとなしい「山泉」の二頭である。

いよいよ出発の日がきた。

中隊長に転属の申告をすませ、古兵にあいさつをしたあと、連隊をあとにする。

昔、もののふ（武士）が出陣のときは心身をきよめ、いでたちもあらためて、戦場にのぞんだとか……。

それにひきかえ、われわれの着ているものときたら、連隊中で一番着古した、軍服、はきつくしたチビッタ編上靴、連隊にあたらしいものをのこし、古いものを整理するためのものらしい。それこそオンボロ、サンボロ、あらめの行列という、みじめないでたちであった。

「岡田、お前きたときは、やせっぽちだったが、ずいぶん丈夫になったなァ……兵隊らしくなったよ。戦地へいったら水に気をつけてガンバレヨッ。死ぬなよッ、生きてかえってこい」

と、あのにくらしい古兵たちが肩をたたいてそういった。

「ハイッ、お世話になりました。古兵殿も、お元気で……」

そのあとは言葉がつづかなかった。

泣きつらをみせたらみっともないと、ガマンをしていたが、営門をでて、

「万才!!　万才!!」と、おくりだしてくれた古兵たちの観呼の声をうしろにきいたとき、ポツ

りと涙がホオをつたわった。おそらく、わたしだけではなかったと思う。いじめられ、なぐられても、やはりわかれはつらくさびしかったのである。

佐倉の部隊は、軍旗がフサだけしかのこっていない。それほどはげしい戦場をかけめぐってきた、由緒ある連隊である。

佐倉義民伝でもおなじみの地で、わたしはおやじと、いっしょに旅興行できたことがある。ちいさな旅館にとまった。ちょうどそのときが豆まき、節分の日だったので、なおさら記憶にのこっていたのかもしれない。

連隊はその佐倉の城跡で、村松の連隊とはだいぶおもむきがちがう。

佐倉で編成をととのえるため、あちこちの連隊からあつまってきたものとみえ、知らない連中もたくさんいた。

おのおの内務班がきまり、いちおうは落ちついたようでも、寝ぐらがかわると、勝手がちがうのでなにかと不便であった。

村松からいっしょにきた連中は、いつもひとかたまりになってメダカや金魚みたいに、おなじようにうごきまわっていた。

朝はやく起床して、班長の個室を掃除にいった。かたづけがおわって、内務班にかえったら、

まだ掃除がおわっていなかった。

「岡田、お前は班長殿の当番で、オレたちよりはやくおきてはたらいてきたのだから、一服してやすんでいろよッ」

同年兵は、ありがたいもの、みんなでそういってくれたので、わたしはそれにあまえてタバコに火をつけて思いきりすいこんで、フーッとけむりを上にはきだした。朝の一服はとくにうまい。

「オイ、コラーッ、みんながはたらいているのに貴様一人が、タバコをすっているとは、なにごとだ。こっちへこいッ」

廊下のそとに、上等兵が仁王だちにたっていた。

「足をひらけ!!……歯をくいしばれッ!!」

足をひらけというのは、なぐられたときよろけないように、歯をくいしばれというのは、舌をかまないために口をむすんで、歯をくいしばるのである。

バシッときた。ひら手打ちでも、ゲンコツでもない。上靴(兵舎内ではくスリッパのこと)でなぐられたのだ。

これはいたいなんてものではない。

バシッ、バシッ、一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、はじめのうちは、数をかぞえていたが、そのうちにわからなくなり、気がとおくなってしまった。

顔にぬれた手ぬぐいをのせて手あてをしてくれた戦友たちが、

「岡田ゴメンナッ!! オレたちが、よけいなことをいったから、いけないんだ。かんべんしてくれなッ!!」

と、気づかってくれた。

しかし、考えてみれば、たとえどうであろうとも、じぶんがわるかったのだからしかたがない。

それにしても、まのわるいときにみつかったものである。

顔ぜんたいがはれあがって、とてもじぶんとは思えないむざんな顔になってしまった。班長が、このことを知って用もないのに、わたしを個室によんでくれて休ませてくれた。田丸伍長という、二度目の召集できた人だけに年輩でもあり、物のわかった温厚な班長さんであった。

まい朝の行事がおわると、佐倉の町へかけ足で、ひとまわりさせてくれる。これが日課になっていたのも、この班長のとりはからいなのだ。一日に一回でも、営外にでて街の人とも顔をあわせることができるのは、とてもうれしいことだったのである。



編成を組んで、中支、北支、南支、南方、北方と各方面へ派遣されるまでは、この連隊の居候みたいなものであるから、べつだんすることがきまっているわけでもない。ぶらぶらさせておくと、たるんでしまうので、それ相応の訓練はしていた。

今日も今日とて、出発前にちょっと時間があったので、厠(便所)へいって用をたすことにした。

厠の戸をコンコンとたたくと、

「オーウッ」

と、返事がかえってくるのが古兵。

「入ってます」

これは、どうやら初年兵のようである。銃剣の帯革をまるめて、戸の内側にかけているのは、なれている古兵。なまいきに、わたしも一度そのまねをしてみたかった。よせばいいのに古兵のふりをして、まるめた帯革をちょろっとひっかけて、しゃがんでいたら、これをみていたらしい古兵が、わざとあらあらしく、ドンドンドンと戸をたたいたためにそのハズミに銃剣がはずれてガチャンとおちてきた。便器の穴から下へおっことしたらたいへんだ。わたしはあわて、それをうけとめようとしたら、手にもっていた巻脚絆を肥ツボの中へおとしてしまった。

便器の両側に手をついて、穴の中に足をいれ、両方のツマ先ではさんでやっとひきあげた。巻いてある脚絆のよこ側についているウンコを便器の角へこすりつけたが、きれいにとることは不可能である。そうこうしているうちに、集合の合図がかかってしまった。

もうまにあわない。「エエイ、ママヨ」と、そのまま足に巻いてしまった。

よこのフチの部分だから、はた目でみてもチョット気がつかない。そのまますましてあるいていたら、まわりの連中が、

「クセエナァ……だれかもらしたんじゃねえのか？」

と、あたりをキョロキョロ見まわしているうちに、視線がわたしのほうにあつまってきた。

まさか、犯人がわたしであるとは、だれも思っていない。

天気がよかったので、帰ってきたときには、もうきれいにかわいてしまった。ほどいて、もんだらコナになってとんでしまい、あらうほどのこともないので、それをまたクルクル巻いて二つを一つにまとめて、巻いたハシをおり目にはさんで、たかだかと上空にほうりあげ、キャッチャーフライをうけとるような格好でうけとった。

「ヤッタ!!」と、思わずニッコリ笑った。

ウンを天にまかせたというのは、このことである。

ロッパ先生からのお便り。

「此の間、姉さんが家へ来てくれて、大変結構なお菓子を貰いました。ありがたう、留守してゐたので礼も言へなかった。ついでがあったらよろしく伝へて下さい。

いよいよ南方へ！　何卒充分健康に注意して、大活躍して下さい。

僕は、今夕ロケーションから帰って来た。

『音楽大夜会』は『音楽大進軍』と改題した、南方へ音楽が大進軍する。此の方が元気でいいだろう。

伊豆長岡から三島の近くの滝で、相当の冒険撮影をして来た。滝の上の崖で、岸井明とモミ合ふので、一歩ふみ外せば滝へ落ちるのだから、キン玉がちぢみ上がった。

此の撮影が二十四、五日まででアガリ、それから稽古に入って正月公演だ。

『花の行進曲』

『交換船』

『ロッパの猿飛佐助』と定った。

急がしいが、元気だ、安心して呉れ。

元気で出発を祈る。

十二月十六日夜　　　古川　生

岡田六郎様」

此の間、姉さんが家へ来てくれて——という姉さんとは、じつはわたしが後にいっしょになった女房のことである。

年が七つも上なので、ロッパ先生のお家へうかがったとき、「岡田六郎の姉でございます」といったのだろう。座長は兵隊からかえってからでもまだ、「キミの姉さん」といっていた。

わたしが、明治座のメッセンジャー・ボーイをしていたころ、おなじ明治座の切符係りをしていた彼女が、「それならわたしが、一人前の役者になるまでめんどうをみてあげるから、一生けんめいガンバんなさい」と、はげましてくれた。

浜町公園の清正公様のちかくで、〝魚長〟という魚屋の三番目の娘である。

当時、わたしは兵隊にいくまえから、その魚長さんの二階に世話になっていて、そこから、ロッパ一座にかよっていたのだ。

前売り切符売場の主任をやっていた関係で、当時（戦争中）でも、めずらしいお菓子が手にはいったらしく、わたしが兵隊からかえったとき、すこしでも立場がよくなるようにと、姉と称して、ロッパ先生のところへ、ちょくちょくたずねてくれていたらしい。

——いよいよ南方へ。

というのは、わたしが村松にいたときに、それらしい便りをだしておいたのである。そのころ、佐倉でいよいよ編成することになり、われわれをあつめて、派遣される方面を各自希望しろといわれた。

わたしは、寒がりだったので、南方がいいと思い、「じぶんは南方がいいでアリマス」といったら、「理由はなにか？」ときかれたので、「バナナがたべられるからでアリマス」と答えて笑われた。

まだまだ、そのころは軍隊もよゆうがあったようである。

船舶隊という部隊がある。船に乗船すれば、船長待遇で、朝ははやくおきることもなし。そして、日本の沿岸を警備する。食事も上等だ。とくに魚がうまい。

「希望者はいるか!!」

これは、わたしにはうってつけの部隊であると思い、よろこんで志願した。いつも弥次喜多

みたいになかよしコンビであった長沢と山崎も、「岡田が行くならオレもいく」と、すぐにくわわった。

中村と国広は中支がいいと、まよっていたが、けっきょく知ったやつがよけいいたほうが心づよいと、われわれと行動をともにした。

昭和十七年十二月十九日の朝、佐倉を出発。東京駅から広島の船舶隊にむかうことになった。東京駅と日本橋浜町の明治座は目とハナのさきである。電話をかければすぐ面会にきてくれるのだが、わたしは、

「ヘッ、こちとらア、江戸っ子だい。中途半端にあったって未練がのこる。ここは、一番いせいよくでかけようじゃねえか」

と大見得をきった。やせがまんも、いいとこである。

なかには、連絡がとれて、かけつけてきた家族もいた。それをよこ目でチラリとみて、わたしはうらやましく思った。

ハナッパシばかりつよくったって、さびしがりやの江戸っ子は、ツッパラかったまま、東京駅をあとにした。

水葬

広島の船舶砲兵隊第一連隊（暁二九五三部隊）に到着したのは十二月二十日十二時、第十七中隊蓮尾隊におちついた。そこにも、ふるい兵隊がまちかまえていた。今まではケタがちがう。五年兵だの、六年兵という猛者がずらりとそろっていた。

「なに？　船長待遇で、朝は寝坊ができて魚がうまい。日本の沿岸だと……」

べつの古兵がわりこんできて、

「オイ、バカもやすみやすみいえ。この部隊には満期なんてないんだよ。かえりたければ、白木の箱にはいれといわれた。なにしろ地獄部隊だよッ‼」

船舶隊のおっかないお兄さんにいきなりおどかされた。

なるほど、満期になっても除隊できない古参兵がうようよしていた。

「お前たちは、㊙要員といって、南方方面へ派遣されることになってるんだ」

「ゆくさきはラバウルだよ」

「えっ、日本の沿岸ではないのでありますか？」

「地図をみてみろ。ラバウルは日本の占領地だ、したがって日本の沿岸ということになる」

「………」

船舶兵として、なんども乗船した、すじ金いりの古兵の話には、迫力があった。

南方焼けで顔はマックロケ。さすが戦地できたえた貫ろくは、内地の古兵とはまるでちがう。

「南の島へいったら、ロウソク病といってな、身体がだんだんとけてしまうおそろしい病気があるんだ。あげくのはてに、椰子の木のまわりをグルグルまわってくるい死にしてしまう」

「………」

「敵の潜水艦の攻撃をうけてみろ。魚雷にあたれば、三分でゴウチンだ」

「………」

「船がしずんで助かってもフカにおそわれれば、イチコロだよ」

おっかない話ばかり。

「これは、バナナどころのさわぎじゃないな」

われわれ初年兵は、顔を見あわせてフーッと、ため息をついた。

「えらいところへきてしまったなァ……」

いまさら、気がついてももうまにあわない。

われわれは、船舶兵としての訓練をうけた。手旗信号、モールス信号と、歩兵であるにもかかわらず、まるで水兵のような教育には、すっかりめんくらってしまった。

十二月二十日といえば地方ではもう年の暮れであわただしい。しかし、ここでは師走の風は吹いてこない。なにもかもめずらしづくめで、昭和十八年の一月元旦、軍隊ではじめての正月をむかえた。

一月上旬乗船予定のわれわれは、三が日外出を許可された。村松、佐倉とはちがって、広島市内の中心地の繁華街は、やはり都会。大きなデパートも映画館の数もおおく飲食店も東京なみ。遊廓もある。遊ぶのにはことかかない。

もうすぐ南の島へ出発する。日本での最後の思い出にと、お女郎屋さんの店さきまでいってみたが、うろうろするばかり、はずかしさがさきにたって、そのまま、すごすごとかえってきてしまった。

映画もみたが、題名も内容もおぼえていない。

おそらく、最前線へつれていかれる不安と恐怖が心の中にあって、足も地につかない、不安定な気持ちであったのかもしれない。

いよいよその日がやってきた。

昭和十八年一月十四日午後四時三十分。日秀丸に乗船。よく十五日の夕方、宇品港を出帆した。

乗船したのは、われわれ重機関銃隊のほかにも高射砲、機関砲、そのほかの各種がまざった混成部隊で、ラバウルに輸送されあちらで再編成して作戦に参加する、まったく人員だけの輸送であった。

船倉は二段に、仕切られ、上下にぎっしりとつめこまれ、はなはだきゅうくつなものであった。

機関銃手は、三十一名六個小隊が、一か所にたむろした。わたしの小隊は、石田時一上等兵、を小隊長に杉本喜三郎一等兵、それに長沢文雄、中村恵英、岡田六郎と初年兵三名計五名。あとの連中も、それぞれの小隊にわかれた。山崎五郎は生駒丸に乗船、ここで袂を分った。小隊同士がとなりあわせになっているので、初年兵はみんな連絡をとりあっていたので心づよかった。

上等兵、一等兵は東部六十二部隊から、東京駅で合流した仲間である。

釜山に立ち寄り、門司をとおり大分県の佐伯湾から、日秀丸はラバウルにむかって、南へ進

路をとった……。
内地をでてなん日ぐらいたっただろうか。もう右をむいても、左をみても、島かげ一つない大海原。
もうマナイタのうえのコイ。いまさら、ジタバタしてもはじまらない。船上の生活にもなれてきた。
ラッパがならないのがなんとなくたよりなかったが、軍律はあいかわらずきびしい。
飯上げは、営内生活とちがってたいへんだ。甲板から船倉の中へせまいハシゴをつたって、おりなければならない。
しかも、両手に飯と汁をもっているので、海がシケてよこゆれでもしようものなら、フラフラヨロヨロ、ひとつまちがえば、ころげおちてしまう。
船がゆれて気持ちがわるくなったなんて、いってはいられない。
これこそ必死である。
その中で兵隊たちは、パクパクと大飯をくっているのだから、ナレとはおそろしいものだ。

〝大本営発表〟

――ソロモン方面にて敵有力部隊と激戦。戦艦二隻、巡洋艦三隻、撃沈せり。

これから南方にいくわれわれにとっては、まことにたのもしく、うれしいニュースであった。ま冬の二月だというのに、夏服と着かえた。船の両側にイルカの大群。海中からとびあがって、くろい背中を光らせているそのすがたは、勇壮そのもの。海の青さと波しぶきは美しく、われわれの目をたのしませてくれた。

暑さは、日をますほどきびしくなり、半ソデ半ズボンの服装になったが、暑くて夜は寝ぐるしい……。

ビー、ビーッと、ブザーがぶきみに鳴る。

「潜水艦発見!!」

あわててとびおきて、甲板にでる。これは連日にわたっておこなわれる。船上における演習である。

日秀丸の警備にあたっている船舶兵は、そのたびに所定の守備につくが、われわれは輸送されている身のうえなので、船倉から甲板にでたりはいったりで、まるで、イヌにおいつめられた、タヌキかムジナみたいなものである。

洋上にでれば、乾そうナッパと、水不足になやまされながら、航海をつづける。

兵隊の数のわりに便所がすくない。朝のラッシュどきは、国鉄なみである。

船尾にひとつだけ、一人用の便所がついている。ところが、これが軽便といおうか、カンタンというか、板が二まい船のそとにニューッとつきでているだけのもの。それにまたがり、デッキにつかまりながら用をたすのである。しかも、青空天井ですがすがしいこと、天下一品。臭気もなく、ながめはよし。これぞ世界一の水洗便所なのである。船員のためのものなのか、あまり使用しているすがたをみたことがない。

満員の盛況でならんでいたが、どうにも、がまんができなくなったわたしは、せっぱつまって、この便所のお世話になることにした。服装は、かんたんであるから、おしりをだすのはさほど苦にならない。

しかし、かた手でつかまっていないと、海の中へおちてしまう。天気晴朗なれど、波たかし、シャガンでいるケツのすぐそばまで波がくる。スーッと波がさがったときをめがけて、ウンをおとす。まことにそう快そのものである。

ともあれ、太平洋のど真中でやるこの気ぶんは、筆舌にはつくしがたい。

飛行機と潜水艦攻撃のおそれは、じゅうぶんに考えられる。船板一まい下は地獄、思えばお

そろしくて夜もおちおち寝てはいられない。船の機関室からきこえてくるガシャコンガシャコンという音がやけに耳にひびいてくる。

赤道祭りだといって、赤道をこえるとき、アメをとかしたような、アメ湯が配給になった。

ぶじ航海を祈る船員さんたちのならわしなのだそうである。ひさしぶりの甘味でもあり、めずらしいので、ありがたくいただいた。いただける物は何でもいただいた。

炊事の飯をたくおおきなカマにおこげがこびりついていた。これをはがして、オセンベイがわりにたべたら香ばしくて、なかなかうまかった。

「これはいけるぞッ!!」

いじきたなしの連中は、たびたびこいつをたべては雨水をのんだ。

村松をでるとき、古兵から「水には気をつけろ」と、あんなに注意をされていたのに、ついのどがかわいたので、のんでしまったのだ。

水にあたったのか消化不良をおこしたのか、たちまち何人かがはげしいゲリにおそわれた。

いたみがキューッと、したっ腹にさしこんでくる。便所へいく、またさしこんでくるのくりかえし。ただでさえ、数がすくなくて、不自由しているところへ、このさわぎである。たちまち、便所は腹くだしの列をつくった。

やっと、用をたして船倉にもどって、横になると、また、さしこんでくる。
それから上にあがってならんだのではまにあわない。
そこで戦友が、あらかじめならんでいてくれる。順番がくると、
「オーイ、岡田、番がきたぞーッ」
と知らせにきてくれる。だから、ひとりでは役にたたない。ゲリもしていない長沢、国広、中村と村松、当時の同年兵がならんでくれた。
じぶんがするわけでもないのに、くさいのをがまんして、他人のために、順番をとってくれた。この人たちにわたしはたすけられたのだ。ほんとうに涙がでるほどうれしかった。
ぐったりとして寝ていたら、ボーッと、汽笛の音がきこえてきた。なんだろうと思っていたら、
「水葬霊」だと、石田上等兵がおしえてくれた。
佐藤とかいう二等兵、われわれの仲間ではなかったが、ゲリがはげしく脱水症状をおこして死亡したらしい。
船のうえで死んだら、水葬になる。
夏の軍衣袴を着用して、編上靴に巻脚絆、日の丸の旗で上半身をつつんで、布の袋にいれら

れて、板の上にのせられる。板を持ちあげてななめにすると、スーッと、海中におちてしずんでいく。

船は汽笛をならして、そのまわりをグルッとひとまわりして、もう一度、汽笛をならして、その場をさり、わかれをつげる。

「ボーッ」

二度目の汽笛を、わたしは寝ながらきいた。

「このつぎは、オレの番かなァ……」

両手を胸のうえにかさねて、じっと目をつぶっていたわたしの目じりに涙がにじんだ。

「岡田、しっかりするんだ‼ 元気をだせッ‼」

石田上等兵が、わたしの身を案じて、寝ずにマクラもとで看病してくれた。軍医殿にこっぴどくおどかされたが、どうやら、死なずに一命をとりとめたのである。

ラバウルはもうちかいらしい。船内があわただしくなってきた。

敵の潜水艦が、徘徊しているという情報がはいったらしい。

今回の船団は、日秀丸をふくめて輸送船が四隻。海軍の護衛艦が船団の前後についてくれて計六隻。

広島を出帆して、ラバウルに入港するまでに、ふしぎといえば、敵機の空襲にもあわず、潜水艦の攻撃もうけずに、ここまでこられたのが信じられない。

ラバウルに入港を目前にして、魚雷の一発でもくらったのでは、いままでの苦労も水のあわである。

対潜監視は、ますます厳重になった。なにせ敵は海の中にいる。いつどこでてくるかわからない。

船団は、神経をとがらせながらも、ラバウルにちかづいていった。

濃霧がさいわいして、ぶじラバウルに入港。二月十八日の朝八時である。ラバウルの港は、右手に小高い山(火山)があり、そのおくに日本海軍の飛行場があって、大航空要塞である。湾内には、三十隻ちかくの大小の船が停泊していた。

岸辺には、まっ赤な船底をさらしている船が二隻。敵の空襲をうけて、爆破されたものらしく、その巨体も無残。

明日のわが身をみせつけられたようでゾーッとした。

うしろに山をひかえ、その前面が基地になっていて、海辺にはいくつもの桟橋がならび、われわれの上陸をまっているかのようにもみえた。

その夜、はやくも敵機は来襲した。

夜空にくっきりと、その機体がうかびあがった。何機かの編体である。

上空からも、敵の照明弾が投下される。

その明るさは、目をみはるばかり、ラバウルの基地ぜんたいが、みごとにてらしだされた。

敵機は、つぎつぎと爆弾を投下する。

その爆発音の物すさまじさは、はじめての戦闘を目のあたりにみたわれわれには想像もおよばないものであった。

わが方も対空戦闘にはいる。

高射砲、機関砲、そして、友軍の戦闘機も、これをむかえうった。

双方が撃ちあう機関砲の曳光弾の光がいりみだれる。

ピュッ、ピュヒューッ、ババーン

光と爆発音は、戦闘経験のないわれわれには、まるで両国の川開き、花火をみているようなうつくしさである。

空襲のおそろしさを知らないわれわれは、船の上から上空をあおぎ、高見の見物である。

あまりのみごとさに、わたしは思わず、

「玉(たま)やーッ!! カギやーッ!!」

と、どなった。

とたんに頭にゴツーンと、ゲンコツがとんできた。あたりまえである。アッというまに敵機(てっき)はひきあげた。

それでも、基地(きち)の弾薬庫(だんやくこ)、そのほかにかなりの損害(そんがい)をこうむったようである。

明日(あした)は、そのラバウルに上陸(じょうりく)する。

その晩(ばん)は、興奮(こうふん)のあまり、夜明けちかくまで寝(ね)られなかった。

ラバウル上陸

前日の爆撃のキズあとは、なまなましくのこっていた。ラバウルに上陸したわれわれは、桟橋で上陸用舟艇からおりてくる、前線から引き揚げてきた兵隊にあった。

ヒゲはぼうぼう、目はくぼみ、まっ黒に日焼けして、憔悴しきった顔と、やせほそった身体。ぼろぼろの衣服、足に負傷した人を両わきからかかえるようにしてくる、その姿はこの世の人とは思えない。それでも、小銃をしっかりとかついでいた。

「ガダルカナル島から生還してきた人たちではないかなァ」と、思ったがくわしい事情はさだかではない。

その人たちをみたわれわれは、身がひきしまり、さだめし激戦の中をくぐりぬけてきたであろう。戦闘のすさまじさと、苦闘のあとをまざまざとみせつけられ、頭のさがる思いでいっぱいになったのである。

連隊長に上陸の申告をすませ今後の指令をまった。

青空にまっ白な雲がポッカリとうかんでいた。南国の太陽がジリジリとてりつける。暑いが木かげにはいると、それほどではない。内地とは湿度がちがうせいだろう。

前方の椰子の木かげに毛布をかぶって、ぶるぶるふるえている兵隊をみた。

「おいみろよ。ふるえているぞ。広島できいたローソク病ってのはあれじゃァないかな?」

「バカッ、あれはマラリアにかかった患者だよ。熱のでるまえに寒けがしてああして、ふるえがくるんだ」

「へえー。オッカネェナアー」

わたしはみるもの、きくものがすべて未知のことばかりなので、ただただ、おどろき、ため息をつくばかりである。

「カにさされると、マラリアに感染する。各自じゅうぶんに気をつけるよう」

と、小隊長から注意があった。

夜はカヤをつってくれたので、心配はなかった。昼間はどうするのかと思ったら、防蚊面、防蚊手袋が支給された。そんなものを着用していたら、暑くてどうにもならない。

密林の中を行軍するようなときなら使用するのかもしれないが、現地ではだれひとりとしてつかっていない。

朝おきてカヤをたたみ、毛布をかたづけ地面に敷てある板をめくってみたら、長さ三十センチぐらいのまっ赤なムカデがニョロニョロと、数ひきはいだしてきた。

「ウヘーッ」

わたしはとびあがった。

それともしらずに、昨夜そのムカデのうえに寝ていたかと思ったら、寒けがした。これをみていた班長が、ニヤニヤ笑っていた。ムカデや、ゲジゲジなんか目ではないのであろう。カヤをつってあったかたわらのおおきな木のホコラの中に黒いヘビがいた。カラスヘビといっていたが、そんなヘビはみたこともなかった。

「もういやだよ。こんなところにはもうとってもいられないよ」

わたしはベソをかいて、その場からにげだした。

人間はびっくりしたり、緊張したりすると、便意をもよおす。そうでなくとも、朝のゴアイサツはまだすんでいない。

わたしは昨日のマラリア患者を思いだした。おしりをだせば、カの餌食になることは、まちがいない。さりとて、軍袴（ズボン）のおしりのところに穴をあけるわけにもいかない。さて、どうしたものかと、ない頭をひねった。窮すれば通ず、名案がうかんだのである。

わたしは慰問袋から、手ぬぐいを二本だして、そのさきをむすんでタンコブをつくり、両手にもつ。用をたしているあいだじゅう、その手ぬぐいをふりまわして、カをおっぱらうのだ。

作戦はみごと効を奏した。

手ぬぐい二本のおかげで、わたしはマラリアにも、デング熱にもかからなかった。なんでもやってみるにこしたことはない。船中での腹くだしはまだ完全によくなってはいなかった。だから、一日に数回はこの手ぬぐい二本のお世話になっていた。

高射砲の弾薬箱をはこぶ使役にかりだされた。

四発いりの箱を背中にしょわされる。かなりの重量である。

「そらッ!! いいかッ! よいしょッ」

ずしりときた。おもいのなんのって、そのまま、その場からうごけなくなってしまった。

「こらッ!! はやくはこばんか、なにをやっとる」

「ハイッ!!」

上官の声にグッと、下っ腹に力をいれて、一歩前へでたとたんにピーッともらしてしまった。

「なんだ、お前ゲリをしていたのか。それをはやくいわんかい。ヨシッ、お前はもういいからやすんでいろッ しかし、しまらんやつだな……」

しまらないのは、わたしではない。黄門様の方である。
椰子の木かげで休んでいたら、
「おいお前たちに、椰子の水をやる。のんでみろッ」
と、上官のさしだしたその水たるや、青くさくてのめたものではない。
「ペッ」と、その場ではきだしてしまった。
「うまくないらしいなッ!! ヨーシそんなら椰子の水がこんなにうまいものだということをおしえてやるからついてこい」
上官はうら山へわれわれをつれていった。ふといおおきな竹が密生していた。
「おいお前たちでこの竹をきりだせ、わかったかッ!!」
「ハイ、わかりました」
竹をきらせるのに、椰子の水をのませてからとは、どういうことなのだろうと思っていたら、まもなくわかった。
三十本ほどのふとい竹をきって山からかついでおりてくれれば、もう全員アセびっしょりである。
「ごくろう、小休止!!」

のどは、カラカラにかわいてしまった。
そこで上官は、
「サア、この椰子の水をのんでみろ」
と、またさしだした。
「どうだッ、うまいだろう。さっきのとおなじ椰子の水なんだぞッ」
そりゃうまいよ。のどがからからなんだから、なにをのんだって、うまいのはあたりまえである。
現地ラバウルでは、自給自足、なんでもうまくくふうして生活していた。
パパイアの青い実を、ぬかみそづけにしたお新香。バナナの天ぷら。両方ともオツなものである。
ラバウルというところは日本海軍の大航空基地なので、どちらかといえば、陸軍さんよりはばをきかしているように思えてしかたがなかった。
水道のくだに札がさがっていた。
〝海軍専用につき、無断使用を禁ず〟と書いてある。
きいてみたら、陸軍さんが、海軍のひいた水道から水をぬすみのみしたというのだそうだ。

それじゃア、まるで子どものケンカである。

いよいよ、われわれ機関銃隊に命令がくだった。

海上トラックといわれる、小型船に機関銃をつんで、乗船。甲板には、樹木をたくさんつみこみ、あたかもちいさな島のようにみせかけた。昼間はじっとしてうごかず、夜間そろそろと行動をする。その作戦に参加するために、はるばる宇品からこのラバウルまでやってきたのである。

兵器受領のために広場に集合した。

ねじったアメン棒のような放熱筒の機関銃をみせられた。九二式重機関銃にくらべたら、まるで軽機のようにたよりないものなので、「これは新兵器かな」、そんなふうにみえたこの兵器は、じつは、たいへんな古物で、なんでも支那事変当時のものときかされておどろいた。弾薬箱に印刷されている製造年月日もかなりあたらしい。なんとなく、物資が不足してきたような気がして、いやな予感におそわれた。

けっきょく、機関銃の数がすくないため、われわれのところまでゆきわたらない。

したがって、いつまでもラバウルにとどまっていたのでは、食料そのほか、なにかとむだになる。

長野丸に乗船。広島は宇品の本隊に帰還せよとの命令がでた。
なんのことはない。なにしにラバウルまできたのかわからない。
ラバウル滞在二週間で、身体の調子もほとんど快復していた。
もう、ふたたびこの地にくることはないだろうと、二、三の戦友と湾内で泳ぐことにした。
船のわきで、バチャバチャさわいでいたら、
「バカモノ……、はやくあがれ、サメにやられるぞッ!!」
海軍の上級水兵がタライのような丸っこいボートにのって、おお声で知らせてくれたのである。
「ウヘエッ、そりゃたいへんだ。にげろっ!!」
わたしたちは、あわてふためいて縄バシゴにつたわって、甲板にはいあがった。
一番最後にあがったわたしが下をみたら、人間のおおきさぐらいのサメが数ひきあつまってきて、今、われわれが泳いでいたあたりを、ゆうゆうと回游している。
間一髪で、この世からおさらばしなければならなかった。おそろしさに足がふるえた。
「岡田ッ!! あぶなかったなァ。もうすこしで、ガブリとやられるところだった」
一番さきに上にあがったやつが、わたしの肩をたたいた。

わきにいた船員の一人が笑いながら、
「だいじょうぶ、食いつきやァしないよッ。あれは猫ザメだったんじゃないのッ?」
じょう談じゃアない。助かったからいいようなもの、やられていたら、一生のフカク。酒落にもならない。

南十字星

内地では、ひな祭りの三月三日の夕方。長野丸は、ラバウルをあとに洋上へでた。敵の行動は、日ましに活発になってきている。こちらの警戒もまえにもまして、厳重になった。
対潜、対空のため昼夜のべつもなく、一時間交たいで海上を監視した。
南国の太陽の下で一時間の勤務は、たいへんである。とくに日中の暑さはたまらない。ギラギラとこげつくような直射と、海面からの反射熱で、頭がふらふらする。これじゃ、南方ボケにならざるをえない。
すんだ空に、ポツンと一つ黒い雲がみえた。と……みるみるうちに、その黒雲はおおきくひろがり、大つぶの雨をふらせる。
南方特有のスコールである。
監視兵が、
「オーイ、スコールがくるぞーッ」

と知らせると、兵隊たちはゾロゾロと甲板にでてきて、あらかじめ身体中にセッケンをつけてまっている。そこに、おあつらえむきにザーッと雨がふってきて、あらいながしてくれる。南方ならではあじわえないそう快さである。

「スコールがくるぞ。はやくセッケンつけて身体をあらえッ!!」

なかにはごていねいに、頭にまでつけてあわだらけ。

「待ってました」まではいいのだが、たまたまスコールが、コースをかえてしまうときがある。

「サヨウナラ、ハイチャイ」とよそへいってしまった。

待っていた連中はたまらない。

頭のさきからツマさきまでセッケンはかわいてガビガビにこわばってしまう。

「よわったねッ。これがほんとの、そらだのみ」

自然とは、人間の自由にはならないものなのである。

わたしが監視兵の勤務についていたとき、このスコールにあった。まさかセッケンをつけるわけにはいかないが、そのまま立っていればビッショリとぬれネズミ?

それこそ、フンドシはおろか、その中身までが水びたし。いちいち衣服はぬいではいられない。

そのまま、一時間も立っていれば、カラカラにかわいてしまうのだから、その日ざしの強さが知れるというものである。

ビーッ。ビーッ。ビーッ。

長野丸の非常警報がけたたましくなった。

「スワッ!!」と、全員が甲板にでたとどうじにドスーンという爆発音。おなじ船団をくんでいた、桐葉丸に魚雷が二本命中。

桐葉丸はゴウチン。三分間でわれわれの目の前からその姿をけしてしまった。

船尾からじょじょに沈んでいく。そして最後に船首を空にむけて、ツッ立つようにして海中に没してしまった。

桐葉丸の乗員にとっては、この三分の時間はみじかかったにちがいなかろうが、見ていたわれわれにとっての三分間は、ずいぶんながく感じたのである。

船体がみえなくなると、そのまわりの海上には油が一面にうかんだ。バラバラに爆破された船の木片につかまって、助けを待つ乗員の救助も思うようにできない。とつぜんの攻撃は、戦死者の数もおおくなり、その損害はおおきかった。

わたしの乗船していた長野丸は無事。おなじ船団の水戸丸は船首に魚雷が一本命中したのだ

が、不幸中のさいわい不発におわったとはいえ、ぶあつい鉄板をうちやぶり、直径九メートルものおお穴がポッカリあいてしまった。

ゴウチンされた桐葉丸の姉妹船で桃葉丸が後日、おなじ海域で、沈没したとか、その因縁のふかさをつくづくと感じさせられたのである。

晩は、雲一つないきれいな星空であった。

村松からの初年兵仲間の伊藤弥太郎とわたしは、船首の甲板にならんで腰をおろし、その星空をみあげていた。

「岡田、アレをみろよッ!! あそこにキラキラ光っているのが、南十字星という星だ」

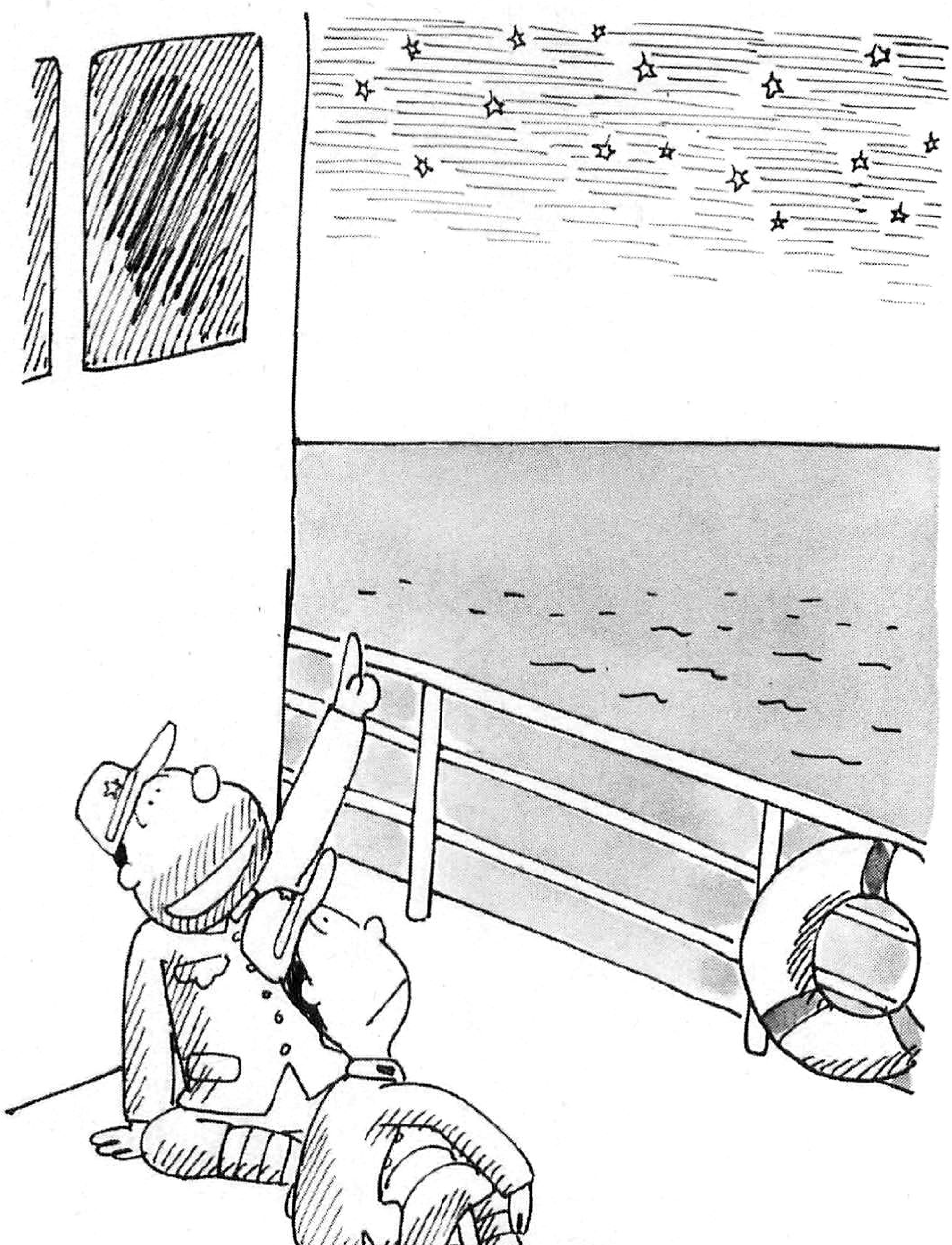
と、ゆびをさした。

彼は大学をでているのに、幹部候補生にもならず、われわれといっしょに一つ星の初年兵にあまんじている男なのである。

「北斗七星というのは子どものとき、東京の空からでも、よくみたことがあるが、あれが南十字星か……」

「ウン、アレは日本からではちょっとみられない。沖縄あたりからでやっとかな。ケンタウルス座のちかくにある星だ」

「へえー、お前ずいぶんとくわしいんだなア」
「オレは天文学を専攻していたんだ」
伊藤はアゴの無精ヒゲをなでながら、そういった。
その顔は、漫画のフクちゃんの中にでてくる「アラクマ」さんによくにていて、目はやさしく円満そのものだ。
「この宇宙のおおきさを考えたことがあるか？　それからくらべたら、この地球なんてチッポケなもんなんだぜ。してみれば、人間はアリよりもっともっとちいさな存在でしかないんだ。それを思えば、戦争なんてバカバカしくて話にならないヨッ。
全世界の人間が、このおおきな宇宙の無限の偉大さに目をむければ、おろかなあらそいなんか、おきないと思うけどなア……」
いつもオットリかまえている彼が、めずらしく熱のこもった話し方をしたので、わたしはいつのまにかひきこまれてしまった。海上にもキラキラと夜光虫が光っていた。
伊藤弥太郎は、広島へ帰ってから爆雷隊として隆洋丸に乗船。その後の消息は、ヨウとして不明。
無事に生きていれば、わたしのところへ便りでもあるのだが……。



パラオ島に入港。
われわれは広島へ帰る途中なので、べつになにをすることもなくパラオの街を見物がてら、おみやげを買いにあるいた。まことに、のんきなご身分なのである。
原住民のお店の前に左右に男女一対の全裸の人形がしゃがんだ姿でおいてある。木ぼりの実物大で、トコベ人形といい、その人形の一番のとくちょうといえば、男女ともに、そのものずばり、モチモノがちょこんとついているのが、しぜんでかわいらしくもあり、ほほえましくもあった。
人形のおおきさは大小いろいろあったが、一番ちいさいものを一対手にいれた。
海軍指定という看板のでている店がやたらとおおいのが目についた。
海上生活はなにかと不自由であろうという配慮なのかもしれないが、それなら、船舶兵もおなじことなのだが、服装が陸軍の兵隊なのだから、説明しても、わかってもらえなかった。
酒場らしき店にはいって見ると、
「イラッシャイ、ナニスル」
頭の毛のもじゃもじゃした女が、カタコトの日本語でむかえてくれた。
「酒、アルカ……?」

なにもこっちまでカタコトでしゃべることはないのだが、そういわないとつうじないような気がしたからだ。
女はだまったままで、お酒と小ザラにのせたモンキーバナナをもってくると、テーブルの上にのせて、わたしの前に腰をおろした。
酒のシャクをするでもなく、ただ、だまーってジーッとわたしの顔をみているだけなのには閉口した。
話したくても、言葉がわからないのではやばやとその店をでた。
外へでてから「ナニスルカ」といっていたが、もしかすると酒のほかになにかしてくれるのかな、なんて思ったりしてもみたが、二等兵の分際でそんなだいそれたことも、できそうにないので、そのまま、おとなしくトコベ人形をだいじにかかえて船に帰った。
船にかえると、夜食のオカズに「カツオ」のさし身がでた。
「ヨーッ、アリガタイネェーッ。南の島でオサシミなんぞとは……」
わたしは、オデコをたたいてよろこんだ。
ところが、せっかくのカツオなのに、ショウガもワサビもないときている。
「チクショウ。ショウガとニンニク、ネギのきざんだやつをいれて、タタキになんぞしたら、

コタエラレねえんだがね……」
場所が場所である。そんなぜいたくをいったって、そうはとんやがおろさない。
となりの小隊の宮本上等兵が、
「オレ、さし身はだめなんだ。岡田、これ炊事へいって焼いてきてくれ」
とたのまれた。
いっそ、そのほうが気がきいているかもしれない。演芸会で顔を知られているわたしは船員ともなかよく、なにかと便宜をはかってくれるので、こういうときには、アリガタイ。
ひさしぶりに内地の気ぶんをあじわった。
船内ではまい日ごろごろしているだけ。退屈をすると、ロクなことはしない。
花札遊びがはじまった。だれがもちこんだのか、ところどころにたむろして、おなじみのコイコイやオイチョカブをやってひまをつぶした。
お金のかわりにタバコをかけた。
はじめのうちはおとなしいが、だんだんあつくなってくると、タバコの本数もおおくなり、やったり、とったりしているうちにタバコがいたんでくる。ちゃんとしていたタバコが、そのうちに中身がぬけて、紙の筒だけになってしまう。それでも一本、二本、と目の色をかえてや

りとりしていた。
やりとりといえば原地人がちいさな舟で本船の下へきて、バナナやパパイアや、果物やら、おおきなものになるとベッコウの甲らまでもってきて物物交換をする。
こちら側はハミガキ、セッケンなどの日用品や薬品など、とくに性病の特効薬なんかはよろこばれた。
それらの事情にくわしい船員さんたちは、それをあてこんでかなりいい商売をしていた人もいるらしい。
なかにはいたずらをして、水のはいったビールビンを本物みたいな顔をしてバナナととりかえたやつがいたが、そんなかわいそうなことをしてはいけない。
だけど、彼らもなかなかお金もうけがうまい。子どもなんかも兵隊に、
「椰子の実をとってやるから、お金をください」とせびる。
小銭をやると、あのたかい木に両手、両足をのばしたままするすると登ってゆき、上までゆくと両手で木につかまり、両足のさきで椰子の実をはさみ、クルクルとヒネルようにまわすと、ポロリととれる。それをポーンと下へおとす。
ボヤーッとして、よそみでもしていようものなら、ポカッと頭にあたって死にかねない。

「あんなことは、オレだってできる。木登りは、おとくいなんだ。銭なんかやることはないよ」

と。鈴木重十郎が、この椰子の実とりに挑戦した。なるほど、するすると登りはじめた。

「よう、なかなかやるじゃないか、たいしたもんだよ」

みんなははく手をして、彼に応援した。土地の子どもは見あげながら、ニヤニヤ笑っていた。

登るのは、だれでもできたらしい。かんじんなのはおりるときなんだそうだ。

両手両足をのばしているので、登りのつかれがでて、おりるときは木のミキにだきつくようにしないとおりられない。

ところが、木の皮がガサガサしているうえに上をむいている。

だから登るのはらくなのだ。両方の手足をのばしたままで登りおりするのはむずかしい。

とちゅうでだきついた鈴木の胸や腹はすりむけて、赤むくれになってしまった。さすがの鈴木もお手あげ。

「いやいや、まんずまんず、こわかったなア。まいったよ」

と、胸と腹をさすりさすり頭をかいてうなだれていた。

子どもたちは、シテヤッタリと手をたたき、「ワーッ」歓声をあげて、にげていった。

パラオからマニラへ

敵の有力機動部隊が、パラオ島周辺に集結接近中という情報がはいり、員数外のわれわれも動員された。

ラバウルとはちがって、機関銃はある。タコツボ（一人用の塹壕）にはいり、そこに機関銃をすえて、敵が上陸してきたら、これをむかえ撃つということらしい。

「弾薬は一箱、あとはコブシ大の石っころを塹壕のまわりにつみあげる」

「なんですか？　その石っころというのは？」

「機関銃の弾薬を撃ちつくしたら、その石っころを敵にぶつけるのだ」

「石がなくなったら、どうしますか？」

「そうなったら、ゴボウ剣があるだろう」

「そのゴボウ剣で敵の中へきりこむのでアリマスカ？」

「そうではない。そのときは、そのゴボウ剣で腹をきって死ねッ」

忠臣蔵じゃあるまいし、腹きりだけは、かんべんしてもらいたい。

しかし、万が一そうなったばあいは、わが軍の将兵は、捕虜のはずかしめをうけてはならない。いさぎよく割腹。自害しろ、これが武士道の精神であると日ごろおしえられている。

人間は、おいつめられるとつよくなる。そのときは、そのときだと、ひらきなおって覚悟をきめた。

ところが、どうしたことか敵の機動部隊は、作戦を変更。パラオ周辺から姿をけしてしまったのである。その運のつよさに、じぶんながらおどろいた。

われわれは、宇品に帰ったら、ただちに北方の作戦に参加することになっている。これもまた、兵隊情報なのである。

〝鬼のいぬまに洗たく〟即刻パラオを出港することになった。ところが、こともあろうに、船首におおきな穴のあいている、あの水戸丸に移乗することになった。なんでわざわざこわれた船にのるのかわけがわからない。

船員は、

「この船はちょっとしたシケにあっても、バラバラになって沈んでしまうぜ」

と、こともなげにいった。

クワバラクワバラ、〃一難去ってまた一難〃である。

ポッカリと穴のあいている一番ハッチには海水がたまり、その中にサメが二頭泳いでいた。

船はそのまますすんでいる。

無事マニラ入港。ヨタクリ船は、ガンバってくれた。

ネジはゆるみ、穴はあき、ガタガタにくたびれた水戸丸が、無事にマニラに着いたのも、お前が乗っていたからだと、シャレッ気のつよい船員がわたしの顔をみて笑っていた。

昔から〃オスの三毛猫〃は、船の守護神といわれている。

マニラ湾にはいると、白いサンゴが青い海にすきとおって、ひろびろとひろがる。そのすきまをパイロット船に、案内されながら、しずかに進んでいく。夕日が赤くマニラの岸壁を黒くうきあがらせた。その美しい情景はいっしゅん戦争をわすれさせた。

水戸丸は修理のためにドックいりした。そのあいだわれわれには、外出の許可がでた。

上陸に際して、一人あたり二十円を日本銀行で軍票と交換した。そのほかに、ふつうは十円が七円にされるところを、とくべつに八円に換えてもらい、すこし余分にもって外出したのである。どこにでも、そうした裏取引きがあるものだと感心した。

船からおりると、すぐに、フィリッピンの子どもたちが、クツミガキの道具をもって、タバ

コタバコとしつっこくあとをおってくる。
港で働いている人たちも、兵隊のすてたすいのこしのタバコを、ひろいあつめていた。マニラではタバコに不自由しているらしく、船内でバクチのカケにつかったタバコが、いまさらながらおしまれた。そのくせ、お金さえだせば売っているのだが、ようするに貧しくて、その人たちには買えないのである。
葉巻五本カンいりが一円。
紙巻きのクインスター十本入り二十五銭。ウイスキーの上が二円。ジンが二円五十銭。図嚢(軍隊で将校、下士官が使う革製の箱型カバン)は十五円。運動グツが四円。これは石田上等兵のおみやげである。買物はお金よりタバコと交換した方がよろこばれた。
おなじ数のタバコでも、十こなら十こをきちんとそろえてならべるよりも、フロしきみたいなものにいれて、あい手の目の前で、バラバラッと、その場にひろげるようになげだすと、数がたくさんみえる。なれた兵隊はこうしてほかの者より、とくな買物をした。
小桧山も図嚢と子どものクツを買ったとよろこんでいた。石田上等兵は、進級もまぢかなのでちかぢか図嚢も役にたつが、小桧山は、一つ星のホヤホヤ、下士官になるのには、まだほどとおい。しかし、そんなことを気にするような男ではない。船に帰ってからもうれしそうに、

ニコニコしながら、その図嚢をみがいていた。

金がたりなかったと、革脚絆を買ってこなかったのがせめてものすくいであったかもしれない。

頭に白いターバンを巻いた赤ら顔のおじいさんが、白いカイゼルヒゲを風になびかせて、中央の交叉点で交通整理をしているのが印象的であった。

中心街をちょっとはずれたところにたべ物の店があった。氷屋の店さきに白地に赤い字で氷とそめぬき、下に青でなみ模様のある旗がでていたのにはおそれいった。

まさか、マニラの街なかで、この旗におめにかかろうとは、夢にも思っていなかった。

店の壁に書いてあるメニューもなつかしい。そのなかに、〃氷金時〃と書いてあったのがなんともうれしかったので、さっそく注文してみた。

だされた氷金時なるものは、日本の氷あずきのうえにさらに、イチゴのシロップがたっぷりかかっていた。あまいのなんのって、これはあまり日本人むきではない。

外出できなかった連中に洋菓子とモンキーバナナを買った。

わたしは、真珠のついたブローチと香水をみやげに買った。

それもこれも、水戸丸の船首に不発弾があたって、船がドックいりしたおかげである。

水戸丸の修理がおわるまで、マニラに滞在できるものと思っていたら、玉鉾丸という、昔の船にのりかえることになった。

うそかほんとかしらないが、この玉鉾丸は、日露戦争のとき、日本海の海戦でつかわれていた古い船だときかせれて、またもやうんざり。

マニラの港をでるにはでたが、速度が六ノットそこそこ。たよりないことおびただしい。まあ、おそくてもいつかは宇品に着くだろう。

南支那海から台湾にむかって海はあれにあれまくった。波のたかいのは有名である。船はそれこそ木の葉のようにもみくしゃにされた。

これが水戸丸であったら、ひとたまりもなく沈んでしまったかもしれない。それを思えば、おそいなんて文句をいったらバチがあたる。

東支那海度胸でわたるといわれているが、南支那海もそうとうなものだった。

〃待てば海路の日和りあり〃

台湾には意外にはやくついた。高雄に入港、そこで検便をうけた。内地はちかい。伝染病でももって帰ったら、との予防のためなのであろう。

船に帰るとき、バナナを一カゴ買った。

子どものとき、おふくろさんは、

「バナナはエキリになるからたべるんじゃないよッ」

と、いっさいたべさせてくれなかった。

当時の人はみんなそう思っていたのだ。

検便の帰りに、バナナを買ってくるとは、いやなとりあわせである。

船に帰ってあけてみたら、かたくてまだウレていない、まっ青なバナナがでてきた。

内地むけの品なのでそうなのである。あれは、いったん青果市場に着いてからムロにいれて黄色く熟してから、果物屋の店さきにだすしかけになっている。

「そんなもの買ってきたって食えるわけないじゃないか。オッチョコチョイだなァ……」

みんなが、口をそろえて、わたしをバカにした。

「いや、なんとかたべられるようにしますよ」

こっちも、そのままひっこんではいられない。意地になって考えた末、ひと房だいて寝てみたが、お腹がひえて、痛くなってきたので、くやしいけれどあきらめた。

そこで船員に頼んでボイラー室であっためてもらうことにした。

「ウーン、こりゃだめかもしれないよ。でも、気がすまないだろうから、いちおうやってみる

か」

「おねがいします。うまくいったらはんぶんさしあげます」

「そうなるといいなッ」

と、バナナのカゴをボイラー室にはこんでくれた。

やっぱり、だめだった。

宇品に入港したのが四月の末、けっきょく、バナナはぜんぶシモゲておじゃん。

それ以来わたしはとうぶんバナナをみるのもいやになった。

似島の検疫所で、スッポンポンのまる裸にされて、衣類、持物すべての物を消毒されて宇品に上陸した。

連隊に着くまでに、とちゅうで会った女の人が、みんな美人ぞろいなのに目をみはった。日本にはブスはいないなと思ったのは、南方の原住民の顔ばかりみてきたせいでそうみえたのかもしれない。

女は乗せない輸送船

南方作戦から帰ってきたわたしは、四泊五日の外泊のあとただちに、北方の作戦に参加したのである。

〽腰の軍刀にすがりつき
連れてゆきゃんせ
アリューシャン
連れていくのは易けれど
女は乗せない輸送船

宇品を出帆して、新潟に寄港。北海道の小樽の港で北千島むけの弾薬物資、そのほかを積荷した昭浦丸は北の基地ホロムシロ島に向かった。

小樽の港をでて、宗谷海峡をとおりオホーツク海にはいる。千島列島ぞいに北に進む、北の海は南とちがって空はなまり色で暗い感じをうけた。なんだか地球のはてにいくような気持ちであった。

目的地の幌筵島は、地図にはパラムシル島とでている。

国後島、択捉島得撫、新知島。それから少しはなれて、幌筵島の順になっている。千島列島の最北端の島である。

そこから、アリューシャン列島のアッツ島に物資、そのほかを輸送する船を警備するのが、われわれ船舶兵の任務なのだから、責任は重大である。

ラバウルへいったときは、乗船しているだけであったが、こんどはじぶんたちが船を潜水艦や、飛行機の攻撃からまもらなければならない。

昭浦丸の輸送指揮官は、杉山中尉。

われわれ機関銃隊のほかには、高射砲、機関砲、爆雷と各隊がいっしょに乗船した。

北海道をはなれて、オホーツク海のまっただなかにでると、波はますます高くなった。

船のゆれ方ははげしく、監視兵はまともに立っていられない。右に四十度、左に四十度と、右左で九十度ちかくかたむくので、目にはいるのは空ばかり。反対にかたむくと海ばかりに

なってしまう。そのくらいゆれても船酔いをする者はひとりもいない。なれてしまうと、平気なのだ。それとも、最前線にいく不安と、緊張のためで、酔うどころではなかったのかもしれない。

いつ敵の攻撃を受けないともかぎらない。

雪がふろうがヤリがふろうが、監視の目はおろそかにできない。

南方の監視とちがって北方は寒い。防寒帽と防寒外とう、防寒グツと、防寒づくめではあるが、監視しているのだから、目をふさぐわけにはいかない。マユ毛に雪がつくと、それがツララになりはしないかと思うほどの寒さである。

船橋に立っていた監視兵が、交たいして帰ってくると、まるで雪だるまである。船倉にはいってぶるぶると身体をふると、雪が四方にとびちる。

それから、ソーッと防寒外とうをぬぐ。あわててソデをまげると、凍っているときなどはポキリとおれてしまうからである。

寒さをしのぐためにコタツにはいる。そんな気のきいたものがあるのかと思うかもしれないが、兵隊さんはいろんなことを考える。

ヤグラの上に毛布をかけて、その中にはだか電球をぶらさげる。中の空気があたたまって、

すこぶる快調。だが、電気の球にじかにふれるとヤケドをする。

このコタツのあるのは、高射砲隊の船室だけである。

「片山上等兵殿、はいってよくありますかッ」

勤務以外の時間は、わりかし自由に行動ができた。

「オオッ、岡田一等兵か。まあ、あがってコタツであったまっていけッ」

「ハイッ、アリガトウございます。これがほんとうのネコにコタツであります」

「ハハハハッ……」

こんなじょう談のいえる仲であった。

片山上等兵はあさ黒い顔で、おでこに剣道の面ずれのあとがあり、ほそおもてではあったがりりしく、男らしい九州男児である。

それでいて心のやさしい、あたたかい人で、わたしはこの人にはとくにかわいがられ親切にしてもらった。じぶんの隊にいるより、高射砲の連中のなかにいたほうがおおいほどである。

昭浦丸は、五月の末にホロムシロ島に入港。見わたすかぎりの銀世界であった。

本船はここで積荷の点検をすませて、ふたたび北にむかう。

いく先はアリューシャン列島のアッツ島である。

「エエッ‼　まだ先へいくのか？　だいじょうぶかなァ……。オッカネエーナアー。オレは、いやだよッ」

だれともなく、そんなささやきがもれた。いやだといったってやめるわけにはいかない。これが戦争というもの。

「なにクソッ……‼　これでもオレは、大日本帝国の軍人である」

大見得をきって胸をはってみたものの、内心はおっかなびっくり。本船はアッツ島へむかった。

ホロムシロ島をでてまもなく、友軍機が甲板に通信筒をおとしていった。

〝アッツ島玉砕〟の知らせである。

軍神山崎大佐。

アッツ島の指揮官山崎大佐は、わたしが村松の連隊での秋季大演習に参加したときの高田司団のおえらがたであった。

全軍玉砕ときいて、胸のつまる思いであった。

昭浦丸は、ただちに船首をかえてホロムシロ島にひきかえした。

もしわれわれが二、三日はやくアッツ島に着いていたらもうこの世にはいない。だれも口に

はしなかったが正直いって内心ほっとしたのである。アッツ島むけの積荷をホロムシロ島に陸あげするあいだ、本船は停泊。

いままでにも、米軍の空襲がときどきあったが、敵さんがぜったいにこない日がある。それは、十三日の金曜日だと上官がいった。アメリカでは厄日なんだそうだ。

まさか、わざわざその日をえらんだわけではないと思うが、船内でひさしぶりに演芸会がおこなわれた。

例によってわたしの出番である。

その夜のだし物はもっぱら浪曲。

〽旅ゆけば　駿河の国は　茶の香り
名代なる東海道、名所古蹟の
多いところ……
中に目立は羽衣の松とならんでその名をのこす
海道一の親分は　清水港の次郎長とテ……

広沢虎造の〝石松の代参〟。木村友衛の〝小金井小次郎〟。天中軒雲月の〝杉野兵曹長の母〟。などなど、その一席のさわりの部分をものまねできかせた。

兵隊はもとより、船員連中までみんなよろこんできいてくれた。

とくに、片山上等兵がよろこんでくれた。

「お前は兵隊から帰ったら、それでメシがくえるよッ」

と、芸人のわたしに芸人になれといったのが、おかしかった。

酒の配給もあって、ごくろうさんと、わたしはすすめられるままに、いい心持ちになっていただいた。

「オイッ!! 不寝番の交たいだ、起きろッ!!」夜中に起されたのである。せっかくいい気持ちで寝ていたのに……。その晩、わたしは、不寝番の三人目の当番にあたっていた。

「申し送り事項。一ッ何何、一ッ何何、間違いなく申し受けました」

いくら酒に酔っていても、急所でちゃんとするところはなかなか立派である。

申し受けたところまでは、はっきりおぼえていた。だから、申しおくった前任者も安心して床についた。

ところが、しばらく、船内をまわっているうちに、もうろうとしてきた。その夜の酒の量が

度をこしていたのだ。どうしようもない睡魔におそわれた。
わたしは、その場にやすらかにおやすみになってしまった。どのくらいの時間がすぎたであろうか。
「おいッ、不寝番起きろッ」
「おや、また、起こされた。おかしいな」
と、うす目をあけたら、ウデに赤と白のしまの腕章をつけた週番上等兵が目のまえに立っていた。
「なんだ、お前、岡田じゃないかッ。どうした、寝とっちゃ、まずかろうが……」
片山上等兵である。
北千島の夜明けははやい。もう外は明るくなっていた。かなりながい時間ねていたらしい。
「ハイッ、申しワケアリマセン」
わたしはとびあがった。ことのおおきさに、顔はまっ青になり、ぶるぶるふるえて立っているわたしに、
「オレは、このことはみていない。知らない、だから、このことがバレたら、お前がしゃべったんだぞ。オレはぜったいに言わないから、お前もいうなッ」

日ごろかわいがってもらっていたからこそ、そういってわたしを助けてくれ、見てみないふりをしてくれたのである。

「もう起床まで時間はない。一番最後の不寝番にオレはズーッと一人で立っていたといって申し送れッ」

と、そこまでおしえてくれた。

わたしはそのとおりにして、その場をきりぬけたのである。

そのまま、起床時間をすぎるまで、寝ていたらたいへんなことになる。片山上等兵が週番上等兵どして、ひと足先に起きて船内を見まわってくれたから、大事件にならずにすんだのだ。かりそめにも、最前線で不寝番が、寝ないで番をする兵隊が、寝てしまったのだから、その罪はおおきい。何もなかったからいいようなものの……。

軍法会議にまわされれば、重くて銃殺!! 軽くても、禁固の刑はまぬがれない。そうなればわたしは気が弱いから、牢屋の中で死んでしまったかもしれない。幸運にも、わたしは、助けられた。今だからこんな話もできるのだが……。

片山上等兵は、わたしにとっては、大恩人なのである。

北千島の対空戦闘

小樽の市内のレコード屋で、小畑実吹き込みの、『勘太郎月夜唄』の宣伝ビラをもらってきた。
B面が李香蘭の『サヨンの鐘』。
歌詞と譜面がでていたので、船の中でひまにまかせて、『勘太郎月夜唄』をおぼえた。

〽影か柳か勘太郎さんか――

ドレミファソ　ソソ

ドレのレレレレ　ミファソのソソソ　シシ

と、音楽の心得のないものにとっては、メロディーをつかむのにたいへん、手まどった。

レソソソーラシ　レーミレ

「おい、岡田、いいかげんにしろよ、なんだか、ちっともわからねえよ……」

と、戦友はうるさがった。

なん日かかったか、北海道から北千島へ。また北海道の小樽までとまい日、まい日、

レソソ　ソーラシレーミレ

と、くりかえしくりかえししていているうちに、なんとなく歌らしくなってきた。執念とはおそろしいもので、とうとうはじめから終わりまで、それらしく歌えるようになった。小樽の港へ着いたとき、まっ先にレコード屋にとびこんだ。

「すみませんが、小畑実の『勘太郎月夜唄』のレコードをきかせてください」

本来なら、いやがるところなのだろうが、兵隊さんじゃしかたがない。

「買わないんですか？」

「ああ、買ったって、蓄音機が船にはないからかけられないんだ」

蓄音機とは、われながら古いことをいったものである。

完璧とまではいかなかったが、まあまあのできであった。

まちがっているところをなおしなおし、わたしは、半日そのレコード屋にいりびたって、

〽影か柳か勘太郎さんか……

伊那は七谷糸ひく煙

と。これには、さすがのレコード屋のおやじもあきれ顔であった。

その日の外出は、勘太郎さん一本やり。ちゃんと歌えるようになってから、船に帰った。
「おいきいてくれ、きいてくれ。ついにやったよ」
戦友をあつめて歌いだした。
機関銃隊はもちろん、高射砲隊の片山上等兵、杉野の若だんなもにこにこしながらきいていた。
直接の上官、曽根上等兵は、にが笑いをしていた。この人はまじめ一方の人なのである。
こんなことをしていると、兵隊たちは、戦地へいくのにそんなことばかりしているように思うかもしれないが、いつ死ぬかわからない身の上なのだから、内務班にいるときとはちがう。遊ぶときはおおいに遊びやるときは、そのぶんだけやる。隊長上官もけじめさえつけていれば、それほどやかましくはなかった。
なん回目かの北千島行きである。八月のオホーツク海は、冬のそれとはちがって、海上もしずかで日あたりのいい日もあった。
右舷と左舷。それにマストのとちゅうにも、監視兵は海上に目を光らしている。
「左舷〇〇方向、雷跡発見!!」
潜望鏡発見でも、魚雷はすぐに、発射される。雷跡をみたときはもうおそい。

左舷を監視していた国広が、おお声で報告した。
右舷にいたわたしも、左舷にとんでいくと、青い海のなかを海上からみえるぐらいの位置で、白い雷跡が二本、本船にちかづいてくるのがみえた。
報告をうけた船長は、一等航海士に魚雷にむかって、突っこむように進めと指示をあたえた。
船は急速に方向をかえて魚雷にむかった。
角度をにげるようにすれば、よこっ腹に命中する。船首を魚雷にむければ、船のはばがせまくなる。うまくすればさけることができる。
わたしはデッキにしがみつき、その雷跡をみながら、「南無妙法蓮華経」と、お題目を唱えながら目をつぶった。
走馬燈のように、くるくると家や、お母ちゃんや芝居のことが頭のなかを走りすぎた。
身のちぢむ思いとはあのことであろう。二本の白い線が船のすぐわきをすーっと、よぎっていったのを、うす目でみた。
「助かった。生きている」
国広と顔を見あわせてホッとした。
船橋にいた班長が、

「なんだ、お前たちの顔色は、血の気がひいているぞッ!!」
と、どなっている。その班長の顔も土色をしていた。
そんな状態にぶつかれば、だれだってそうなる。
国広の、「雷跡発見」の声がもうすこしおそければゴウチンである。
彼の手柄は、金鵄勲章ものである。この地域は米軍の潜水艦がいつもあらわれるところなので、よほど目標をつけやすい海域なのかもしれない。
この作戦に参加して、これがはじめてのおそろしい体験であった。
八月のホロムシロ島はもうほとんど雪はない。ところどころ島のくぼみに白くポチポチと、その名ごりがのこっていた。
白一色のときとはちがって、なんとなく現実的なにおいのするのが、かえって無気味な感じをいだかせた。
アッツ島が玉砕して、二か月たった七月二十九日に、キスカ守備隊が奇跡の撤収、三十一日に千島に帰ってきた。
米軍の行動が気づかわれているころなので、なおさら不安な日がつづいたのである。幸いにも、今まで空襲されたことはなかったが、今回はなんとなくいやな予感がした。

いつものことで、われわれは昭浦丸の船内で積荷の陸あげが終わるまで、なにをするでもなく待機していた。

ゴーッと、異様なひびきを感じた。雷が空をひきさくような音がしたと思ったら、停船中の船舶の高射砲からとつぜん火をふいた。

米軍の空襲である。

敵機の編隊は、コンソリデーテッドB24、ノース・アメリカンB25が、共同作戦をとり、高度から進入してきたのはコンソリデーテッドB24。海上すれすれの低空飛行で、船と船のあいだにつっこんできたのが、ノース・アメリカンB25であった。

「敵機来襲、配置につけ!!」

船橋の左右に機関銃がすえつけてある。

われわれはいつどうして、船内からとびだし、船橋まできたのかおぼえがない。反射的に、しぜんに身体が機敏にうごいたのにちがいない。日ごろの訓練のたまものである。

ノース・アメリカンがすぐ目の前をよぎった。ダダダダダッ、ダダダダダッ

敵機のよこっ腹に機関銃の弾をぶちこんだ。ピュッピュッ、命中はしているのだが、弾ははねかえって、まるで効果がなかった。

一連三十発を撃ちおわるのははやい。

撃ちがら薬きょうがはねるように横にとびちる。その薬きょうを、セミをとる袋状のアミで、うけとめなければならない。

一発でも紛失することはできないのだ。その薬きょうは、あとで員数をあわせて報告しなければならない。

情けない話である。そんなけちっていて、戦争ができるわけがない。それだけ、もう資源が不足していたからなのであろう。

敵機の機関銃の曳光弾が赤く糸をひくようにとんできた。

鉄カブトをかぶるひまもなかったわれわれは、戦闘帽のままで対戦していた。

「曽根上等兵殿、鉄帽をとってきましょうかッ!!」

船橋のすぐ下に鉄カブトと、防毒面防寒耐寒服などがおいてある小屋があった。

戦闘中でとてもそこまで行く余裕はない。行っていけないことはないのだが、いまさら鉄カブトをかぶったところで、どうなるものでもないので見あわせた。

実戦ははじめての経験である。

いくら落ち着こうと思っても、頭に血がのぼってカーッとなり、じぶんでなにをしているの

かもわからない。

「ソウテン（装填）!!」

その声にガチャッと、機関銃に弾をこめた。

その音と、手ごたえが、いつもとちがう。

「しまったッ!!」

なんたることであろう。右から左へ、弾の先がじぶんの方へむくように、あべこべに装填してしまったのである。

「バカ!! なんてことをするんだッ!!」

一度入いったらもうぬけない。ガチッとはまったまま、テコでもうごかなくなった。

「故障排除!!」

機関銃を分解しなければならない。

演習のようにテキパキとは処理できない。もたもたして気はあせるばかり、ましてや、じぶんの過失なのだから責任はおもい。戦闘中武器をもっていないくらい、おそろしいものはない。

一発でも撃っていれば、気がやすまるが撃とうにも撃ちようがない。手もちぶさたなんてものではなかった。

投下される爆弾が落ちてくるのがよくみえた。赤だったか紫なのか、今ははっきりおぼえていないが、爆弾にハチマキのように胴体に色のついているのがよくわかった。

おたがいにねらいはつけているのだろうが、なかなか命中しない。

海中に落ちた爆弾は、大きな水柱を船の前後両側にあげる。双方が撃ちあう銃・砲撃の音、さく裂する爆発音。それらのいりまじった音は、まるで遠くちかくで鳴りひびく雷の音さながらであった。

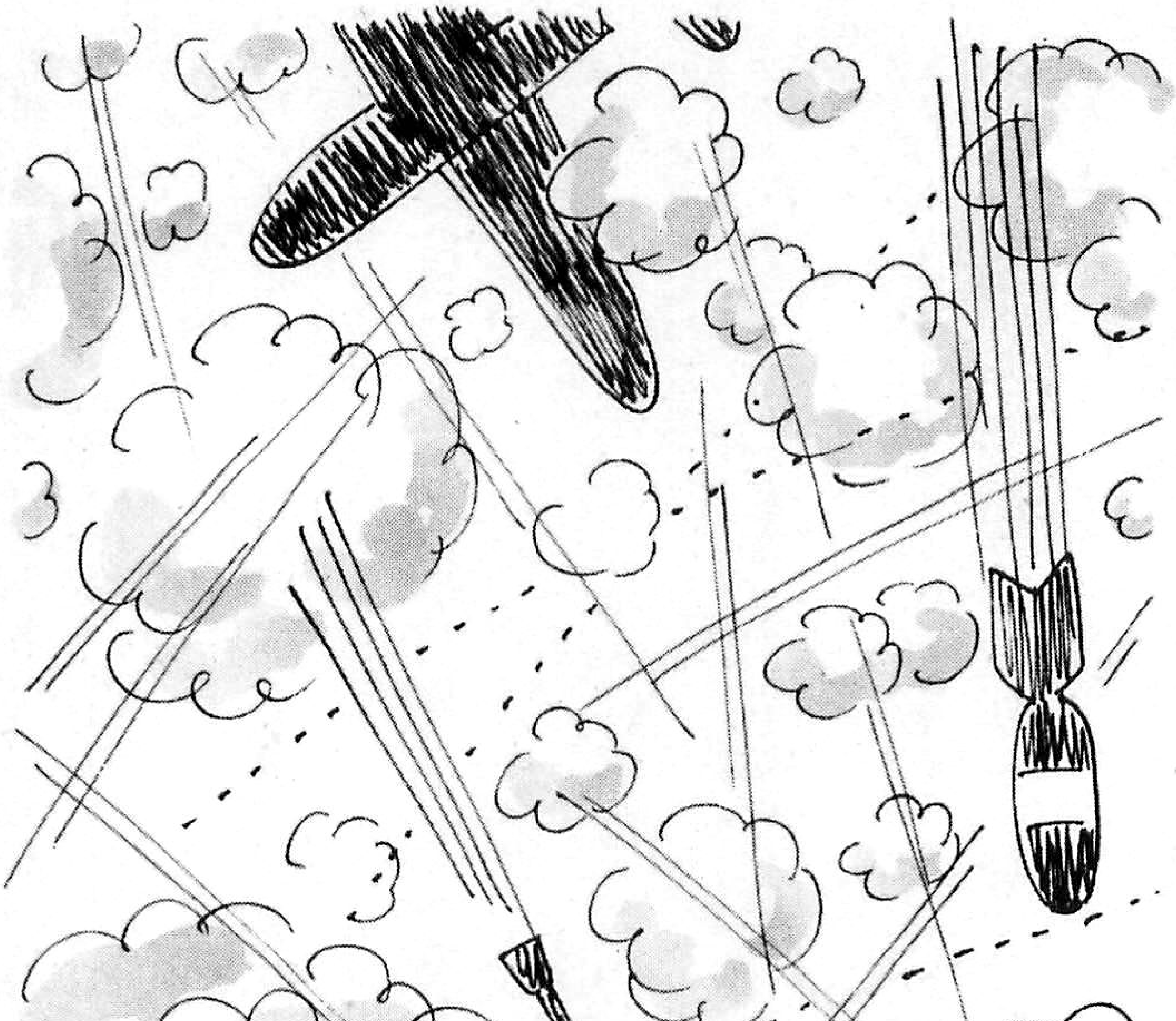
昭浦丸の船尾の高射砲が、低空でちかづくノース・アメリカンを一機、撃墜した。パッと、煙りをあげて機体が海中に落ちる。

巡洋艦の主砲が、上空のコンソリデーテッドB24に命中。このときは、煙とともに機体はこっぱみじん。あとかたもなくなってその姿をけした。

わが方にもそうとうの被害があったのはいうまでもない。

わが機関銃隊は、わたしのへまでまだ銃の整備は完了していないままに戦闘は終わり、敵機は、アリューシャンの彼方へきえ去った。

ものの十五分間ぐらいの戦闘であったと思うが、このたった十五分の間の戦闘のながさは、戦った者でなければわからないながさなのである。



戦闘が終わって戦死者、負傷者の手あてをしなければならない。
オデコにあたった機関砲の弾が後頭部へぬけ、鉄カブトの後ろの穴がおおきくひろがってサケていた死体もあった。
壮烈なる戦死である。胸にあたった弾は体内をジグザグに走り、肩にぬけるなど、思いもよらぬ光景は目をおおうばかりであった。
鉄カブトのおいてあった小屋に、弾のあとが無数にあり、もしあのとき鉄カブトをとりにいっていたらと思うと、ゾッとして身ぶるいをおさえることができなかった。
戦闘中は無我夢中であったが、戦いがすんで平常にもどったときはじめてそのおそろしさがおしよせてきたのである。
ノース・アメリカンの墜落寸前、奇跡的に後部にのっていた米兵が、一人外になげだされて助かった。
本船の甲板に木造の小屋を建ててやり、そのなかに収容していた。
彼らは、捕虜になることを名誉に思っている。じぶんはたしかに最前線、そして敵地まで行った証処であるという。
日本軍人は、捕虜の恥ずかしめをうけたときは、自らの生命を断ったものである。日本の兵

隊が、その小屋にちかづくと彼は非常にこわがった。だされた日本食もほとんど手をつけない。片山上等兵の話では、携帯口糧のカンパンをやったらよろこんでたべていたそうだ。

国がことなり、おたがいに戦ってはいるものの、個人的なうらみつらみはない。彼を虐待する者は一人もいない。むしろ、親切にしてやったくらいである。

おなじ人間同士なのである。

もしじぶんが彼の立場になったら、どんなにか、苦しまなければならないのだ。

戦闘で負傷もしないで、無事でいられた自身の幸せをつくづく感謝した。

それにともない、またまたこうした、戦闘をくりかえさなければならない運命を悲しまずにはいられなかったのである。

兵隊カンジョウ

昭浦丸が、小樽に入港すると、ちいさな伝馬船が外出する兵隊をむかえにきてくれる。
わたしは北海ガレイの干物を数まいもって上陸した。
白河屋という居酒屋へいくのだ。
「おばちゃん元気かい。ただいま、かえってきたよッ」
「おや、岡田さんおかえんなさい。ぶじでよかったねえ……」
と、ニコニコ顔でむかえてくれた。
わたしがきたのがうれしいのか、カレイの干物がうれしいのか、どっちだかわからない。持参のカレイは北のはて、ホロムシロで釣ったえ物である。
北海での釣りは船上から太めの糸をたらす。海のふかさは五〇尋（尋は水深などに用いる。一尋は約一・八メートル）ぐらいある。
オモリを底につけて、トントンとこづいていると、ググーッとひっぱりこまれる。

「待ってました」とひきあげるのだが、サオをつかわず、手づりでやっているのだから、軍手をはめていないと、ひきが強いので手をきってしまう。

ヨイショッ、ヨイショッと、たぐりよせると、はじめはひきが強いが、そのうちにひらべったい北海ガレイが白い腹をみせてヒラリ、ヒラリとあがってくる。

一尺五寸前後のおお物である。一まいあげたら、あとはそのカレイをぶつ切りにして、エサにする。トモグイというやつで、それからはもうつぎからつぎへとおもしろいように釣れる。釣ったカレイをハリガネにとおして甲板に干す。夏場だったので、ホロムシロをでて小樽に着くまでに一週間。ちょうどいいぐあいに干物ができあがる。

白河屋のおばちゃんだって、物資不足のおりから、この干物でおお助かり。そのかわりというので、お酒をたくさんごちそうしてくれた。

そのお店には、よしゑさんという美人の看板娘がいた。それもわれわれのお目当てだった。

北千島と小樽の間を八か月ちかくいききしたが、小樽の港へかえってくるたびに、これが最後のお別れになるかもしれないと思った。

戦争は生命の保障はない。だからせめて小樽へ帰ってきたときぐらいは、パーッと遊びたく

なるのは人のつねである。
たまには、居酒屋じゃなく、おおきな料亭で大盤ぶるまいをしてみたいと、片山上等兵の発案でみんなが賛成した。
「そういうことなら、オレにまかせろ」
と、名のりでたのは、杉野一等兵である。
この人は地方にいたとき、長崎の有名なお菓子やさんの若だんなで、軍隊にはいっても兵隊さんのことは何一つおぼえようとしない。だからなにもできなかった。
ところが、遊ぶことにかけては天下一品、なんでもゴザレの粋人である。
家にいたときも、小切手帳をもったまま、一週間も十日も家へかえらないで、茶屋遊びに興じたという。
それこそ、その道の達人、優秀なる兵であったのだ。軍隊にはいってからも、かなりうまく遊んだらしい。金がなくなると自宅に手紙をだして送金してもらった。
手紙の文面には「金太郎アメ三貫目送れ」と。
これだけで奥さんにはつうじるのだそうだ。隊長が、「杉野ッ!! これはいったいなんのことだ」といったら、

「これはお菓子のことです」と、すまして答えた。
実は金太郎アメ三貫目というのは、お金を三十円送ってくれという暗号だったのだ。
しかし、たびかさなると、奥さんもこまったらしい。
そこで返事に、
「もう、お送りする、お金がありません。あとは、わたしが身売りをするより、ほかにどうにもなりません」と。
すると彼がまた、
「身売りをして金をおくれ」と返信した。もちろん、身売りをするわけはないのだが、そんな便りのやりとりのなかにもほのぼのとした夫婦の愛情がにじみでている。
奥さんも奥さんなら、ご主人もご主人で……、まるで、落語の中にでてくる若だんなが、兵隊さんになったみたいな人である。
どうせ遊ぶなら、小樽で一番の料亭がいいと杉野の若だんなは、大はりきり。そのお膳だてはぜんぶ彼のとりはからい。まるで、水を得た魚のように、なにからなにまでとりしきってくれた。
どんな料理がでたのか、おぼえていないが、カボチャのタネの干したのを、つまみに酒をの

んだのを思いだす。

ちょっぴり塩気があって、なかなかいける。黒い皮をむいて中の白い実のようなものをたべた。カボチャのタネが食えるなんて、そのときはじめて知ったのである。

おおきなことをいって、料亭にあがったのはいいが、内心、勘定の方をみな気にしていた。お帳場からきいてきた。若だんなが、片山上等兵に耳うちした。

片山上等兵が、わりバシをつかって、手旗信号をおくってきた。

「今日の勘定は、一人あたり、コレコレである」と。

「了解!! 了解!!」

きれいなお姉さんたちのいるまえで、今日のわり勘はいくらだなんて、やぼなことはいわない。

わりバシを両手にもってうごかしている。その格好をみてお姉さんたちは、

「なによ? それッ。なんなのおしえて……」

と、つついたり、ひっくりかえったりで大さわぎ……。

これはまたとんだおまけがついたと大よろこび、大満足であった。

船舶兵の手旗信号は、お手のもの。思わぬところでやくにたった。

広島に転属してすぐ、この手旗信号の演習には苦労した。班長が遠くで、旗をふって信号をおくってくる。

こちらは、いちはやくそれを解読して紙に答えを書いてもっていく。

「コウコクノ、コウハイ、コノイッセンニアリ、カクイン……」

ここまで見たわたしは、いそいで紙に書いて班長のところへとんでいった。その結果は、おおきなゲンコツがポカリとんできた。

〃皇国の興廃この一戦に在り
　各員一層奮励努力せよ〃

あの日本海海戦のゼット信号。あまりにも有名な文面である。

わたしは正確に書いてわたしたのである。ところが班長は、おしまいのところを、「ドリョクセヨ」とあるのを「ドリョクシナサイ」と信号を送ったのである。オッチョコチョイ、ワレ、ハヤマレリであった。

一航海おわると、小樽の港へ帰ってくる。たのしみにまっていた外出。上陸前、甲板に整列したわれわれに、阿藤少尉から外出の注意があった。

「お前たち、遊びにいくときはかならず鉄カブトをわすれるなよッ。できれば二つもっていけ」

この阿藤少尉は、年輩の人でなかなか話のわかる予備少尉である。それをきいて、本物の鉄カブトを二こもっていったやつがいた。鉄カブトなんてものは、頭だけにかぶせるだけのものではない……。

まじめというか、ドジというか、世の中にはいろんなやつがいるものである。

いつものようにポンポン船が、本船にむかえにきた。

この日は、すでに定員五十名をオーバーしていた。

タラップでまっていたわたしがおお声で、

「艇長殿乗せてください!!」

「ヨシッ、すこしぐらいならいいぞッ!!」

このすこしぐらいというのがよくなかった。下から見れば、わたしとだけしかみえなかったのだが、うしろにはまだ、たくさんの兵隊がまっていた。

その連中が、全員、じぶんたちはすこしぐらいだと思ってタラップからいっせいに、その伝馬船にのりこんだ。

「コラッ!!　そんなに乗ってはいかん」

もうそうなったら、どうにもならない

百名以上の兵隊がドーッと乗ったからたまらない。船というものは、グラリグラリとゆれて水がはいり、じょじょにしずむものである。
それが、そのままの状態でズブズブとしずんでしまった。
サア、たいへん、着のみ着のまま。編上靴に巻脚絆、ゴボウ剣もさげている。そのままでは泳げない。どこかにつかまらなければ助からない。
いちはやく急を知った船員が、気をきかしてなげこんでくれた空のドラムかんにつかまった。
ドラムかんは、グルグルまわってとまらない。
むこう側にだれかがつかまれば、ちょうどあん配がいいのだが、そんな余裕はない。こともあろうに、わたしのとなりにきてつかまったやつがいる。二人でまわすから、速度がはやくなるばかりである。
「ウワァーッ。助けてくれーッ」
すくいをもとめる声が、海上にひびき渡った。
十一月の三十日。小樽の港にはみぞれがふっていた。
寒さにかじかんでつかまりそこなった兵隊が、九人おぼれ死んだ。
楽しみにしていた上陸を前にして……。

その晩、甲板の上に九人の遺体が、ならべられた。いてつくような寒さの中だけに、なおさらいたましく感じられた。
わたしは、その屍衛兵として彼らを見まもったのである。
「気のどくになァ。さだめし苦しかったろう。……」と。
それよりも、その人たちの家族の人たちのことを思うと、胸がしめつけられた。
わたしは寒さにふるえながら、足ぶみをくりかえしていた。

まちがいラッパ

昭和十八年の秋、北方の対空戦闘のあと小樽に帰って、わたしは上等兵に進級した。ちょうど一年目であるから、一選抜ということになる。だが、おなじ分隊の、しかもわたしより古い一等兵より一足さきに上等兵になったのだから、なんとなく気まずい。階級が上になっても、古兵殿として、その人たちをたてなければならない。

杉本一等兵は、

「岡田、よかったな、しっかりやれよッ!!」

と、激励してくれた。

そして、今までとかわらずなかよくともに生活をしてくれたのが、うれしかった。なかなかできることではない。

ながかった北方の作戦も、敵の潜水艦を撃沈するために投下した爆雷が、ちょうど旋回してそのま上をとおったとき爆発した。そのため、じぶんの船のスクリューをいため、平常に運行

することができなくなり、釜山経由で、八か月ぶりで宇品の港へ帰ってきたのである。オホーツク海のあら波。銀世界の北の基地、白夜は朝二時になるともうあかるい。夜の虹も、オーロラもみることができた。

対空戦闘のおそろしさ。小樽の港の転覆さわぎや、船内不寝番いねむり事件などなど、かず知れぬ思いでをのこして、広島の本隊へ帰隊した。

本隊は、乗下船がはげしく、兵舎が満員で収容しきれないときもある。

われわれ昭浦丸の下船者は、広島と宮島口の間にある楽楽園という、もと遊園地だった仮の宿舎に寝起きすることになった。阿部少尉が、そこの隊長であった。

園内は、そのままになっていておサルや鳥のオリものこっていて、数ひきのおサルがわれわれに愛敬をふりまいていた。

入浴場も浴そうがひろびろとして、まるで温泉へ養生にきたような立派なものであった。はいっているのは、グリグリ頭の兵隊ばかり、色っぽくもなんともない。しかも、つぎからつぎへと、何交たいにも出たり入ったりしているのだから、おしまいごろに入浴した者は、お湯もすくなくなり、アカはういているし、かわいそうなことこのうえなしである。

フロからあがって、仮の宿舎に帰るまでに、手ぬぐいが凍ったくらいだから、やたら寒かっ

たのをおぼえている。

軍隊へはいって二回目のお正月を、そこで祝った。

上等兵になると、こんなにも楽になるものかと、つくづく思った。初年兵が上等兵になることは、フンドシかつぎが幕の内にあがったお相撲さんみたいなものだ。

楽楽園にはちゃんとした土俵があった。

わたしも小学校のころじぶんより大きなやつを投げとばすほど相撲が強かった。その友だちは後に両国の出羽の海部屋に入門したほどの男なのだから、わたしもそうとうなものだったと、自負していた。

初年兵をあい手に何番か相撲をとった。みんなたいしたことはない。

「コラッ!! だらしがないぞッ!! それッ、もう一番ぶつかってこい」

初年兵のなかからずんぐりむっくりした堀内二等兵が、のっそりと土俵にあがってきた。

「上等兵殿おねがいします」

「ヨーシ、ドンとこい」

バチッとあたって、上手をとろうとしたら、コロリとひっくりかえった。……倒れたのはわたしの方である。

「ウムーッ――もう一番!!」

こんどは上手をひいた。とくいの上手投げ一せん……

その前に、もろ差になられ、あっさりとつりだされた。

なん番やってもかなわない。

「よし、最後の一番だッ!!」

わたしもかなりしつっこい。

「ハイ、どうぞ」

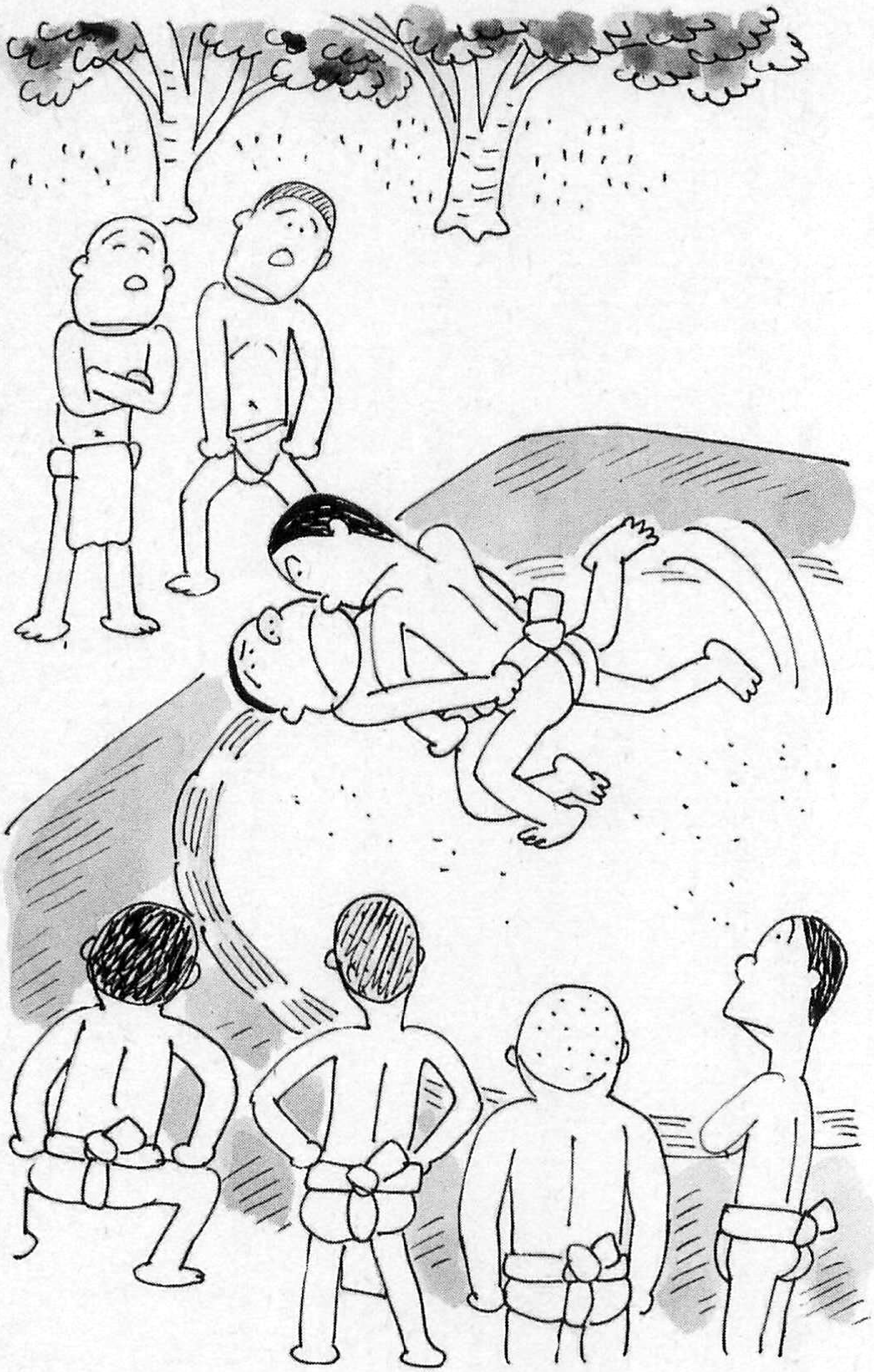
なんと、にくらしい。落ち着きはらっているからなお頭にくる。

「それッ、これでもか」

最後の力をふりしぼって、上手投げ。これは、わたしの得意わざなのである。こんどこそはと、腰をいれたが、びくともしない。むこうのはなった下手投げにこっちの身体が完全に浮いた。

「もうだめだ」とかんねんしたら、ドスンと、むこうがたおれていた。

どう考えても、わたしには勝ち目はなかったのに、……これは八百長である。わたしに花をもたせたのである。



「じぶんの負けでアリマス」

と、しずかに土俵をおりていった。

彼、堀内二等兵は地方にいたとき、村相撲の大関をはっていたと、あとで知ったのである。気位いのたかいわたしは、こてんぱんに打ちのめされたのである。世の中にはつよいやつはたくさんいる。自慢高慢バカのうち、わたしのハナはポキリともとからへしおられたのである。

楽楽園には、ラッパ卒がいなかった。

軍隊生活は、ラッパの音で、寝起きをしてるようなものだ。

「だれか、ラッパをふくやつはおらんか?」

と、伝達があった。

「ジジジ、じぶんはラララーラッパを吹く、吹ーくことがデキデキデキるのであります」

申しでたのは横山一等兵で、彼は口をきくのが流暢でなかった。

「あいつ、あれでラッパが吹けるのかなァー」

だれしもそう思ったのであるが、わたしは彼がちゃんとラッパは吹けると思っていた。

阿部隊長のきもいりで、地方人もいっしょに隊内に入れて演芸会をやったとき、彼は、歌をうたったのである。

「ヨーコ、ヨーコ、横山一等兵。カーン、カーン、勘太郎月夜唄をウータウータうたいます」

と、そのあとで、

〽影か柳か勘太郎さんか

伊那は七谷糸ひくけむり

横山はなんのよどみもなくみごとにうたいあげて、会場から拍手大かっさいをうけたのである。

思ったとおり、歌とおなじでラッパもだいじょうぶであった。

点呼ラッパである。

タンタンタンタタッタッタッタタ——

タッタタッタタッタッタタッタタ——

立派、立派、大成功。ところが、それは点呼ラッパではなく、消燈ラッパであったのだ。

「おい、横山、今のはちがうぞ‼」

班長は、顔色をかえてとんできた。

大問題である。
「横山ただちに、訂正ラッパを吹けッ!!」
と、命令した。
横山は頭をかきかき、
「じぶんは、テイテイ訂正ラッパはシーラシラ知らないのでアリマス」
「しかたがない。それではあらためて、点呼ラッパを吹け」
タッタカタッタカタッタ、ター―カタッタ、タッタタ
本職ではないのだからやむをえない。
どうやら、それでことなきを得たようである。やがて、遠くから横山の吹く消燈ラッパが、、きこえてきた。
こんどはまちがえないでうまく吹いた。
よかったなーと、安心した。うとうととねむりかけているわたしのマクラもとを、
〽影か柳か勘太郎さんか……
消燈ラッパを吹き終わった、横山一等兵が、ちいさな声で歌いながら帰ってきたのである。
北の海でおぼえた『勘太郎月夜唄』だけに、よけいにわたしはうれしかったのである。

いつのまにか、ふかいねむりにおちていった。あくる朝、起床ラッパでとび起きた。横山のラッパもすっかり板についていた。

朝めしがすんだあと、

「岡田上等兵殿、サルがマスのかきすぎて死んだらしいです」

初年兵が知らせにきた。

サルは人のまねがじょうずである。きっとだれかがいたずらに、おしえたのだろう。サルには、自制心がないものか、ずーっと、その行為をつづけたらしい。なにも死ぬまでやることはないものを……。

〃客商売〃では、サルは去るにつながると、サルといわずにエテという。エテのやつ、得てに帆を上げるというが……。帆柱をたてっぱなしで、あの世へ行ってしまったのである。

「オレたちも気をつけようなッ」

と、だれかがいったら、兵隊たちは、おおきな声で笑った。

笑いごとではない。

そんなことがあってまもなく、楽楽園をひきはらって、宇品の本隊にもどった。

決死隊

楽楽園から宇品の本隊に復帰すると同時に、わたしに事務室で勤務するようにとふたたび、八木准尉が配慮してくれた。北方へいくとき、辞退したのに、アリガタイことである。わたしは素直にお言葉に従った。

ある日、阿部少尉が、「岡田‼ お前にこれをやるよッ」

と、じぶんの階級章を一組わたしにくれた。

ハナの横っちょにおおきなホクロのあるのが特徴で、背がたかく、温厚な人柄な少尉はニコニコ顔。どうやら、中尉に栄進するらしい。

少尉が階級章をわたしにくれるところをみると、ひょっとしたらオレも兵長になれるのかもしれないと、ひそかにほくそえんだ。

「ハイッ、ありがたくいただくでアリマス」

酒保で買ってきたものより、将校のそれを改造した方がグッとおもみがある。

おかげで兵長の階級章が、ふた組できあがった。
ニヤニヤしながら、外出用の軍服にぬいつけて、タナの上に整とんして、命令のでるのをたのしみにまっていた。
数日後、営外曹長が、日々命令を読みあげた。
兵長に進級したのは、同年兵の秋葉上等兵で、ついにわたしの名前はでてこなかった。
「あれッ？　おかしいな……」
すでに任官していた阿部中尉の顔をみたら、
「そんなはずはないんだが？……」
というような顔をして首をかしげていた。
わたしは、事務室のアブラ虫（ゴキブリ）である。
軍隊では、一にヨーチン（衛生兵）二にラッパ（ラッパ卒）三、四がなくて、五に事務室のアブラ虫と、一番らくな順にそういわれていた。
秋葉上等兵は、船舶隊に転属して以来ずうーっと乗船して、戦地へ行き苦労して帰ってきた実績がある。
北方から帰ってきて、事務室のアブラ虫になっている、わたしの方が分がわるい。

「ハハア……そのせいだな……」
おなじアブラ虫仲間の川井と、顔を見あわせた。
「オレたちはだめだよ……」
〃楽あれば苦あり〃〃苦あれば楽あり〃
のたとえで、これは、いたしかたがないとあきらめた。
その直後、本部から東京船舶隊へ転属する志願者を募ることになった。
東京といわれれば、江戸っ子のわたしが行きたくなるのは、とうぜんのこと。しかし、この部隊は、硫黄島作戦要員で、決死隊ともいえるのである。
「志願する者は、前へでよッ!!」
隊長の顔はけわしかった。
昔むかし、日露戦争で乃木大将が、決死隊を募ったとき、志願者のキンタマを下から手のひらにのせるようにして調べたそうだ。ダラッとぶらさがっているやつは合格。玉がちぢみあがっていた者は、はぶかれたという。
わたしはじぶんはどうだろうと、ソッと手をあててみたら、玉がどこかへ行ったか、みあたらなかった。

おそらくならんでいる連中のなかで、わたしが一番おく病者であったにちがいない。それでもわたしは覚悟をきめて一歩前にでた。

前へでた者の数がすくなかったのと、妻帯者はなるべくはずしてやろうという、配慮があったにもかかわらず、妻帯者でないわたしが決死隊のなかにははいっていなかった。

それどころかわたしに一週間の休暇をくれたのである。ロッパ先生の手紙にある姉さんといわれる人と、事実上は、いっしょになっているのを、知っている蓮尾大尉は、わたしをはずしてくれた。休暇をくれたのは、結婚式をあげて籍をいれてこいというナゾなのである。

どこまでも兵隊のことを心配してくれる立派な隊長さんであった。

せっかくの好意をむだにしては申しわけない。わたしは東京に帰り、結婚式をあげたのである。軍服とモンペ姿で……。祝宴は、ごくごく内輪で義姉の魚商組合の人たちとで、十人たらず、ささやかなものであった。

そのころなかなか手にはいらなかった、タイを一ぴきわたしたちのために義姉が魚河岸から、つごうつけてもってきてくれた。義弟といっても、わたしより四つとし上の松ちゃん（折橋松太郎）が羽田海岸へ行って、ハマグリをとってきて、おすい物をつくってくれた。

戦争中としては、たいへんなごちそうである。

宴会のさいちゅうにプープープーウと空襲警報がでて、まっ暗やみのなかでの結婚式なんて、しゃれにもならない。あのときの結婚記念写真はまことに、妙であり珍なるものであった。

一週間の休暇ははやかった。

帰りの車中で、呉の軍港へ帰る水兵さんととなりあわせになった。

わたしは上等兵で、彼は水兵長といっていたから、陸軍の兵長とおなじことになる。またた、ここでも兵隊になりそこなったのが、ざんねんでしかたがなかった。呉市までは、かなりの時間がある。

だから車中でいろいろと話しあった。

陸軍の酒保が、海軍では捕給鑑といって、羊かん、お菓子タバコ、酒そのほかをのせた専門の軍艦がまわってあるき、各軍艦に捕給していたのだそうだ。

そのタバコにしても、陸軍は「ほまれ」、海軍は「チェリー」、戦時中はさくらといった。羊かんだって、虎屋の高級品……。陸軍では興和パン？　と、えらいちがいである。

どうも海軍さんの方が陸軍より、生活様式もたかいような気がした。

ちなみに、水兵長の給与が、当時一か月十六円。陸軍が十三円。どうも、うらやましいかぎりでもあり、ちょっぴりひけめを感じてくやしくもあった。

そういえば、戦友の植村の弟が、海軍主計大尉で、宇品の中隊に、面会にきたことがある。中隊長が中尉だったから、海軍大尉に敬意を表して、てい重に、

「ただいま、弟さんをおよびします」

よばれた、植村は、一等兵である。弟の大尉に、

「おい、お前、元気か、しっかりやれよ」

「ハッ、お兄さんもガンバってください」

「ああ、オレはだいじょうぶだ。お前こそガンバれよッ」

「ハッ、アリガトウございます」

わたしは事務室で、このようすをみて、おかしくてたまらなかった。いくら階級がちがっていても、やっぱり兄貴は兄貴だ。弟の大尉さんは、われわれにまで腰をひくくして帰っていった。

中隊長は、怪げんな顔をして見おくっていた。あとで植村から、羊かんと「チェリー（タバコ）」をわけてもらった。

彼も、伊藤弥太郎とおなじで幹部候補生を志願しなかったらしい。

事務室にいれば、以前のようにロッパ先生の手紙が紛失することもない。わたしが受けとる

やくめなので、確実に手に入った。

古川ロッパ先生のお便り。

「いつも元気なたよりありがたう。

『久遠の笑顔』を見たとのこと、そのスチール同封する。これは『頬白先生』古いものです。新らしいブロマイドが出来ないので困る。

十一月二日から十何日間ずーっと東北の方をイモンで歩いて来た。

そして帰って一休み、これから『突貫駅長』のロケーションに出かけるところ。

ところが毎日B29の奴がやって来るのでうるさくてしようがない。東京は、然しこんなことで参るものか、安心してくれ。

十二月一杯映画で、正月は東横に出る。今からその準備をしてゐる。

ロケーションは東北の方面、二十日間ばかりかかるさうだ。星、石田、堀井、大庭なんてところも出る。女は一人もうちからは出ない。

ではますます元気をいのる。

二十三日のひる二時にセイタイモシャを放送したが、きけなかったらうな。きいたか?

十一月二十七日夜

古川生」

岡田六郎様

事務室で勤務中だったので、この放送があったことさえ知らず、聞くことができなかった。残念このうえなしである。

(この第二冊目の〝兵隊ぐらしとピカドン〟の原稿執筆のため古川先生の未亡人の御好意で先生の当時の日記を拝見させていただき、ここに載せさせていただきました)

「昭和十九年十一月二十三日(木)

声帯模写放送。

今日の声帯模写は、ラジオの一日といふことにして左の如きものをやった。

ラジオ体操　徳川夢声
婦人家庭の時間　汐見洋
小国民の新聞　喜多村緑郎
お伽噺　梅島昇
家庭園芸　大辻司郎

相撲中継
放送物語
落語
万才
歌謡曲
若鷲の歌
いさをを胸に
さのさ節
子守唄
本文

井上正夫
曽我廼家五郎
小杉勇
島田正吾
松本幸四郎
市村羽左ヱ門
市川遠之助
沢村訥子
中村歌右ヱ門
河合武雄
沢村源之助
松旭斉天勝
藤原義江
榎本健一

前文略……

第一スタジオでテストをする。これが辛い。草臥れちまふ(う)。二時一寸前に終わり、便所へ行って煙草一服すうと、もう時間。二時―二時半の約束。ちとこぼれて三十四、五分に終わった。くたびれた、終わると、げんなりしちまった。本放送直前のテストて奴は応える。出来は――さあよく分らないが、初めの方が、一人のセリフが長すぎて、地声になっちまった恐れあり、終は追込みで盛り上ったと思うが何んなものか。」

後文略……

とある。これだけの登場人物を三十分以上も地声をださずに、一人で声帯模写で演ずるということは、たいへんなことである。

しかも、本番寸前に二回もテストをしてから……。

それに、生放送なのだからおどろく。やはり、ロッパ先生の声帯模写は、絶品であり、他の追従をゆるさない立派なものであったと思う。

現在のようにテープで、録音できる時代ではない。

いつもラジオ放送のあるときは、

「岡田、今晩ロッパの放送があるぞッ!! 聞きにこい」と、声をかけてくれたのは、山城少尉。

この人は伯父さんが陸軍中将で、従兄弟が佐官クラスで参謀と血統書つきのチャキチャキの軍人。

わたしは第二乙種から第一補充兵として入隊したペェペェの兵隊。それがどういうわけかそんな間柄になって、チョイチョイラジオを聞くことができたのだが、このときにかぎってチャンスをのがしてしまった。

いまさらいってもはじまらないが、この放送をきくことができなかったのは、わたしにとってはまことにくやまれてならなかった。思えば、その当時から、わたしの一人芸にたいする意欲がふつふつと燃えあがっていたのかもしれない。

火タタキとぬれムシロ

アメリカの日本本土空襲は、日ごとにひんぱんになってきた。

東京の浜町の家が心配でならなかった。

「ヨシッ!!　家が焼けだされないようにオレは好きなタバコをやめよう」

酒はやめられても、タバコはなかなかやめられないと、よく人はいう。

わたしは家のためならと、いさぎよくタバコをたつと神さまにねがいをかけた。

そんなある日、隊長がわたしをよんだ。

「岡田!!　病院へ遺骨をうけとりにいってこい。結核病棟だから、マスクをかけるのをわすれるな。

それからタバコをもっていけ。待っているあいだタバコをすっていれば、感染しないというからな」

さて、こまったことになった。タバコは断っているのだ。結核がうつるのもいやだが、家が焼けるのはなお、こまる。どうしたものだろう。しかし、命令はぜったいである。

病院へいくのは当面の問題。タバコをすったからといって、かならず家が焼けるとはかぎらない。これは隊長のいうとおりにする方が賢明である。

まよいにまよったあげくのはて、病院の待合室でわたしは、目をつぶってタバコに火をつけた。

「神さま、やむをえない事情ですから、おゆるしください」

モチャモチャと口のなかでおねがいしておそるおそるすいこんで、プーッと天井にむかってけむりをはいた。

すいたくても、がまんしていたので、命令にかこつけてすったタバコは、なおさらうまかった。一本すえばあとはおなじことだと、病気がこわいのでいつもよりよけいにすってしまった。

任務はぶじにおわり、中隊長に報告をすませて内務班に帰った。事務室から川井上等兵が、一通の電報をもってきて、わたしに手わたしてくれた。

電報なんてものは、あんまり気持ちのいいものではない。ましてや、タバコのおきてをやぶっ

たばかりである。ふといやな予感がした。あわててひらいて電文を読んだ。
「ウチヤケタ、アネシブニイル、ヤエ」
「ウーン」
しばらく口がきけなかった。
家が焼けてしまった。そのうえ姉が死んでしまった。
「やっぱり、タバコだ。タバコだ。タバコだ。神さまをうらぎった罰だ」
「オレのせいだ。オレがわるかったんだ」
とつぜん、へんなことをいいだしたので、川井がビックリしていた。
いまさら、隊長をうらむわけにもいかない。隊長室に電報をかた手にとびこんできたわたしをみた蓮尾大尉は、
「どうした岡田、顔色がよくないな」
「ハイッ、三月九日の東京空襲で浜町のじぶんの家が焼けました。そのうえ、姉が死にました」
「ウーム、そりゃいかんな。ヨシ、休暇をやるからようすをみてこい」
隊長は、気のどくそうな顔をして、外泊証明書を書いてくれた。
三泊四日の外泊の許可をもらって、東京へむかった。

広島駅から東京駅まで、ゆうに一昼夜はかかる。乗客はわたし以外はみな地方人で、兵隊の姿は見あたらなかった。

腹がすいたので、中隊をでるとき、あらかじめ二食ぶんのオニギリを用意してきたので、その一食ぶんをとりだしてたべはじめた。

乗客の目がいっせいにわたしのもっている、おおきなオニギリにむけられた。

コーリャンがたくさんまじったものなので、たいしてうまいものではないのだが、みた目ではお赤飯のオニギリにみえたらしい。

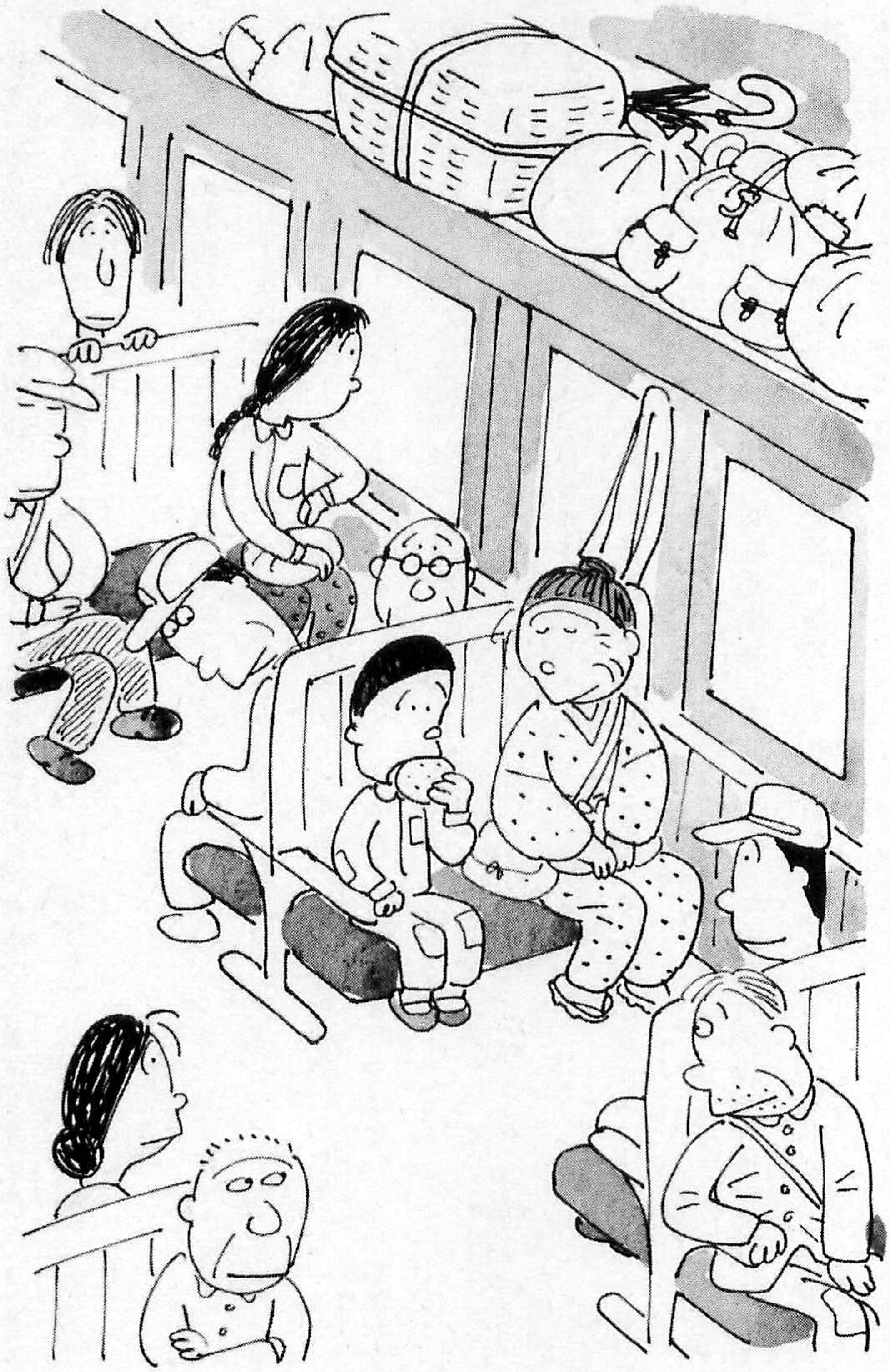
当時、地方人の食生活はけっしてらくではなかった。

気の弱いわたしは、その視線にたえられなくなって、目のまえにすわっていた、ちいさな子どもに「たべるかい?」と、きいたら、子供がコックリと頭をさげるかさげないうちに、となりのおばあちゃんが、

「こりゃどうもアリガトウございます。孫が腹をすかしておりました。助かります。でも、兵隊さんはいいですねえ。こんなごはんをたべられるなんて、幸せだよ……」

といわれた。お礼だか、うらみごとだかわからない。

「なに、いいんです。じぶんは……」



もう一食ぶんあるとはいわなかった。うっかり話して、それもとられてしまったら、こんどは、わたしの方がこまるのがわかりきっていたからだ。はく情なようだが一食ぶんで、かんべんしてもらった。

空腹のためお腹の虫がグーグーなっているのが、じぶんでもよくわかった。

みんなが寝しずまったのを見さだめて、わたしは音のしないようにソーッと、もう一食ぶんのオニギリをとりだして、しずかにしずかにちいさくちぎって、口のなかにはこんだ。

飯なんてものは、えんりょしながらくったって、けっしてうまいものではない。じぶんのものをたべるのに、こんなに気をつかったことはなかった。

二十四時間はながい。背中がいたくなるほどすわって、つかれはてた末にやっと解放されて、東京駅におりたのは、つぎの日の昼すぎであった。

なるほどききしにまさる大被害である。東京駅の八重洲口から日本橋がみえるくらいの焼けのが原になっていた。

浜町の家まであるいていく。もちろん全焼。あとかたもなくなった焼けあとにたたずんだわたしは、移転先の書いてある立札の住所をたよりに、牡殻町のかり住まいをたずねた。牡殻町と人形町の一部は焼けのこっていたのだ。

日本橋魚商組合日本橋支部と看板がでている。牡殻町二丁目の藤田さんという家の二階が事務所になっていた。

「ごめんください」と声をかけたら、

「ハーイ」と、ききおぼえのある声がきこえて、二階からおりてきたのは、当の義姉自身である。

「あれッ、義姉さん生きてたの……?」

「おどかすなよ岡田さん。びっくりするじゃねえかよッ」

と、目をぱちくりさせた。

義姉は、江戸っ子のチャキチャキで、魚河岸では浜町のおギンちゃんといえば、知らない人はいないといわれた人気者である。

なかなかの美人であったが、口のわるいのが玉にキズ、なまじっかの男なんか歯がたたない伝法肌で、男まさりの人であった。

「電報をもらって、おどろいて帰ってきたんだよ」

と、その電報をみせた。

「八重ちゃんがうったんだよ。アネシブニイルてーのは、支部にいるってえーことじゃないの。

死んだなんて、やんなっちゃうな……ハハハッ」
と、おお声で笑った。やれやれである。
その晩は、藤田さんの二階におせわになることにした。
夜の九時ごろ。
ラジオが、B29の来襲をつげる。
「空襲警報!! 空襲警報!!」
警防団員の声があわただしく、町内をかけあるく。
くらやみの中をメガホンの声が、町内の人たちを防空壕に誘導していた。
「さあはやく、防空壕にはいってください」
「義姉さんはやく、はやく」
わたしは義姉をうながして、じぶんも壕の中へはいろうとした。
「兵隊さんは、はいっちゃだめです。なにをしているんですか、はやく戦ってください」
「戦ってくださいったって、武器もなにもないのにむりですよ。こういうときは防空壕で待避するのが一番いいのです。サア、はやく外にいては危険です。はやく待避してください」
警防団の人は声をあらげて、

「なにをねぼけてるんだい‼　兵隊のくせに防空壕にはいろうなんてとんでもねえやつだッ。江戸っ子の面よごしだ」

と、さんざんにののしられた。

それもそのはず、警防団の面面は、いさましくかけまわっている。

いくらかけまわったって、敵機がおちるものではない。武器をもたないで戦えといっても、どだいむりな話なのである。

ところが、おむかいの歯医者さんの屋根のうえに火たたき（竹ザオのさきに水にぬらした縄を、ハタキのようにむすびつけたもの）をもって、仁王立ちになっている団長の姿が、探照燈の光りにうかびあがって見えた。

歌舞伎芝居の新門辰五郎じゃあ、あるまいし、そんなところで見得をきったってはじまらない。ずいぶんらんぼうな人もいるものだと感心したり、あきれるやらであった。

しかし、そうともいえない。その「火たたき」とぬれムシロで、敵の焼夷弾をけしとめたという、いさましい話をいくつもきいている。

当時の日本人は、世界の人には考えられない行動を平気でやってのける国民であった。

つよいというか、むちゃというのか、とにかくものすごい人類であったことにはちがいない

のである。

いうなれば、大和男子と大和撫子のあつまりであったのだ。

二本の探照燈が交叉しているまん中にB29の機体がくっきりとてらしだされた。高射砲陣地から、砲火の火ぶたはきられたものの、なにしろ、そうとう高度なのでなかなか命中しない。みすみす姿をとらえているだけに、そのくやしさはいいようがない。ただただ歯ぎしりをして見おくるばかりであった。

敵機は、東京上空を通りすぎ京浜地区を爆撃。被害はだいぶおおきかったようである。ラジオのニュースによると、そのため東海道線が不通になったと報道された。

さてこまったことには、三泊四日の外泊証明書の時間内には広島へ帰ることができない、帰隊がおくれれば、罰せられる。そこでさっそく、隊長あてに電報を打って、事情を知らせた。

家が焼けたぐらいでは、広島から帰ってはこられないと、おかあちゃんは、おばあちゃんといっしょに秋田に疎開して留守。長居は無用と、はやばやに帰ることにした。

何線と何線を利用したのか、あっちへ行ったり、こっちへもどったりしながらも、やっと山陽本線にのり継ぐことができて、どうやらこうやら広島に着いた。

一日おくれただけで、ぶじ、宇品の中隊にもどり隊長に帰隊の申告をすませた。

話のわかる苦労人の蓮尾大尉は、

「なんだお前。せっかくそんなことがあったのだから、こっちのことは、心配しないで一週間も家でゆっくりしておればいいのに……」

と、ニヤリと笑った。

「ハイッ、じつは、かあちゃんがいなかったもので、つまらないからすぐ帰ってきました」

まさか、そんなことはいえない。

「ハッ、アリガトウございます!!」

と、まじめそのものの顔をして、隊長室をでた。事務室にもどったら、ひさしぶりにロッパ先生からのお便りがあった。

「甘味再度ありがとう。清（古川先生の坊っちゃん）大よろこびだ。

毎日毎日来襲でうるさい。最近は大分火災起こり、被害も大きくなり、知人にも罹災する者多く、心配してゐる。明治座も焼けたさうだが、君の家の方は何うだらう、さぞ君も心配だらう、東京に居ても中々様子が分らない。

幸い今迄のところ、家の方は何の被害もありません。

東横は九日に初日を開けたところ、大満員でおどろいた。中々活気もあり心強し。十日十一日とプウプウ来たので休み。又、返り初日となる。さてこれから先は又何うなるだろう。

思へば壮烈なる世の中なるかな。たより待つ。

三月十一日　　古川生

岡田六郎様　　」

さっそくタバコ事件と三泊四日の空襲顛末記を書いて返信をだした。

四月の始めにロッパ先生からまたお便りをいただいた。

「一家無事とのこと、よかった。うちの座員も焼けだされた者はあるが、怪我人もなし、先づはめでたし。

東横の入りはますますよろし、押すな押すなの行列満員、二狂言とも大受けだ喜んでくれ。

今日は大戦果の発表で元気づいている、元気でますますがんばらう。これは『突貫駅長』

のスチール、一昨日封切、中々評判いいやう(よ)だ、そちらへ行ったら見てくれ、十日ばかり前に女房と子供二人はソカイした。ただ一人淋しく居る。
勝つまでの辛抱なり、ナニクソ！
戦友によろしく。又たより出す、そちらも呉れ。

三月三十一日夜　　　古川生」

岡田六郎様

ロッパ先生は、渋谷の東横劇場でがんばっている。芝居は大入り大満員。戦争のさなかでもやはり、大衆は笑いをもとめているのだ。できることならはやく帰って舞台にでたいと心の底からそう思った。入隊して二年半。平常時なら三年で満期除隊になるのだが、今は非常時。とてもそれをのぞむことはむりな話である。

ロッパ先生のお便りの中にもある通り。

〃ナニクソッ！
勝つまでの辛抱なり〃

なのである。

入院志願

二月二十一日に丸山定夫、園井恵子主演の苦楽座移動隊の「獅子」の慰問公演が、宇品のガイセン館でおこなわれた。

園井恵子さんが、ロッパ一座に特別出演してご一緒したことがあるので、ガイセン館の楽屋をおたずねした。

「なにーッ!! 女優さんに面会だと、だめだ、だめだ。上等兵の分際で貴様、なまいきだぞッ、帰れッ!!」

楽屋係りの将校にケンもホロロにことわられた。

「じぶんは地方にいたとき、役者でありましてお芝居を一緒にしたことがあるので知っております。おめにかかりたいので、アリマス」

なんといおうとどうたのもうと、一歩も中にいれてくれなかった。上等兵であろうが、将校であろうがそんなことは関係のないことなのに……。

軍隊というところは、なんとヤボなところだとあきれかえったが、それ以上ねばっても、ぶんなぐられるのが落ちだと思ってあきらめた。

客席には、かろうじてはいることができた。幕切れで、獅子頭をもった丸山定夫さんが、線路ぎわを走る姿が目にやきついて当分忘れることができなかった。

その日は、小雪のふる寒い日であったが、芝居をみた感激と、じぶん自身の体内におどる若い情熱のたぎりが、その寒さを感じさせなかった。面会できなかったくやしさを胸に、わたしは、わりきれない気持ちで宇品の中隊に帰った。

丸山先生の一行〝苦楽座移動隊〟はその後〝桜隊〟という名で、移動演劇活動をつづけていると、風の便りで知ったのである。

期せずして、ロッパ先生から、二月二十一日付のお便りがあった。

「珍らしいもののお送り下され、有難たう。子供大喜びで、やってます。

いつも心にかけて呉れて、有がたう。連日プウプウで実にうるさい。近頃のやうに、ヒンパンに来襲されると、もう芝居も映画も、何うなることとか、実際、しつこいものだと呆れてゐる。

三月は、又々予定が変更して、東横へ又出ることになった。
出したものは、二つとも俺が書いたもの、新宿でやった『歌と兵隊』
これは軍事保護院の総裁賞を受賞したので、その記念として再上演する。
又、もう一つは映画でやった『突貫駅長』を芝居にしたもの。
これからは、何うなるか、全く、見ものだよ。先づは一家無事元気、安心してくれ。
おん礼まで。

二月二十一日夜　　古川生

岡田六郎様」

お便りに「珍らしいものお送り下され有がたう」とあるが、珍らしいものとは、バナナとパイナップルの干したものなのである。
ロッパ先生のお家や、浜町の家へ、ずいぶんいろんな物を送った。
郵便屋さんが、
「お宅は、よくこんなにたくさん軍隊から小包を送ってもらえますねえ……」
と、しきりに感心していたとか。

そのころのわたしは、中隊でもかなりいい顔になっていて、中隊長からも信用を得ていたので、郵便物も、ほかの兵隊よりは、自由にだすことができたのである。

あるとき、糧秣庫（食料と飼葉をいれておく倉庫）でなんだかわからない茶色の粒状のものをひと袋もらったので、例によって家へ送った。

家でも、その品物が何だかわからないので、コーヒーの小つぶかな？　と炊ってみたり、それでもだめなので、煮たり焼いたりいろいろやってみたがどうにもならなかった。

あとでわかったことなのだが、それは、〝大根のタネ〟であった。

知らないとはいえ、ずいぶんと人さわがせなことをしたものである。

食料事情は、日ましにわるく軍隊といえども、昔のようにふんだんにあるわけではない。

「新畑軍曹殿!!　食事をもってまいりました」

「ヨシ、はいれッ」

班長の個室へ初年兵がもってはいると、

「おい、岡田。ちょっときてくれッ!!」

「ハイ、なんでアリマスカ」

「この魚、頭ばかりでくうところがないから、シッポの方ととりかえてくれッ」

「いえ、班長殿!! これはお頭つきといって、一番えらい人にだすことになっています」
「ウーン、そうか。そうなっているのか……?」
班長はしぶしぶ納得した。
新畑軍曹は、中隊きってのはりきり班長として、その名をとどろかせていた人だった。そんなことでもして凹ませるのが、われわれ兵隊のせめてもの楽しみでもあったのだ。

わたしは一度、陸軍病院に入院してみたいと思った。経験しておけば、芝居のときに役にたつだろうと、考えたのだからのんきなものである。

神経痛と肋膜炎は、病気のなかでもなかなか調べにくいものだときかされたので、わたしは肋膜炎ではないかと、軍医に申しでた。もちろん仮病である。

「軍医殿、じぶんは朝夕微熱がでて、立ちくらみをするのでアリマスが、肋膜炎ではないでショウか?」
「何ッ!! そんなことがじぶんでわかるかッ。ヨシッ、今、調べてやるから、そのイスに腰かけて、机のカドにつかまれッ!!」
なにをするのか、わからないのでいわれるままにして、何気なくうしろをむいたら、軍医が馬の注射器みたいなふとくて長いやつをもってきた。

「今、水がたまっているかどうかみてやる」
と、背中に手をかけた。
「ウヘーッ、軍医殿、助けてください」
「さわぐな、静かにしろッ!!」
机のカドにつかまるどころではない。しがみついて目をつぶり、歯をくいしばった。
ブスッと、右のわきっ腹をさされた。
「ウワーッ」
「いかん!! 場所をまちがえた」
と、二、三度ブスブスさしたりぬいたりされたのだから、たまらない。そのうえスーッとすいあげる。
背中と胸のあいだがパリパリパリパリとひっつくように感じたが、入院するためだとがまんした。
「オイ!! 水はたまっておらん、だいじょうぶだッ!!」
ここでおいかえされたのでは、今までの苦しみが水のアワである。
「水のたまらない乾性の肋膜炎というのがあるときいたことがアリマスが……」

と、なおもねばった。

軍医は書類をみてニヤニヤしながら、

「お前かッ、ロッパ一座の役者だったというのは。ケビョウだなッ」

と、見やぶられてしまった。

「ヨシッ‼　たるみ病だ。一週間の就寝許可をやる」

とうとう入院は、はたせなかったが、内務班で楽楽と寝ていられるとよろこんだ。もともと病人ではないのだから、熱などでるはずがない。検温にくると、その前に毛布で、体温計をコスッてごまかしていたが、一日、二日は、寝ていられるが、そのうちにたいくつはするし、起きることはできないので、身体をもてあまし、楽楽どころか、むしろたいへんな苦痛である。

一週間の就寝許可とは、わたしのなまけ病にたいする、罰であった。軍医殿もなかなかどうして、そうやすやすとはだまされない。

わたしにとっては、良いクスリとなったのである。

ヤットコ兵長

日本全土、各都市がひんぱんに空襲されたにもかかわらず、広島は、一度も爆撃はされていない。

アメリカに移民した人たちは広島県人がおおかったとか、二世、三世にとっては、広島は第二の故郷であるから、空襲はしないのだと、ある人はいった。

ところが珍らしくボーイングＢ29がやってきた。紙の爆弾をまきにきたのだ。

この宣伝ビラは伝単と呼ばれ、その内容は空襲の予告、軍閥に対する非難、日本の実情暴露など、これをひろったら、すぐ警察へ届け出なければならなかった。

そのときわたしは、恒やん（市川恒吉）と二人で、何のためだかわけもわからず、営庭に穴を掘っていたのだ。

その日はたしか休日で、酒の配給があって二人ともいいご機嫌であった。

〽思いもよらずわれひとり
ふしぎに命ながらえて
赤い夕日の満州に
友の塚穴掘ろうとは

「戦友」の歌をうたいながら穴をほっていたのだから、のんきなものである。

どうも江戸っ子というのは、オッチョコチョイでしまらない。彼はいつも口ぐせに、

「オレは地方にいたときは、ちっぽけなことはやらない。どでかいことをやっていたんだ」と。

なにをやっていたのか知らないが、ふとっ腹で、おおきな会社の社長みたいな顔をしていたけれど、じつはたいへん気のちいさいところのある、かわいいやつで、わたしとはウマがあってなかよくしていた。戦友というより、大の悪友でもあったのだ。

恒やんは、電話室に勤務していた。女の子と一緒に仕事をしているのがうらやましくて、わたしもよく電話室へ用もないのにウロウロ遊びにいったものである。

その関係で彼が門司に転属したときも、新潟時代の山崎の五郎ちゃんが釜山にいっていたときも、わたしから電話をもらったとよろこんでいた。

どこにでも顔をだして、演芸をやっていた。わたしの役得でもあったのだ。

その日のボーイングB29はビラをまきにきたのである。

酔っぱらって、ふらふらしながら、穴なんぞ掘っていたが、もしも爆撃でもされていたら、じぶんでじぶんの墓穴を掘ったようなものだ。紙の爆弾であったのは、幸運にほかならない。

そのころ広島の上空にときどき、敵機が宣伝ビラをまきにきた。

ときには拾円札が空からふってきた。もちろんニセ札である。

表だけみればまったく本物ソックリ。裏も印刷してあれば、立派に通用するくらいみごとなできばえであった。

その拾円札の裏には、

〝軍閥が支那と戦争を未だ始めて居なかった昭和五年には十円で次の物が買へた。

一、上等米　二斗五　升

一、或ひは夏着物八着分の反物

一、或ひは木炭四　俵

〝支那事変勃発後の昭和十二年には次の物が買へた。〟

一、下等米、二斗五升
一、或ひは夏着物五着分の反物
一、或ひは木炭二俵半

〃世界の最大強国を相手に三年間絶望的戦争を続けた今日、十円で次の物が買へた。〃

一、暗取引して上等米一升二合
一、木炭少額（買ひ得れば）
一、木綿物なし

以上が、諸君の指導者の云ふ共栄圏の成行である。

と、印刷されてあった。これを日本国民に読ませて戦意をそう失させようとするこんたんなのかもしれないが、にくいことをやったものである。

たとえどんなまずしく不自由な生活をしていても、その当時の人達は

〃欲しがりません勝つまでは〃

というのが全国民の合言葉にもなっていた。

「おいッ!!　連隊長殿の長グツをみがいたのはだれか」

「ハイッ!! じぶんでアリマス!!」

「岡田かッ、副官殿がおよびだッ。すぐ連隊本部へいけッ!!」

新畑軍曹にいわれて本部へとんでいった。

連隊長は、中川多計士中佐である。石橋隊の隊長が少佐に栄進して、連隊副官。蓮尾大尉は連隊本部指揮班長と、わたしの属していた中隊の隊長は、それぞれ連隊本部のおえら方になっていたので、わたしも肩身がひろい。

「上等兵岡田まいりました」

「オオ、連隊長殿が、お前のクツのみがき方をほめておったぞッ!!」

石橋副官が、ニコニコしながらそういった。

長グツをみがくのにもコツがある。よこにブラシをかけると光るのと、たてにこすると光ってくるのと、つくるときの革のつかい方にもよるのだろうが、その点をはやくのみこまないとうまくみがけない。

クツのそこのドロをきれいにおとし、拍車(乗馬のとき、馬のよこっ腹をチョッとけるために長グツのカカトの部分についていてギザギザしている金具)も歯みがき粉をつかってピカピカに光らせた。

そのおかげで、石橋副官の当番兵になり広島の比治山にある、砲兵団司令部に公用兵として、書類のうけわたしをする重要な任務を、おおせつかったのである。

責任はおもいが、まい日、外出できるのだから、こんなありがたいことはない。

ときには市内にたちよって用をたすこともできたので、隊内にいる事務室のアブラ虫より気ぶんもいい。アブラ虫変じて赤トンボ。スイスイとんであるいた。

市内の旅館で連隊長が他の部隊の幹部と話しあいがあるとのことで、その旅館におともをして、お世話をするように申しつかった。

当時のこととて、食料難である。旅館での食事の材料はぜんぶ連隊の炊事場からはこんだ。

旅館に着いてからは、そこの女中さんに身のまわりのお世話をたのんで、わたしは旅館の帳場のおくの部屋で、女の子とトランプ遊びをして待機していた。

「連隊長殿、背中をながすでアリマス」

五分刈りのグリグリ頭の兵隊が湯殿でまごまごするよりもお姉さまの方がずーっといいのにきまっている。

そのへんのところが、ふつうの兵隊さんとちがった、わたしのいい意味の要領のよさだったのである。

船舶司令部へいっても、将校集会所、陸軍病院、郵便局にいたるまで、どこへ行っても、その調子なのでうけがよかった。

おかげでわすれられていた兵長進級の話がもちあがって、おそまきながら、村松の連隊からかぞえて二年半ぶりに、待望の金筋、陸軍兵長岡田六郎になったのである。

ヤットコ兵長、阿部中尉からもらった階級章が、ひさしぶりに日の目をみることができた。

わたしの兵隊ぐらしの最後にいただいた古川ロッパ先生のお便りである。

「兵長に昇進のこと、おめでたう。ますます元気で嬉しい。俺も相変らず――と書きたいところだが、変わったよ。五月二十五日夜、わが家も灰燼と化した。五月二十二日出発で、東北、北陸の方へ巡演、その留守中にやられてしまった。

でも、元気で旅をつづけ、福井迄行って家族に四ヶ月振りで会って来た。みんな元気でゐるから安心してくれ。そして七月三日に帰京して、初めて、わが家の焼け跡を見た。何うも感慨無量だった。父祖三代の家だ。然し、ナニクソ、家は焼けても身は焼けぬ。かうなったら、ますますやるぞ。

かういふ時こそ、本当に挺身の覚悟でうんとやる。

ラジオへも、旅してたので出られなかったが、益々やるからきいてくれ。
十五日頃から始めるつもり。イモンも毎日やっている。座員も可笑しい位元気である。大半は罹災したが、少しも参ってゐる奴は居らん。
岡田も、しっかりやれよ。俺は大丈夫だ。では表記に当分ゐるから、たより呉れ。今日は朝から空襲警報四回。
うるさいぞ！

七月十日　　　　　　　　　古川　生
岡田六郎様」

この手紙と同封して古川キヨシちゃん（坊っちゃん）のノートのきれはしに日の丸の旗と坊主ックリの兵隊さんの絵。わたしのことかもしれない。それに古川キヨシとサインが書いてあった。三歳ぐらいだったと思う。クレヨンで曲りくねって書いてある可愛らしいものである。
お便りをよみ終わってロッパ先生のお気持ちを察したら、ジーンと涙がでてきてしまった。

笑わん中将

広島の比治山にあった砲兵団司令部の団長は、陸軍中将三島閣下である。
中将といえばたいへんなもの。「大将の前を少将ごめんなさい」というくらいなものでとしゃれている場合ではないが、この三島中将なる人はまことに厳格な武将であり、もののふの鏡であると各関係諸部隊にとどろきわたっていた（ちょっとほめすぎかな）。
この中将なにしろ人前ではぜったいに笑わない。いつもニガ虫をかみつぶしたような顔をしていた。
じぶんではべつにおこっているわけでも、きげんがわるいわけでもないのだそうだが、われわれからみれば、ふきげんのかたまりが軍服を着ているようなものである（ちょっとわるくいいすぎかな）。
あまり笑わないので、司令部から、わたしに笑わん中将を笑わしにきてくれと要請されたのである。

たのむ方もたのむ方であるが、たのまれる方もまた、たのまれる方だ。

「岡田、お前、司令部へいって三島中将を笑わしてこいよ。笑わしたらごほうびをだすから」

なんぞと仲間におだてられて、のこのこ比治山まででかけていったのだから、わたしもお調子者である。

連隊の公用兵のわたしは、ちょいちょい公用で司令部まではきているので、砲兵団の関係者もわたしのことはよく知っている。事務をとっている中には、女性もたくさんいる。

それもわたしを司令部に足をむけさせたおおきな原因の一つでもあったのだ。

閣下ご自身は知らなかったかもしれないが、中将を笑わすためにわざわざ演芸会をひらいたようなものだから、わたしとしてもいつもより気合いがはいった。

舞台にたって客席をみると、いるいる。笑わん中将は、中央にでんとかまえて、軍刀を両ひざのあいだにはさむようにたてて、そのツカの上に両手をかさねておき、穴のあくほど、わたしの顔をグッとにらみつけている。

これでは、裁判にかけられた被告みたいだ。

「エーッ、まずはじめはカエルの口づけ」

キッスなどといったら、敵国のことばなぞ言語道断であると、おしかりをこうむる。

ケロケロ、ゲロゲロ、キュキュキュキューッチュッ……。
ワーッという笑い声が、場内でおきた。閣下の顔は、あいかわらず、わたしをにらんでいる。
「それでは、ニワトリがタマゴをうむところ……」
コッコッコ、コケーコッコカーカーココココ、ポカン。
人さし指を口のなかにいれて音をさせた。
これもだめ。なにをやっても笑わない。おしてもひいてもどうにもならない。
そのうちにまわりの連中が心配しだしたので、ますますいけない。気持ちはあせるばかりである。ノドはカラカラにかわいてしまった。もうどのくらいやっているのかと、ちらっと左手のうで時計をみた。
「そうだ、ラジオの時報のまねをやってみよう」
もう必死である。
「それでは、ただいまから時刻をお知らせいたします」
アナウンサー調で、そういったあと、カッチンカッチンとふりこの音をさせる。
これはうわアゴに舌をくっつけて、口をあけるようにして舌をはなすと、その音になる。ボンボンと音をだすボンのンをン――とのばしておいて、それにだぶらせて、カッチン、カッチ

ン、カッチンとつなげ、カッチン、カッチンボンボンボとつづいて、おわりにポーンと、チャイムの音のまねをする。

そして、

「八時をお知らせしました。台湾と満州では七時にお合わせください」

と、むすぶ。

ところが、とちゅうのポーンというところで、とつじょとして、あのにらめっこの閣下の顔がくずれた。

「ワッハハハ、ワーッハハハッ」

あたりかまわず大声で笑った。

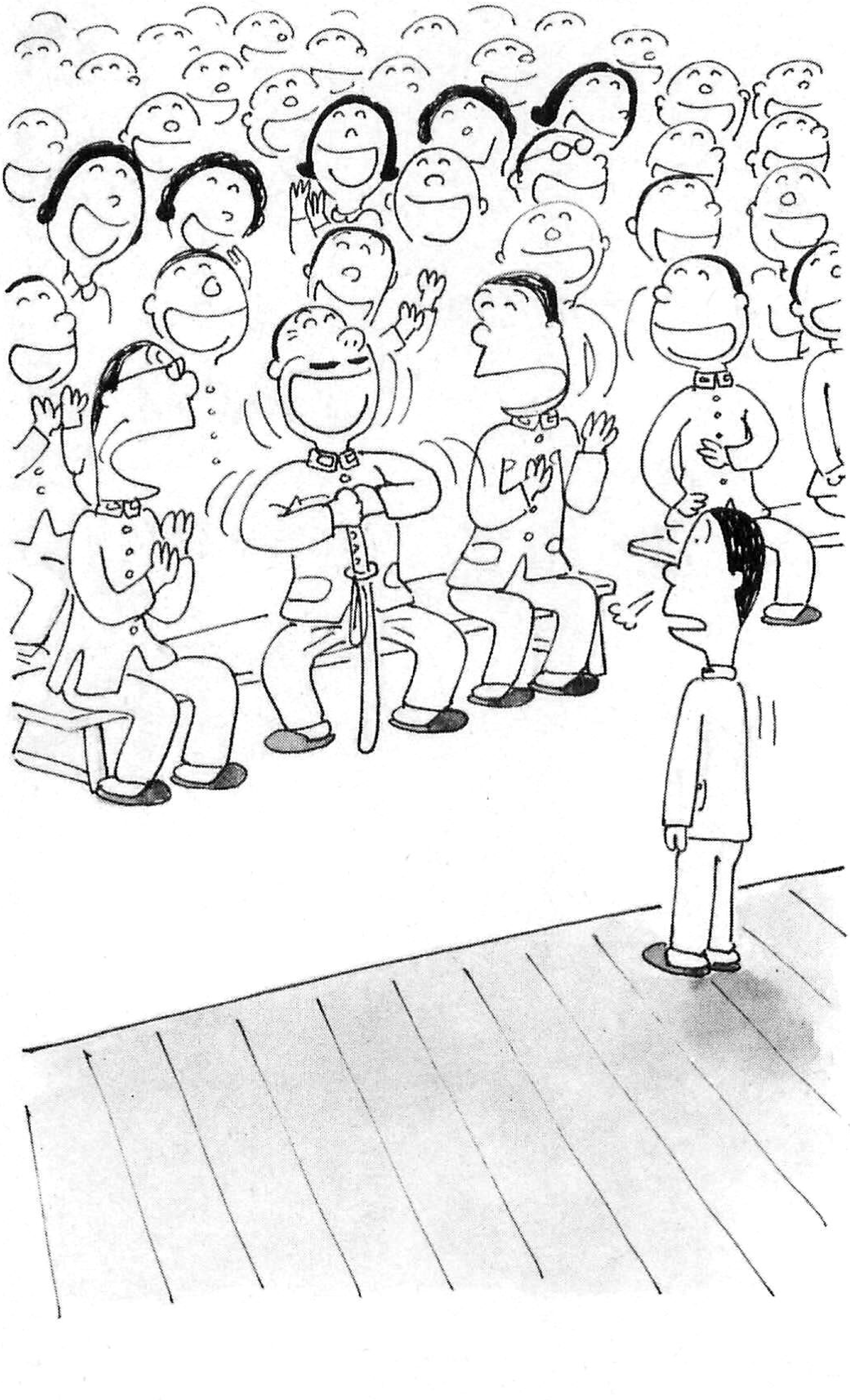
いままで笑わなかったぶんまで、いっぺんにはきだしてしまったような笑い方である。

あまり、とつぜん笑い出したので、わたしはきょとんとしてしまった。

ラジオの時報のまねなんて、べつにそれほどおかしいものではない。むしろめずらしく、「フムーン」と感心してうなるようなところだけに、いがいに思った。

どうしても笑ってくれないので、苦しまぎれにやったネタが成功したのである。

「あっ、笑った笑った。笑わん中将が笑った」



笑うときに笑わないで、たいしておもしろくもないところで笑ったものだから、まわりの連中は、それがおかしくてドッと笑った。

いずれにしても笑わしにきたわたしは、面目をほどこしたのである。

ましてや、女子職員からヤンヤの拍手カッサイをうけて、わたしのハナの下がいやがうえにものびたのは、いうまでもない。

八月五日が、第一船舶砲兵隊の創立記念日である。

軍旗のある連隊では軍旗祭というが、船舶隊には軍旗がないので、記念日といっていた。

派遣班、各中隊の代表による演芸大会が、プログラムに組みこまれた。

わたしは、各中隊からもろもろの相談をうけておおいそがしである。

なにしろ演芸会には、賞がかかっているのだから、どこの隊でも、たいへんな力のいれようである。

まい日、あちら、こちらと、かけもちで、とびまわってアセびっしょり。夏場のことだから、なおさらである。入浴場へひとアセながしにいった。

――入浴場規定――

一、入浴時を厳守
一、湯水を乱費するな
一、静粛に入浴せよ
一、貴重品は預けよ
一、浴場で洗濯するな
一、患者は浴槽及び桶の使用区分を厳に守れ
花柳病は赤。
皮膚病は青。
トラホームは白。

と、オケにそれぞれの色の線がしてあった。これは、ちゃんとした内地の連隊。わたしが初年兵のころはそうなっていたが、宇品の部隊は内地ではあるが、兵舎そのほかも、戦地なみでバラックである。

したがって、入浴場もかんたんなもので使用するオケもそれほどきっちりとはしていなかった。

わたしなんかは、なまい気にじぶん専用の洗面器をつかっていた。
入浴場も兵隊用は兵隊さんだけ、上官の入浴場はべつにあった。
兵長であるわたしは、兵隊プロでは、だれにえんりょはいらない、おおいばりである。
「兵長殿、背中をながします」
「オッ、アリガトウ!!」
兵長とは、兵の長なのである（一寸とえばらしてもらう）。
浴槽につかって明日のけい古のだんどりなんかを考えていると、年輩の見知らぬ兵隊がつかつかとはいってきて、わたしのつかっている洗面器で身体に湯をかけはじめた。なにしろ態度の大きなやつである。
「オイ、貴様、オレの洗面器を気やすくつかうなッ!!」
と、おどかした。
「まァ、そうおこるなッ。ちょっとかりるぞッ」
あわてずさわがず、へいぜんとしている。
おやッ!! コイツ、いやに落ち着いていやがるが、オレより古いのかなッ。それとも上官かしらッ？

いやそんなはずはない兵隊専用の入浴場なのだから。わたしは怒鳴りながら浴槽をでたもののあい手があまりにも動じないので、手もちぶさたのまま、フルチンでつっ立っていた。じぶんながら、あまりいい姿ではないと思い、初年兵の手前引込みがつかなかったが、ブツブツいいながらあがってしまった。

兵舎でゴロゴロしていたら、

「兵長殿、本部で隊長殿がお呼びでアリマス!!」

「オーッ、ゴクロー」

返事の仕方もどうやら、金筋らしく板についてきた。

「隊長殿!! お呼びでアリマスか?」

「おお岡田、福山の本隊からお前に演芸をやってもらいたいと、わざわざむかえにきた。福山連隊本部の○○中尉だ」

「ハッ、兵長岡田でアリマス」

と、顔をみてびっくり。紹介されたのは、さっきフロ場でわたしの洗面器をつかったあの野郎であった。

「ハッ、先ほどはご無礼をいたしました」

と、首をちぢめた。
「なんだお前だったのか、バカに威勢のいいやつだと思ったが、兵隊のフロに入ったオレの方がまちがっていたのだから、お前がおこるのはあたり前だ……。
ところで、どうだ、福山へいっしょにいってくれるか？」
どうなることかと、身体をかたくしていたが、その言葉にホッとした。
「いや、岡田は広島の記念日の方でも活やくしてもらわにゃならんので、つれていかれてはこまる」
蓮尾大尉が、わたしにかわってことわってくれた。
福山の連隊からお呼びがかかるとは、オレもたいした人気者になったものだと、まんざらわるい気持ちはしなかった。
よく日、他中隊の〝歌謡ショー〟の演出のお手つだいのためにけい古場にでかけた。
「おい岡田、そこへオレがでて歌をうたう」
やたらにでたがる軍曹がいるのにはよわった。じぶんより上官にそういわれるとじつにこまる。
なにしろ、みんないい役をやりたがるのだから、まとまるものもまとまらない。

「軍曹殿、このショーに関しては、階級はべつにして、じぶんのいうとおりにやってください。おねがいします」
「ヨシ、わかった。お前のやりたいようにやれッ」
と命令的である。
やや、しばらくするとまた、
「オレにその役をやらせろッ!!」
と、しゃしゃりでてくる。
そんなこんなで、どがちゃがではあったが、なんとかまとめて、あとはおまかせとひきさがった。
けい古の合間に
「これは強盗殺人犯を逮捕したときのものだ」
と一葉の写真をみせてくれた。
彼の兄貴は、警察の刑事であった。
「ハハァ、人殺しをやるようなやつは、すごい顔をしてますねえ……」
と、ゆびをさしたら、

「バカ者ッ!! それはオレの兄貴だ!!」

と、おこられた。

刑事の方が、犯人よりおっかない顔をしているのがおかしかった。

その写真を見せてもらったのが、ヒントになって、われわれ派遣班は、ドロボーのでてくる、短いお芝居をやることにしたのである。

すじ書きは、酒のみでなまけ者の石屋の職人が村のお地蔵さまをつくるようにと、村長さんにたのまれたが、期日にまにあわないために、じぶんがお地蔵さまになりすましてたっていると、そこへ参詣人やら通行人が登場して、ついには、ドロボーをつかまえるというお話なのである。

これはよく落語家が「シカ芝居」といって、上演したものである。

子どものころ、初代猫八おやじの一座でやっているのを、おぼろげにおぼえていて、それをもとにわたしがつくりあげたのである。

『村のお地蔵様』

主なる配役

村長さん　川井広義

泥　棒　　左坤松夫
お巡りさん　高倉淳一
村人　　　前田長吉
石屋の職人　岡田六郎
　　その他大勢

衣裳は、左坤松夫が、ボート屋のおばちゃんから借りてきてくれた。
お化粧は、わたしがみんなの顔をこしらえてやった。
大道具、小道具は前田の長やん、川井、高倉が担当して制作した。
派遣班の連中が総がかりでの力作である。
そのほかにわたしは〝ものまね漫談〟をやった。
当日の演芸大会の成績は上々、賞品は沢山の酒。
その夜はとくにおゆるしがでて、飲めやうたえの大宴会。ひさしぶりのたのしい夜をすごした。
消燈とよく朝の起床時間が延期になったのも、軍隊としては異例のことであった。

ピカドン

公用腕章をつけてでかけるつもりでいたのだが、前夜の酒がのこって二日酔い……。頭はふらふら気ぶんがわるかったので、厠へいって、内務班でやすんでいた。

あおむけに寝ころんでいたら、上空から、ゴーンゴーンと飛行機の爆音がきこえてきた。

「オヤッ!! またおいでなすッたな!!」

そのころはやたらと広島へ敵機がビラをまきにきたものだった。

「兵長殿!! ボーイングB29から落下傘がおちてきました」

「まぬけなやつがいるもんだな。ビラをまきそこなって落っこったんだよッ。かまわねえから、機関銃で撃っちまえッ!!」

「ハッ」

と、答えて彼は、わざッとらしい敬礼をして、営庭にもどった。

その直後、ピカッとおもてが明るくなった。

その光りは青く、白く、オレンジ色、なんともいいようのない、今だかつてみたことのない光りであった。その日は快晴で空は青くすみわたっていたはず、だが、その太陽の光より明るく、その光りがきえたときは、いっしゅん太陽の光りが暗く感じたくらいで、まるで太陽が地球にちかづいたのではないかとさえ思った。と、ドーン、ズズーン、下っ腹にくいこむような音がした。

わたしはあわてて兵舎の外へとびだしたと同時に、爆風にあおられて二メートルも吹きとばされ、つんのめるように地べたにはいつくばっていた。

「あぶないぞッ!!」

わたしはとっさに兵舎の横にある、防空壕にもぐりこみ、ジーッと息をころしてようすをみた。

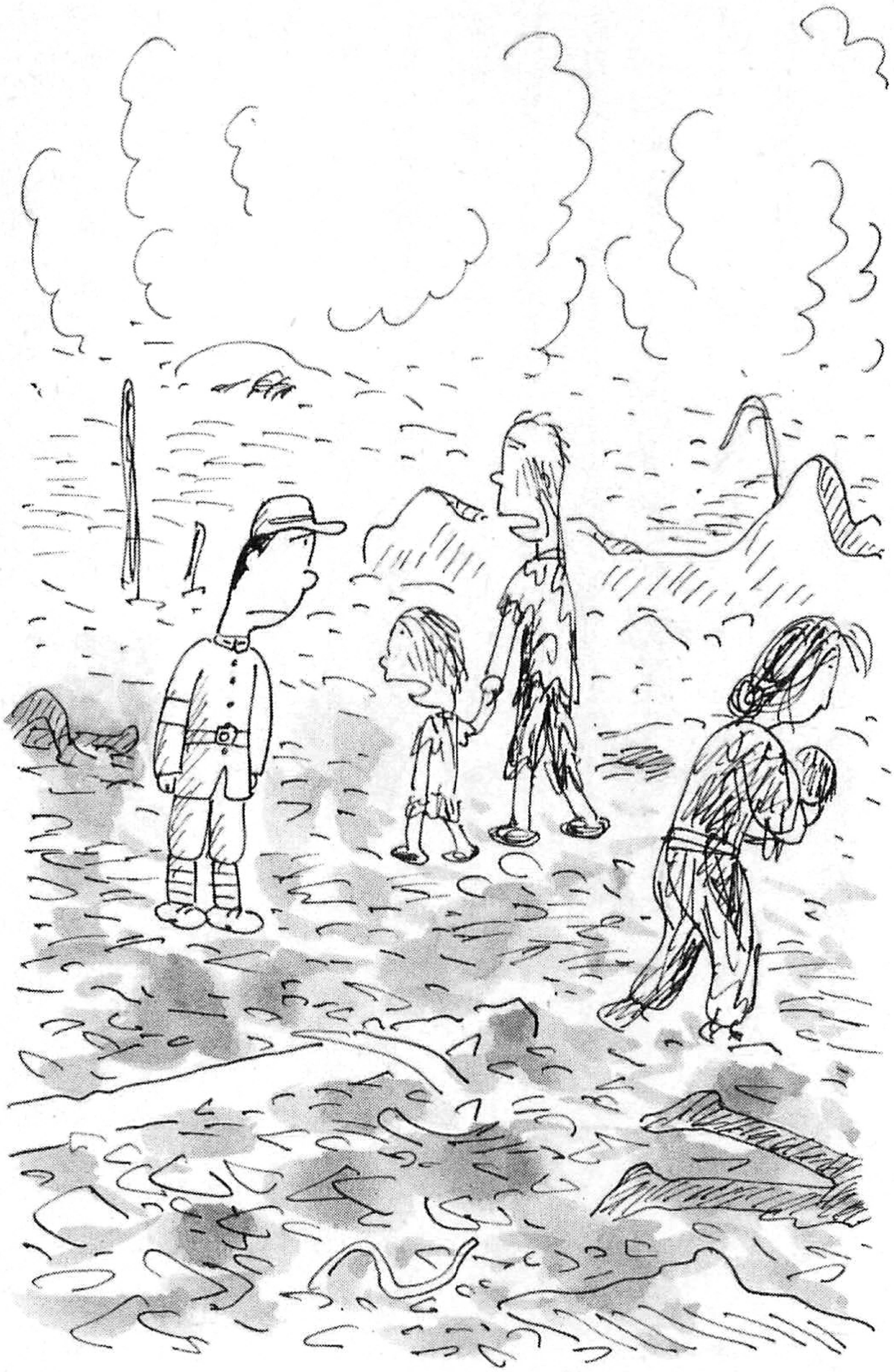
もともと、おく病者のわたしのことだから、しばらく外へでるのを見あわせたのである。

そのうちに営庭で作業をしていた連中がもどってきたとみえて、表がザワザワとさわがしくなってきた。

「おい兵舎のガラスがメチャメチャだ」

「スゲェ、爆風だったもんな」

班長の声がかぶさって、
「おいッ、岡田兵長はどこにいったんだ」
「あれッ、兵長殿は今、ここに寝ていたんですが」
わたしに知らせにきた兵隊がそう答えた。
「おーい、見ろよッ。この石、岡田が寝てたら頭ぺちゃんこだぜ」
高倉上等兵のとっぴょうしもないうわずった声がきこえた。
もうそろそろいいだろう、タヌキやキツネじゃあるまいし、そういつまでも、穴の中にはいっているわけにもいかない。
「班長殿!! じぶんはここにおります」
防空壕からのこのこはいだして兵舎の入口で敬礼をした。
「ここにおりますどころじゃないぞッ!! みてみろ、お前あぶないところでオダブツだったぞッ!!」
班長の指さすところをみて、ぶったまげた。わたしの寝ていた、ちょうど頭のところにストーブのエントツを兵舎の外へだす、防火用の石綿でできていた四角にまるい穴のあいている石がおちていた。



まわりには窓ガラスの破へんがちらばっている。

「岡田兵長、お前、外出のしたくをしているな。ちょうどいい、そのまますぐ、市内のようすをみてこい」

「ハイ、いってまいります」

わたしはただちに、営門をでて広島市内にむかった。

上空には、巨大なキノコの形をした雲が、不気味にむくむくと大空をおおっていた。

宇品の市電の停車場には、電車のくるようすがない。やむなくあるいていくことにした。

翠町のタバコの専売局の前あたりまでいくと、

「お母ちゃーん、お母ちゃーん」

前方からちいさな子どもの手をひいたおじいちゃんが、孫の母親をさがしているのだろう。

その上半身は焼けただれて黒く、着ている衣類は、ボロボロにこげてやぶれていた。

赤ん坊をだいて目はうつろ。放心状態のわかい母親。妻を、夫を、母を子どもと半狂乱でさがし求める人、人。

その叫び声はうめくようで、その姿はまさに地獄絵さながらのありさまであった。

「これは、ただごとではない‼」

わたしは、きゅうきょ派遣班にとってかえして、隊長にその状況を報告した。

市内はもとより、各地との連絡はまったくマヒ状態。情報はとだえてしまった。

それでも、どこからともなく、アメリカの新型爆弾で、その威力はマッチ箱大のものが二つもあれば、日本はふきとんでしまうと、怪情報がみだれとんだ。

宇品の派遣班、そのほか、在営の兵隊は、派遣班長の命をうけて、ただちに、救護活動を開始した。

広島三十四万の人口のうち大半の人が、死亡、負傷、行方不明になったのである。ま夏のことでもあり、死体はそのままにしておけば腐敗する。

まず死亡した人たちを収容して、一か所にあつめ、荼毘にふさなければならない。

市内にはるいるいと死体が横たわっている。トラックに何台ものせて太田川の土手へはこぶ。

路上には、電信柱をささえるワイヤーロープにつかまったままで死んでいる人、川の中から上半身を水の上にだして虚空をつかむようにしてこう直している死者。水死体となって、川にういている男、女、そのなかには、牛や馬もまじっていた。

キノコ雲はまだきえない。

広島の上空のはんぶんに大雨がふったかと思えば、その反対側のはんぶんが晴れてお日さまがみえる青空。気象の変化もともなった。まるで、キツネの嫁入りのアレである。

雨のふった夜は、市内をむやみにあるくと死体をふんでしまうので、まっ暗闇の中にジーッと目をすえていると、その死体からポッ、ポーと、青白い光りがうきあがるようにかすかにみえる。

それは死体からでる燐が燃える光りだときかされた。

宇品方面と比治山の麓で被爆した反対側は、風むきの関係で被害は、市内のそれよりもいくらか、かるかったようである。それらの焼けのこった家屋の類焼をふせぐために、間引きする作業にもでかけた。とちゅう中心地でも火災をまぬがれた家のたおれた屋根の下敷きになり、その重さで天井のハリの下にはさまって身うごきのできない人の救出にあたった。だが、小人数では思うにまかせず、とちゅうで息をひきとった、お気のどくの人もなん人かいる。

自力でにげた人、助けられてきた負傷者が、つぎつぎと宇品にはこばれてくる。そして、宇品から似島の負傷者収容所へ……。その数は、無数、数えきれなかった。

ある婦人は、戸板にのせられて、はこばれているとちゅう、その上で出産をして、兵隊のゴ

ボウ剣で、ヘソのおをきったという話もきいた。母子ともどもの安全を祈った。

はこびきれなく、のこされた患者が道のはしにずらっとならべて寝かせてあった。爆風で傷ついた人、熱線でヤケドをおった人、ウラニウム線をあびて外見は、変化はないが、白血球が減少して、ゲリはなはだしく、死亡する人。ヤケドのあとが、なん日かたって、ケロイドになり、手、足、顔がひきつる人、それらの人がうごめいていた。

小石をふむ編上靴の足音にむかって、

「兵隊さん　助けてください。

兵隊さん水、水をください。

水を飲ませてくださいおねがいです」

ほとんどの人が、みんな水をほしがった。

衛生兵でもないわれわれの足にすがりついてきた。

「兵隊さん、水……、水……」

「軍医殿、水をあたえてもヨクありますか」

「いかん!!　みだりにやってはいかん」

「ハイッ、しかしこの人たちは水をほしがっております」

「待てッ、負傷者の状態をみてからにしろッ!!」
軍医は無言でめくばせをした。
「兵隊さんアリガトウ」
水筒の水は、またたくまになくなった。ヤケドにつけるクスリもたりない、傷口が化膿して
ハエがとまって、タマゴをおとしたものか、ウジがそのうんだ傷口をはいまわる。
「痛いよーう、痛い」
手もつかえない患者は苦しそうに顔をしかめる。
あちらでも、こちらでも……小人数のわれわれでは、とても手がまわらない。
どうすることも、どうしてあげることもできないもどかしさに、わたしは泣いた。
「ガマンしてください。ガンバるんですよ」
涙声ではげますより、すべはなかった。
「兵隊さん、わたしたちはどうして、こんな目にあわなければならないんですか……。かたき
をとってくださいおねがいします」
燃えつきる生命の灯が、きえかかるかのように……小さな声で、そういって、その人たちは、
つぎつぎと死んでいった。

わたしはこみあげてくるいかりと、くやしさに身体が小きざみにふるえるのを、おさえることができなかった。

その晩はいまわしいキノコ雲もきえて、夜空にくっきりと月がうかんでいた。

その月をおおくの傷ついた人たちはどんな気持ちでながめていたことであろうか……。

わたしの手をにぎって死んでいったいく人もの人の手のぬくもりを、わたしは今でもわすれることができない。

昭和二十年八月六日午前八時十五分。

広島の上空に飛来した米軍のボーイングB29が投下した新型爆弾は、地上やく五〇〇メートルの上空で爆発!! 一瞬にして広島全市を灰燼に帰してしまった。

人びとは、原子爆弾とは知らず、七十数年、人類は住めず、草木も枯れ、たとえ育ったとしても、サツマイモなどは奇型なものになるとおそれおののいた。この原子爆弾を、当時の人はピカドンといっていたのである。

召集解除

追討ちをかけるように八月九日、長崎にも再度原子爆弾が投下された。
くわえてソ連が、日ソ不可侵条約をやぶって、日本に宣戦布告してきた。わが軍にとっては、おおきな打撃をうけたのである。泣きつらにハチとはまさにこのこと。
連日にわたる救援作業に出動していたわれわれは、この報を知ってガックリと肩の力をぬける思いであった。
わたしもこのときばかりは、はるか東の方にむかい、
「こんどこそほんとうにおわかれだ。もうふたたび家へは帰れない。おかあちゃん、サヨウナラ」
と、手をあわせた。
被爆者は、日に日に死んでいった。その数は、ますばかりである。
われわれの作業は、そのさなか休む間もなくつづいた。

そのころになると、ほかの地区から、応援にかけつけた兵隊や、親類縁者の人たちも、市内をあるきまわったため、反射能といって、いったん地上におちた、ウラニウムの放射線がふたたび地面から放射されたものか、そのほとんどの人たちが、被爆者とおなじ状態になってたおれた。

投下されたその日に死亡した人。そして、被爆者は三日目、一週間、十日、十五日と日をおうごとに、尊い生命をうしなっていった。

そして八月十五日。

『朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ似テ時局ヲ収拾セムト欲シ玆ニ忠良ナル爾臣民ニ告グ……

中略

朕は時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス……』

天皇の終戦の詔書の玉音放送をわたしは広島比治山の砲兵団司令部の広場できいた。

将校をはじめ下士官、兵にいたるまでみんな泣いた。きいていたわれわれの間からは、むせび泣く声がもれてきた。あふれでる涙を、だれ一人としてぬぐうものはいなかった。

ここに終戦をむかえたのである。

それを機に、
「降伏は有り得ない。われわれは断固、最後まで抗戦する」
と、いきまく者。
書き置きをのこして、初年兵数十名を引卒して、「もしふたたび戦うことがあれば、じぶんが責任をもってつれ帰る」
と、国へ帰るもの種々さまざまであった。

　そのショックと、いままでのつかれと、放射能の影響がでたものか、わたしの身体の調子もじょじょによわり、ついに発熱し寝こんでしまった。
「岡田シッカリしろッ!!　元気をだせッ」
　マクラもとに戦友があつまって力づけてくれたが、熱のためか、その声もとぎれとぎれでとおくの方で、ささやいているみたいに、よくききとれなかった。
「かわいそうに、岡田もとうとう、ウラニウムにやられたな」
「だいぶ熱がたかいぜ」
「もともと、じょうぶな方じゃなかったからな、なんとかしてやりたいなァ……」
「おい岡田、なにかいいのこすことはないか？」

「ウーン、アリガトウ。オレはねえ……、もう一度、ロッパ一座に帰って有楽座の舞台で芝居をやりたいよッ……」

「……」

返事をする者はいなかった。

だれしも、今までの例をみているので、助からないと思ったのであろう。

「ミカンが、食いたいナァ……」

ミカンがビタミンCを……。白血球をふやすのにきくだろう。なんとか生きのびたいという気持ちが、素人考えで、そんなことをいわせたのかもしれない。

「よし、任せとけ。オレがなんとかしてやるよ」

松ちゃんが胸をたたいた。

炊事の主計係をやっていた彼は、さっそくミカンのカン詰をふたカンもってきてくれた。

「アリガトウ。すまないなァ……」

「心配するな……。それより岡田。丸山定夫さんと、園井恵子さんが死んだってよ」

芸能界にとくべつ興味をもっていた彼がどこからかきいてきたらしい。

丸山定夫さんは八月十六日、宮島(厳島)の存光寺というお寺で、園井恵子さんは、神戸の後

援者の家で十九日になくなったらしい。
わたしは宇品のガイセン館での「獅子」舞台の幕切れの姿を思い出し、お二人のごめい福を祈った。
「おい、岡田。元気をだせ。わしたちは、復員できんるんやで」
川井は、そういうことにはくわしい。
「復員ってなんだ?」
「召集解除のことやないか。シッカリ、センカイ」
川井も松ちゃんも大阪出身である。
「もう、戦争も終わったし、いまさら将校集会所でもあるまい」
わたしは将集へちょこちょこ酒をもらいにいったりしていたので、そう答えた。
「難儀な男やな。ショウシュウたかて将校集会所とちがうねん。召集解除ちゅうたら、家へ帰れるこっちゃ」
「エッ、家へ帰れる?」
終戦になったためか、地方言葉がやけにめだった。
わたしは、「家へ帰れる」ときいてきゅうに元気がでてきた。人間とは、現金なものである。

召集解除とは、召集された兵隊たちが、その任務を解除されて除隊できる。そして復員とは、地方人に復帰して家へ帰れることらしいが、わたしがそんなことを知っているわけがない。いままで一度もきいたことのない言葉なのだから。

兵隊たちは、それぞれの官給品をひとそろえもって家へ帰ることをゆるされた。

わたしは夏冬の軍衣袴、下着、水筒、雑のう、鉄カブトまで（これはあとできいた話であるが、ナベのかわりにつかった者もいたとのこと）。天幕でリュックサックをつくって、そのなかにぎゅうぎゅうづめにして、その他に、事務用品、青と赤のエンピツからカーボン紙、原稿用紙、固型インク、飯ごうのなかにはウドン粉をいっぱいいれて、エッチラ、ホッチラ、かついで帰ることにした。

病みあがりのくせに、よくばったものである。

〝わが物と思えば軽し傘の雪〟

人間、欲と二人づれになると、思わぬ力がでてくるものだ。

「おい、そんなおもい物を家までもって帰るのか。オレは、広島の駅で売って金にする。大阪へ着いたら、重たくて往生しているやつを見つけて、安く買うさ……」

と、いうちゃっかり組や、

「そんなものはいらない。オレは、縫工兵だから、ミシンとラシャバサミ、それから生地をもって帰る」

合理的な者から、倉庫にあった、岡山の花ゴザやタタミ表を荷台にひと山つんで、トラックごと運転して帰るだいたんなやつ。

どこからとんできたのか知らないが、岩国の飛行場へ着陸して、そのままどこかへきえてしまった、とんでもない男とか、人それぞれで、復員にまつわる話はタネがつきない。

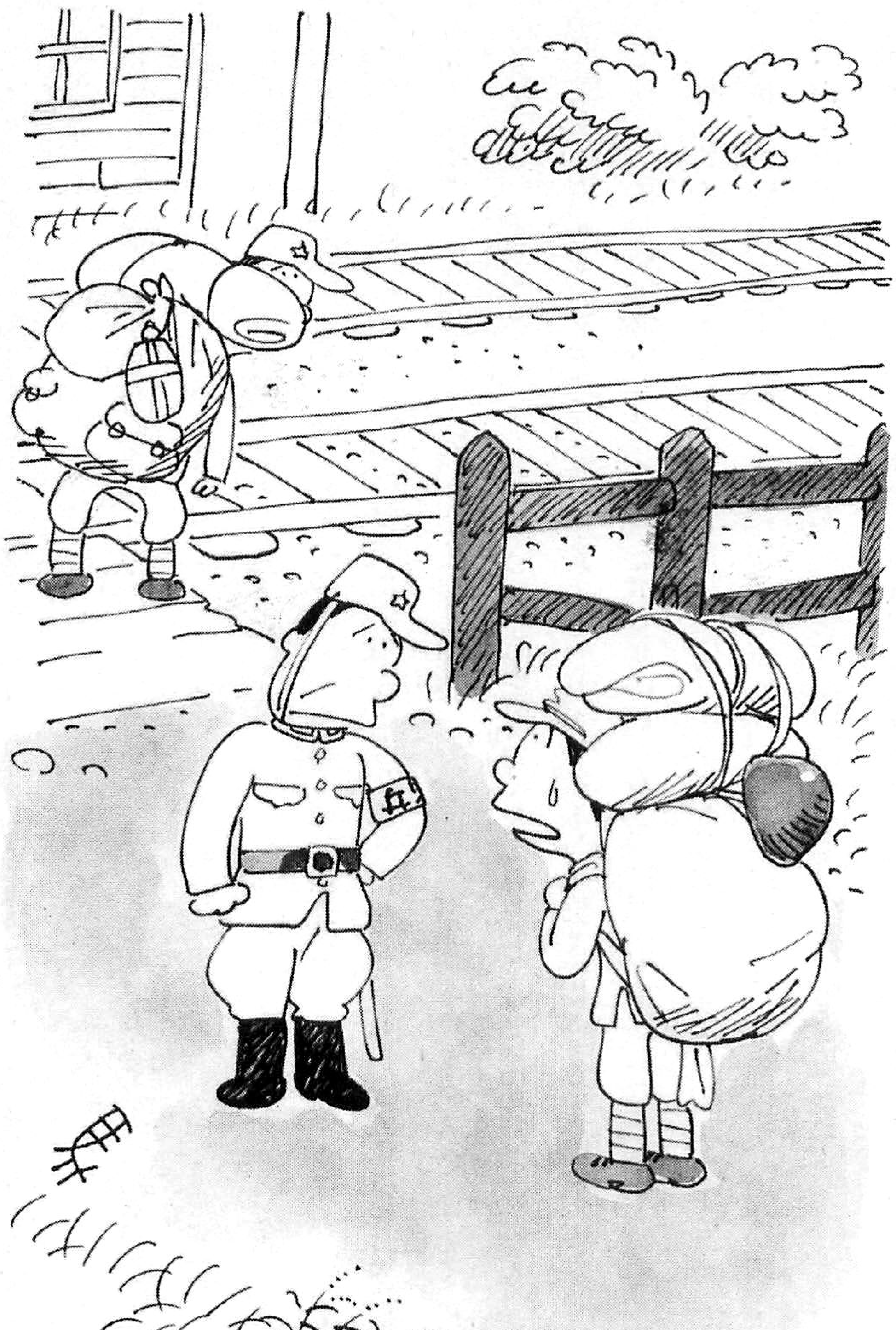
ポツダム進級というのがあった。下士官以上は豪州（オーストラリア）へつれていかれ、ドラムカンおしの重労動をさせられるという、デマみたいなほんとうのようなウワサをきいて、わたしは下士官（伍長）になるのを、ご遠慮申しあげて、いちおう福山の本隊へ帰った。

軍隊手帳はもとより、兵隊姿の写真まで、もって帰るな、焼きすててしまえとおどかされた。それらの物をみんな処分してしまったが、今にして思えば惜しい気がしないでもない。

福山の本隊で二、三日泊まり、復員証明書をもらっていよいよ軍隊ともお別れである。

川井と二人で、本隊をあとに福山の駅へむかってあるきだした。改札口が、むこう側なので、踏切をこえなくてはならない。線路ぎわまできたら、憲兵によびとめられた。

「刃物類は、ナイフにいたるまでいっさいもってあるくな。米軍のMPにみつかると、やっか



いなことになるから気をつけるよう」
と、注意された。

わたしは、愛用(初年兵当時からもっていた)のジャックナイフを、おとなしく憲兵にわたして踏切をわたった。一度おろした荷物がバカに重く感じたのは、身体が弱っている証拠だ。川井に手を貸してもらって荷物を背負いなおした。

駅は復員の兵隊でごったがえしていた。もう階級もなにもない。イモを洗うようにおしたりおされたりしているうちに、いつの間にか川井ともわかれわかれになってしまった。彼は大阪、わたしは東京。とちゅうまでは、いっしょにいきたかったのだが……。
川井広義、左坤松夫、高倉淳一、前田長吉や、宇品の連絡班、派遣班と、ながいつき合いのたくさんの仲間だった仲よしとも、いつの間にかはなればなれになってしまった。

もうふたたびあえるかどうかもわからない。

〝敗戦の日本〟のゆくえはどうなるのか……。だれも知るよしもない。

汽車は福山の駅をあとにした。
昭和十七年九月五日に、新潟県の村松へ入隊して、昭和二十年九月五日に復員。まるまる三年間おまけなし。いかにも、わたしらしい兵隊ぐらしであったのである。

あとがき

子どものころの思い出話のときは、ごく身近の人たちで話をすすめることができたが、今回の、『兵隊ぐらしとピカドン』はとくに対人関係もおおく、人名、地名、日時、その他には正確を期さなければならないので、前回よりも苦労した。

何しろ四十年近く前のできごとなので、戦友知人をたずねたり、手紙、電話で当時のことを確かめてみたが、おたがいにオボロゲで話が前後することがおおかった。

でき得るかぎり努力をしたつもりだが、多少のズレや感ちがいの部分があったら、お許しを願いたい。

執筆に際してお世話になった軍隊関係の諸兄、古川ロッパ先生の未亡人、池田正二氏、友人、知人の皆様に心から感謝の意を表し御礼を申し上げる。

軍隊に関する資料の一部は、毎日新聞社発行の『一億人の証言』を参考にさせていただいた。

本書が戦争のすべてではなく、ホンの一部にすぎない、わたしの体験であるが、〝戦争を知らない子どもたち〟がこれを読んで何かを感じとってくれたら、このうえもない幸せである。

ともあれわたしは、〝戦争は再びあっては、ならない〟と思っている。

戦争がまねいたおおくの犠牲者、戦死した戦友、被爆して亡くなった人びとの霊よ安かれと慎んでお祈りする。

第三部は戦後、被爆の後遺症になやまされながらの闘病生活と〝芸人猫八の今日に至るまでの悲喜こもごもの話〟を書く予定でいる。御期待御愛読を切に願って、あとがきにさせていただく。

のびのび人生論 19　**兵隊ぐらしとピカドン**

1983年8月　第1刷©

定価 900円

著　者　江戸家猫八（えどや ねこはち）

発行者　久保田忠夫

発行所　株式会社　**ポプラ社**

160 東京都新宿区須賀町5　振替東京4-149271

印　刷　新興印刷製本株式会社・有限会社トラヤ印刷所

製　本　島田製本株式会社

N. D. C. 159／222 p／20cm

8012—086019—7764

著者紹介



江戸家猫八
(えどやねこはち)

1921年、初代江戸家猫八の六男として東京巣鴨に生まれる。本名は岡田六郎。小松川高等小学校を卒業する。
1941年、古川ロッパ一座の座員となる。
1942年、応召される。
1945年、広島市で被爆し、復員する。
1949年、江戸家猫八を襲名する。NHKのテレビ「お笑い三人組」で人気を得る。寄席芸人と俳優と両立させて、映画、テレビ、舞台に出演している。
1979年、1980年に芸術祭優秀賞を話芸で受賞する。
著書には『吾輩は猫ではない』(ポプラ社)がある。

ポプラ社

定価900円

8012－086019－7764